
Wild Angel

御囃子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wild Angel

【Nコード】

N9580X

【作者名】

御雛子

【あらすじ】

チビでバカでお調子者。だけど喧嘩無敵の主人公、早瀬友成は不良の癖に、不良の自覚は一切無し。そんな彼は、涼浪高校に進学した。しかし、中学時代に狂犬と呼ばれるほどの不良だった為、案の定様々な不良に狙われる羽目になる……。幼馴染や友人、悪友達と共に、喧嘩にバイト、勉強に恋愛？ 兎にも角にも大暴れ！！ 痛快！！ ド派手！！ 笑い(?)と涙(?)と青春の正統派不良小説、ここに始動！！

序幕（前書き）

以前掲載していたものを、リニューアルしました。
折角なので、読んで見て下さい。

序幕

【不良】

1. よくないこと。
2. 性質や品行の悪いこと。また、そのような青少年をさす。

小さい頃から悪ガキで、何時も先生に目を付けられていた。何時からそうなったのかは、本人の記憶には無い。

しかし、周りから言わせてしまえば、見事に立派で完全な不良少年になっていた。タバコも吸うし、酒もそこそこにたしなむ。加えて、喧嘩も強い。その手の素質は十二分に有った。

ただし、本人に不良と言う自覚が、全く無い事に大きな問題があるのだが。

そして、彼は人より随分と体が小さかった。中学生と比べても、変わらない程度の背丈しかない。

しかし、頭二つ分は大きな相手でも、彼は全く怯むことはなかった。三発殴られたら、一発は殴り返す。相手が「参った」と言うまで、自分からは絶対に退かなかった。本人は「喧嘩は根性」と、笑いながら言っていた。

こう言ってしまうと、随分悪い印象になるだろう。だが、自分から闇雲に喧嘩を仕掛けたりするわけではない。

ただ、見た目の格好が如何にも不良少年。そういう理由で、他の不良達から喧嘩を売られやすい。しかも、見た目も小さいから、よけいに喧嘩を売られやすい。

そこで律儀に喧嘩を買っていくから、喧嘩の回数が増える。そこから、悪い噂が広まる。それを中学校の三年間で、何回も何十回も繰り返していた。

要するに、悪循環に陥った訳だ。

そういう理由で、本人が意図しない間に随分と彼の噂が広まってしまう、中学三年の時点で「東中の狂犬」と言う、大層な悪名が轟いていた。

その少年の名は「早瀬友成」^{ハヤセトモナリ}。昨日から、^{スズナミ}県立涼浪高校の一年生である。

電話 友成参上!! (前書き)

余談ですが、某ラノベ新人賞に応募しましたが、案の定落選してました(笑)

電話 友成参上!!

県立涼浪高校。平均成績は中の下。一学年四クラスと、規模も至って普通。

男子は学ランで女子はセーラー服と、制服も普通。不良の数は、全校生徒の約三分の一程度。何処の街にでも有りそうな、やや不良よりの高校である。

不良校と言っても、絶対的な番長が居て、軍隊並みに上下関係が取れている訳でもなければ、地方の悪名高い不良がひしめき合うと言うような、漫画に描いた様な不良高校という訳でもない。

しいて言えば、ちよつと成績の下がる学生や、多少素行のよろしくない青少年少女の通う普通科高校に当たるだろう。

時刻は朝八時過ぎ。友成は眠そう、尚且つダルそうな表情で、学校への道程を歩いている。

曲がり角で、出会い頭に女子学生ぶつかるとか、カツアゲされているいじめられっ子を助けるだとか……。生憎、下手な漫画に描かれているような、ベタな展開になる事もなく無事に学校へ到着した。(ちよつと、期待してたんだけどな……)

本人の正直な気持ちは、そんな感じであった。

しかし、世の中思い描く事が簡単に起こるほど、都合は良くない。教室への扉の前で、小さな溜め息を吐き出してから、教室へと足を踏み入れた。ちなみに、彼の教室は一年A組になる。

「おいーす」

友成は、眠そうな顔をしながら自席に座った。

「おはよ。友成」

友成に向けて、女子生徒が声をかけてきた。挨拶をしてきたのは、^{ナルミヤ}成海彩。黒のショートカットのヘアースタイルに、整った顔立ち。加えて、スタイルも悪くない。ただ、気の強い性格が災いしてか、

未だにフリーであり、付き合った経験も無い。

友成とは幼稚園からの幼馴染みで、小、中学校の九年間の内で六年は同じクラスだった。今年で三年連続、七年目だと言う。

「アンタにしては、珍しいね。遅刻の常習犯だったのにね」

彩が茶化すように、友成に言った。

「一応な。進学早々に遅刻するほど、常識の無い人間じゃねーよ」
そう反論しつつも、友成は欠伸を噛み殺していた。

「ふーん。でも、眠そうだね」

「ああ……、くそ眠いわ。明日から、起こしに来てくれよ」

「ヤダよ。幼馴染みだからって言っても、面倒だもん」

「ついでに、朝飯と洗濯も頼みたい」

「贅沢すぎ……。断固拒否するわ」

「……だよな。俺も頼まれたら、ぜってー断るっての」

友成は無然とした表情で、窓の外を見た。そんな他愛もない会話で時間を潰していると、ホームルーム前のチャイムが鳴りだしていた。

それと同時に教室の扉が、勢い良く開いた。

「……危ない危ない。遅刻すれすれだったな」

制服姿の男子が肩で息をしながら、教室に入ってきた。自席に着席すると、ふうと息を吐いた。

アイハラユウタ

彼の名は、相原雄太。友成、彩の中学からの友人である。アイドルグループに入れそうな程のイケメンで、成績優秀に運動神経も良い。天に二物も三物も、与えられてしまった人間と言える。周りにどんな人間かと言われれば、ひがみや妬みの言葉が飛び交う始末だ。付き合いたがる女性も多いが、こちらも事情により彼女は居ない。

「おう、雄太。えらくギリギリだったな」

「おはよ、雄太。随分、疲れた顔してない？」

友成と彩は、妙に疲れた顔をした雄太に言葉をかけた。

「オス、友成に彩ちゃん。しかし、珍しいな。友成が、遅刻してないなんて」

雄太は、ニヤニヤしながら言い返した。

「お前に言われる筋合いはねーよ。どーせ、雄太の事だ。新しいゲーム買って、徹夜して寝坊したんだろ？」

「それが、そのとおりでさ。最近出たギャルゲーが、とてつもなく面白くて。止め際が解らなくて、寝てないんだよ」

雄太は、自信満々にそう言った。女子生徒がキヤーキヤー言いそうな程の爽やかなスマイルだが、言ってる台詞は対極的に格好が付いていない。

雄太が彼女を作らない理由は、単に二次元にしか興味が無い。分かりやすく言えば、超が付く程のオタクなのである。

「……お前、アホだな」

友成は、呆れ気味に突っ込んだ。

「まったく……。それで、私より成績が良いんだから。意味わかない……」

彩も友成と同様に、呆れた様子で溜め息を吐き出してそう言った。「二人とも、二次元は最高だぞ」

満足そうな笑顔を見せて、親指を立てたグーサインを作りながら、雄太は嬉しそうにそう言った。

「俺には、その趣味はねえよ……」

「……右に同じく」

雄太の意見を、一秒足らずで否定する二人だった。

その日の授業は、滞りなく行われた。とは言いが、入学直後なので殆ど教師の自己紹介の等の雑談や、ホームルーム形式の授業が繰り返されただけである。これと言って、ノートや黒板を汚すような事柄は全く無かった。

そして放課後は、部活の勧誘や各生徒の雑談が校舎を賑やかにしていた。

「なあ、雄太。何か部活とか入るつもりあるか？」

鞆を背負いながら、友成が訪ねた。

「俺は、何処にも入る気無いな」

雄太は鞆に、勉強道具を片付けながら言った。

「そうなんだ。雄太くん、運動も出来るのに？」

彩も、二人の会話に横槍を入れた。

「ああ。部活入ると、遅くなるからさ。アニメが見えなくなるから、困るんだよな。それに、深夜のアニメも見たいしさ。部活やると、疲れて寝ちゃいそうだし。それと、ゲームもやらなきゃいけないし……」

雄太は、身振り手振りを二人に見せながら、細かく解説を始めてしまった。様子を見る友成と彩は、ハアと溜め息を吐き出した。そこから、延々と続くであろう雄太の演説を中断させるべく、一言だけ告げた。

「そんな事するか!!」

ハモった突っ込みが、教室に響いた。

「重要だと思うんだけどなあ……」

雄太はポツリと、寂しげに呟いた。

各生徒が雑談をしながら、帰りの支度をしていた時だった。

扉が乱暴に開くと、大柄な金髪の不良生徒を先頭に、何人かの不良達がズカズカと乱入してきた。教室に残っていた生徒達の視線全てが、不良生徒達に注がれる。

教卓を、バンと叩きつけて、開口一番に不良が息を巻く。

「おう、早瀬友成って奴はどいつだ!!」

教室中に聞こえる大声で、金髪の不良が友成の名を呼びつけた。

その瞬間、クラス全ての視線が友成の方へと向いた。

「俺がそうだけど。テメエこそ、誰だよ？」

友成は自分を指差しながら、大柄な生徒を睨み付ける。

「おめえが早瀬……。随分ちいせえな」

座っている状態を差し引いても、友成の体は小さい。そして、金髪の不良の体格は、かなり大柄で筋肉質である。

「……チビっていうな。オメエがデカすぎるんだっての」

友成は、身長のことを言われて、表情をムツと強張らせる。

「俺は1・B。元西中の手塚春樹^{テヅカハルキ}ってモンだ」

春樹と名乗った男は、自信満々といった表情でニヤリと笑う。

「……んで、俺に何の用だよ」

友成は仏頂面を保った状態で、素っ気なく答えた。あまり乗り気で無い事は、容易に窺える。

「俺は涼浪の一年を仕切るつもりだ。早い話が、一年の喧嘩ナンバーワン決定戦って訳で、俺とタイマン張れよ」

春樹は、友成へ向けてビシッと指差した。その表情は不敵に笑みを浮かべ、如何にも自信が満ち溢れていた。

「メンドーだからヤダ」

友成は、ふて腐れた様にそう答えた。

「はあ！？ テメエ、それが“東中の狂犬” って呼ばれた奴の言うことか！！」

「知るか、そんなもん。仕切りたきや、テメエが勝手にやれよ。雄太、彩、さっさと帰ろうぜ」

友成は鞆を担ぎ、春樹の横を抜けて廊下に出ていった。

「……ちい。なめやがって、あのチビ！！」

あしらわれたような態度に、納得いかない春樹。廊下に飛び出て、友成の後ろ姿を睨む。そして、走って追い付くと、友成を目掛けてパンチを繰り出した。

（死ねや、チビ！！）

長身からの打ち下ろし右フック、しかも後ろから。友成には、完全に死角だったのだが。

——ブンッ！！

勢いの良い風切り音を残し、拳の先には何もなかった。

（……なっ、避けやがった！？）

拳の到達よりも素早く、身を屈めて避けた友成。その勢いで、器械体操並みのハンドスプリングで春樹との間合いを取った。

「危ねえな……。人を後ろから殴っちゃいけませんって、習わなか

ったか？」

振り向き様に春樹を睨み付けながら、友成がドスの聞かせた声を出す。

「けっ……。次は、顔面に打ち込んでやるよ！！」

春樹も、友成を睨み付けて啖呵を切った。

「後で体育館裏に来やがれ」

春樹は、吐き捨てる様にそう告げて廊下から立ち去った。それと同時に、教室を出た雄太と彩は、友成に追い付いた。

「お、おい。大丈夫なのか？」

雄太が聞くと、友成は無言のまま頷いた。

「友成……。また、喧嘩するの？」

彩は、心配そうに友成を見つめた。

「しねーよ。あのデクが、勝手にやりたがってるだけだ。ほっとけ」

友成は、部外者が見ても解る位、不機嫌にそう言った。

「……そう。よかったー」

彩は安堵の息を漏らした。

「そうか……。でも、あの手塚春樹って奴は“西中の大魔神”って呼ばれてた不良だぞ。厄介な奴に、目を付けられたな……」

雄太は、まだ神妙な面持ちだった。内心、ほって置いて引き下がる相手とは思えなかったからだ。

「……関係ねーよ、そんな事。さて、帰るぞ」

「あ、待ちなよ。友成」

ツカツカと歩き出した友成を、彩は小走りで追いかける。

「雄太、行こうぜ」

友成は、振り向きながら雄太を見た。しかし、雄太は急にハッとした表情を見せていた。

「ん……。ああ……。携帯忘れた。取りに戻るから、先に帰っててくれよ。すぐに、追い付くからさ」

「ふーん。なら、先に帰ってるぜ」

雄太は教室に戻るための口実で、友成、彩と別れた。

「さてと……」

雄太の携帯電話は、制服のポケットに入っていた。そして、何かを決めた様子で雄太は体育館裏に向かって歩き出した。

体育館裏に着くと、乱入してきた不良生徒達が立っていた。その中心にいる春樹は、腕組みをしながら、たどり着いた雄太を睨み付ける。

「……西中の大魔神、手塚春樹だな」

ズバリと名前を言われた春樹は、ニヤリと不敵な笑みを見せた。
「デメエ、さつき早瀬と居た野郎だな？」

徐に胸ポケットからタバコの箱を取り出した。クシヤリと歪んだソフトボックスから、慣れた手付きで一本のタバコを取り出した。

「俺は相原雄太。早瀬友成なら、帰ったよ」

そう聞くと、春樹はタバコを一本口にくわえて、安物のライターで火を点けた。肺に含んだ煙を吐き出すと同時に、雄太が言葉を続ける。

「アイツは、誰が一番とか興味無い奴だからさ」

じゃあなと告げて、雄太は帰ろうとする。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「おう、待てよ!!」

春樹は怒声を出して、雄太の足を止めさせた。雄太はクルリと、春樹の方へと振り返る。

（……やっぱり、こうなっちゃう訳ね）

雄太は観念したかのように、苦笑いを浮かべる。

「デメエ、早瀬とはダチなんだろう？」

春樹は雄太を睨み付け、少しだけ口元をニヤリとさせた。そのまま制服を脱ぎ捨てると、筋肉の鎧を纏った豪腕が、日光に照らされる。

「……だったら？」

「ダチのイケメンが、ボコボコになっても……アイツは黙ってる野郎か？」

春樹は不適に笑い、くわえたタバコを、ペツと吐き捨てた。タバコの火を、つま先でグリグリと踏み消した。

「アンタ……俺のこと、舐めすぎじゃない？」

雄太は少し不機嫌そうな表情を浮かべて、鞆を地面に投げ捨てた。

学校からさっさと帰宅した友成は、集合団地の一室にある自宅にて、一人で寝っころがっている。今現在、暇を持て余している状態だ。

「……腹減ったな」

友成の口から何気なく言葉が零れてしまうと、同じタイミングで玄関のインターホンの機械的なチャイムが部屋に響いた。

「誰だよ、こんな時間に……」

面倒くさそうに、よっこらせと聞こえてくるような雰囲気では体を起こして、ドアに向かう。

「よ、元気にしてる？」

ドアを開くと、玄関前に立っていたのは彩だった。

「誰かと思ったら、彩かよ……」

「あっそう。そう言う事言うんだ……」

彩は、不満そうに呟くと、手に持っていたビニール袋に入っているタッパーを、友成に向けて見せびらかした。

「すいません、どうぞお入りください」

中身を察したのか、友成は態度をコロッと変えて、下手に出る。

それを見た彩はニコツと笑って、友成の自宅に上り込んだ。

「お邪魔します」

彩は早速、持ってきたタッパーをテーブルの上に広げた。

「お、美味そうじゃん」

タッパーの中身を見た、友成の目がキラキラと輝きます。中身は、肉ジャガとキンピラごぼうと言う、実に家庭的なおかずであった。

「あんた、コレ好きでしょ？ お母さんが作り過ぎてて、折角だから持っててやれって言われてさ」

彩がそう言っている側から、友成は既に棚から箸と茶碗を出していた。

「理由は何でも良いっての。ありがてえよ」

友成は、そう言ってから、更にレトルトの白いご飯を、レンジに入れて温め始めていた。余程早く食べたいのか、餌を目の前にした空腹のペットの様に慌ただしく動いている。

「そんなに慌てなくても、誰も盗らないわよ……。私も食べてきてるし」

彩は、忙しく食事の準備をする友成を眺めながら、ヤレヤレと言いたそうに、大きなため息を吐いた。

「だってよ、好きな食い物が目の前に出されたら、我慢できねえじゃん。さて、いただきます!!」

お膳の前で、一回両手を合わせると、友成は目の前の食べ物を一気にがつつき始めた。

その食事の様子は、早食い選手権の選手かと思える程に、一気にご飯を口に入れて、窒息してしまうのでは無いかと思える位、早いタイミングで飲み込んでいく。

餌を丸のみする蛇の方が、よっぽど丁寧に食べる。彩はそんな事を内心で思いつつ、友成に喋りかける。

「……そう言えば、お婆さんは今日も仕事なの？」

彩に視線をチラリと視線を移した友成は、モゴモゴと口を動かすが、声は出せていない。一気に口の中の物を飲み込み、更にお茶で食道から胃袋へと流し込んだ。

「……ぷはぁ。お袋は仕事だよ。まあ、長距離のトラック運転手だからよ。週に一回帰って来るかどうかだしな」

そう呟いて、友成は再び目の前の食事を、口の中の体積の限界まで詰め込んだ。

「ねえ、友成」

「……？」

口が塞がっている友成は、目だけで彩に返事を返した。

「あんたが良かったら、私の家に食べにきなよ。どうせ、家族ぐるみの付き合いなんだし。」

それに、あんたって一人暮らし出来そうに無いもん」

友成は、再び丸のみに近い形で飲み込んでから、口を開く。

「気持ち、ありがてえけどな。そこまでしてもらっちゃ、悪いしよ。俺でも、一応遠慮ってものはするぜ？」

そう言った友成の表情は、ニッと笑っていた。

「ふふ。あんたって、やっぱり変わってるね」

彩も、そう返事をして微笑んでいる。

「……そうか？」

友成は、首を斜めに傾けながら、彩を見つめる。

「……ま、へそ曲がりなのは昔から知ってるけどね」

少しだけ呆れた様に、彩はそう言った。しかし、顔はどこか嬉しそうだった。

「……？」

友成は疑問に思いつつ、嬉しそうな彩の表情を眺めながら、一通りのおかず全てを平らげた。

「……ふいー、食った食った。ごちそうさん」

お茶を一気に飲み干して、胃袋の中が満タンになった事を、満足したようにそう言った。

「お粗末様。しかし、あんたって食べるの早いね」

「そうか？ 普通だと思ってるぜ」

ちなみに、友成が食事を開始して、正味十分程度しかかかっていない。

「さて、私もそろそろ、帰るね」

彩がそう言って、持ち込んだタッパーをビニール袋に片づけた。

「おう。また明日な」

友成はそう言って、早速タバコを一本口にくわえていた。ライターでジュボツと火を点けると、何の躊躇もなく不健康な煙を美味そうに吸い込んだ。

「アンタさ……未成年なんだから、そんなに堂々と吸うな!!」
彩が、友成の呆れた行動に早速ツツコミを入れた。

「だってよ……飯食った後の一服って、うめえんだぜ？」

友成はお構いなしで、笑顔を見せながらタバコを手に持ち替えた。

「まったく……。バカ」

彩は不機嫌な声で呟いて、ドアを乱暴に閉めて退室してしまった。

「……そんな、不機嫌にならなくてもよ」

一人残された友成は、煙の混ざったため息を大きく吐き出していた。

翌日。

「ふぁー、眠てえ……」

「眠いって、もう五回は繰り返してるわよ……」

欠伸で涙目の友成と、ヤレヤレと言いたげな彩が、通学路を歩いていた。

「そう言えば、雄太くん。昨日は、結局こなかったね」

「どうせ、机探しても携帯見つかんねえで……。結局、鞆の底に入ってたつうオチじゃねえのか？」

彩はウーンと首を少し傾けたが、友成は特に気に留めていなかった。あれこれ話をしていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「……おす、お二人さん」

二人は振り替えるなり、かける言葉が見つからない状態だった。

「雄太くん、その顔……」

そこに立って居たのは、顔中に絆創膏やガーゼを張り付けて、アザだらけの雄太だった。

「雄太、お前……昨日の連中にやられたのか!？」

友成の問いに、雄太は悔しそうな苦笑いを見せた。

「……いや。手塚とタイマンさ。……アイツ、かなり強いわ」

雄太から聞くと、友成の表情は見る見るうちに怒りの色に染まっていく。今にも走り出して、学校に向かい突っ走りそうな勢いだ

った。

「待ちなよ、友成!!」

彩は強気な言葉で、友成を制止させた。

「あんたさ、昨日の不良と喧嘩するつもりだよね?」

「だったら?」

友成は鋭くなった眼で、彩の瞳を見つめた。

「止めるわよ。例えば相手が暴力を振るってきても……暴力なんかじゃ、何も解決しないじゃない!!」

彩は、怒ったように言った。

「……彩。俺は、喧嘩しに行くんじゃないよ」

友成は一呼吸置いて、再び口を開いた。

「……ツレの敵討ち。だから、俺は悪くねーっての」

人差し指を立てて、そう言葉を出したのであった。そして、友成は学校へ向かって駆け出した。

「ちょ……、友成い!!」

彩は名前を叫ぶが、友成の後ろ姿はあっという間に小さくなっていった。

「……ただの屁理屈じゃない、あのバカ」

不機嫌と呆れの混ざった表情の彩は、大きな溜め息を吐き出した。

「俺はあの方が、アイツらしいと思うけどな」

それと対照的に、雄太のズタボロの顔は少しだけ笑っていた。

一時限目開始のチャイムは、既に鳴っていた。しかし、体育館裏には、春樹と同じクラスの取り巻きが何人か居た。春樹は頬に張られた絆創膏を、人差し指で撫でながら、くわえたタバコの煙を吸った。

「手塚くん。アイツ、来るのか?」

取り巻きの一人に聞かれると、春樹はタバコの煙を吐き出しながらニヤリと笑った。

「ダチがあんだだけ、ボコられたんだ。来るに決まってるぜ。まあ、

あのイケメンも空手やってたらしいから、少しは強えみてえだが、俺には通用しねえよ」

「そりゃ、そうだよな」

ガヤガヤと、待ちわびる様に不良達は会話をしていた。

「あ、俺飲み物かってくるわ」

一人が、場を離れた。

その十秒後だった。

――バキッ！！

聞こえるくらいの、乾いた打撃音が響いた。音の発生場所に目を向けると、地面に転がる不良と仁王立ちしている友成の姿があった。（……コイツ、一撃で沈めやがった）

小柄な友成の体からは想像出来ない、強力なパンチに、春樹は驚きと嬉しさの混じり合った、奇妙な感情が沸き上がってきた。

「やっと来やがったな」

春樹は立ち上がり、肩を回しながら友成に歩み寄る。

「おー。雄太が随分世話になったなあ……」

友成は、指をゴキゴキと鳴らす。その表情は、誰の目から見ても怒っている事がよく解る。

「救急車の手配はしてきたか？ チビ助！！」

「デメエを乗せるようにな、デク野郎！！」

長身から、友成を見下す形の春樹は不敵な微笑を浮かべている。

また友成も、見上げる様にして、春樹を睨み付ける。

その表情、その目付きは、狩りをする為に獲物を見る肉食獣の様に鋭く、お互いの間合いを取り合う様に、間隔を縮めていく。

「……ブツ殺す！！」

春樹がそう言葉を吐くと、両者が同時に地面を蹴った。間合いが一気に縮まり、射程距離に入った瞬間。

先手を撃った、春樹が拳を振りかざす。

「オラァ！！」

――ブンッ！！

春樹が大振りの右フックを繰り出すが、友成は難なく避けて懷に踏み込んだ。

「シャラァ!!」

——ガツンッ!!

友成の右拳が、春樹の顔面を捕らえ鈍い音が響く。

「もう一丁!!」

——バキヤァッ!!

今度は右の肘で、春樹のアゴをカチ上げた。春樹の顔が持ち上がった。

「……フンガァ!!」

——ベキヤァ!!

しかし、春樹も負けじと左拳を打ち下ろした。友成の顔面にパンチがヒットすると、友成は大きく体制を崩す。

——ズドォッ!!

更に右のボディブローを食らうと、小柄な体は浮き上がって、一メートル近く後退してしまった。友成は、一旦バックステップして間合い広げ、距離をとった。

（……くそつたれ。なんつーバカ力だよ、このデクは……）

（今のボディで倒れねえつつうのは、どういうわけだ？ このチビ、結構やるじゃねえか……。）

お互いにらみ合い、再び間合いをジリジリと詰めていく。

そして、再び拳を振るって殴りあう。

「ウラァ!!」

——バキヤァッ!!

春樹の左フックが、友成の顔面にヒット。

「セイヤァ!!」

——ドゴォッ!!

負けじと、友成もミドルキックをぶち込んだ。豪快な打撃音を響かせて、何発も殴り合い、蹴り合い、お互いの力は均衡していた。

「……ハァ……ハァ」

「……ゼエ……ゼエ」

数分間の攻防。格闘技のような駆け引きやテクニックは、一切ない。己の持てる力を振り絞った全力の殴り合いは、見ていた不良達の視線を釘付けにさせていた。

しかし、真正面からの殴り合いの末、二人ともダメージは限界に近かった。

（……クソ。もう、足に来てやがる。大したパワーじゃねえか、このデク野郎）

（チキシヨ……流石にキツイぜ。相当タフだ、このチビ助……）

相手を沈めるには、渾身の一撃を繰り出すしか、手は無い。お互い、あと一撃で決まるのは解っていた。

「うおおお!!」

「しゃあっ!!」

両者の雄叫びが同時に上がると、再び間合いが狭まる。

春樹が、一瞬早く右フックを繰り出した。

——ヒュン!!

渾身の力で、拳を振りぬいた瞬間、春樹は自身の目を疑った。

（……消えた!?!）

空振りした拳。目の前に居た友成の姿が、一瞬の間に消えていた。そして、ハッと気付いて、視線を下に向けると、しゃがんだ状態の友成が居た。

（しまっ……）

春樹がそう思った瞬間には、既に遅かった。

——ゴシャアアッ!!

しゃがんだ状態からカエル飛びの要領で、ミサイルの用に頭突きを繰り出した。

友成の頭突きは、完全にカウンターの状態でアゴを撃ち抜いていた。鈍い音が顔面から響くと同時に、春樹の大きな体は、ズシンと後ろに倒れ込んだ。

「……いってえ」

沈んだ春樹は、青空を見ながらポツリと言葉が出てしまった。

（まさか、こんなチビに見下ろされるとはな…）

倒れた春樹は、友成を見上げるしかなかった。すると、友成が春樹を見下ろしながら、口元の血を拭ってニヤツと笑った。

「雄太の借りは返したぜ……“春樹”。あとよ、あちこち痛てえから帰って寝る」

そう言い残して、友成はその場を立ち去った。立ち去る小さな背中では、春樹にとっては、この上なく大きく感じていた。視線を空に戻すと、大の字になったまま自分自身が笑って居る事に気が付いた。（……久しぶりに負けちゃったな。でも……全力のタイマンで負けちゃったんだ。悔いはねえ……かな？）

少しだけ物思いに吹けて、空を見上げていた。すると、取り巻きの不良が視界に入ってきた。

「……手塚くん、大丈夫かよ？」

取り巻きの一人が、心配そうに春樹に聞いた。

「……見たまんまだぜ」

春樹はムクリと、上体を起こした。胸ポケットから取り出したタバコの箱は、クシャクシャになっていた。

グニヤリと曲がったタバコを、一本取り出して口にくわえる。

「……クソ。次は、負けねーよ」

そう呟いて、曲がったタバコに火を点けたのだった。

友成は体育館裏を離れ、昇降口に向かった。下駄箱に着くと、ロボロの顔をニヤリとさせた雄太が居た。そして、壁にもたれながら友成を見る。

「友成もロボロボだな」

「……バーカ。楽勝だったよ」

友成は、アザだらけのすまし顔を見せて答えた。

「……ふーん」

雄太は、何かを言いたそうな、ニヤニヤとした顔をする。

「……んだよ。俺はアチコチ痛えから、帰って寝るんだよ」

「楽勝じゃないだろ、それじゃ……」

雄太がそう突っ込むと、友成は顔をムツとさせた。

「……うるせーよ。じゃあ、また明日な」

そう言って靴を履きかえて、学校を出ようとした。しかし、靴を出した所で誰かに肩をガシッと捕まれた。

振り向けば、そこに居たのは彩だった。

「……ゲッ、彩」

彩は、明らかに不機嫌そうな顔をしている。

「……保健室行ってから、教室に戻るよ」

「マジかよ……。痛えから、帰ってえんだよ……」

「うるさい、自業自得だよ!!」

彩は強引に、友成の腕を掴むと、ズルズルと引っ張りながら、保健室に向かっていった。

(……俺も、教室に戻るかな)

二人を見届けた雄太も、自分の教室に足を向けたのであった。

翌日の昼休み。

昼食時の込み合う学食に、友成と雄太は来ていた。友成は先に席に座って、食事を始めていた。

「……友成、素うどん一杯だけなのか？」

雄太は、カレーライスとサラダが乗っているお膳を、テーブルに置きながらそう聞いてしまった。

「……悪いかよ？」

絆創膏だらけの、ボロボロの顔をした友成は憮然と答えた。

「金無えし。……アゴが痛えから、噛みたくねえんだよ」

そう言っ、うどんを一口すすった。雄太はついつい観察してみると、確かに噛まずに飲み込んでいる状態だった。

「そういう事ね」

雄太も、カレーをスプーンで一口含んだ。二人が昼食を食べてい

ると、二つ隣の座席にズタボロの顔した春樹が座った。

「……よお、ひっでえツラだな」

友成ニヤニヤしては、春樹を茶化すように言葉をかけた。

「……テメエも、同じだろうよ」

春樹はきつちり言い返してから、カツ丼を一口頬張った。そこから、暫く無言で食事が続いた。

「……オイ、お前ら」

春樹が、不意に口を開いた。

「……んだよ？」

「何だ？」

友成と雄太が、同時に返事をした。

すると、春樹が制服のポケットから、グシャグシャになったラーメン屋のチラシを差し出した。

「何だコレ？」

チラシを手にとった、友成は聞いた。

「俺ん家、ラーメン屋なんだよ。今度食いに来たら、サービスしてくぜ」

そう言って、春樹は残りのカツ丼を、さっさと掻き込んだ。そして、じゃあなと言って食堂を後にした。

「……ラーメンねえ」

「まあ、気が向いたら行ってみようぜ」

そう呟きながら、チラシをマジマジと眺める。文字ばかりの、如何にも手作りと言えるチラシを見つつ、二人は残りの食事を掻き込むのであった。
？

壱話 友成参上!! (後書き)

登場人物等、細かい設定は追々載せていく予定です。

弐話 涼浪の先輩方（前書き）

週一の更新を、心がけていきたいですが……難しいかなあ。

多分、この先は金曜辺りに更新していくと思います。

式話 涼浪の先輩方

入学から約二週間が経過した。桜の花びらは、すっきりと散ってしまっていた。

本日も、ポカポカ陽気。春の気候は、程よく睡眠を誘ってくる。もっとも、友成自身は季節は関係無しに、授業中は爆睡するのだらう。

友成自身、春樹とのタイマン以降は、特に問題は起きていなかった。ただし、問題行動に関しては、多々合ったりはするのだが。

「ふうー……」

すっかり、絆創膏の取れた顔の友成。生徒指導の教諭が目撃しうものなら、全速力で走ってくるに違いない。だが、それに構う事無く、美味そうにタバコの煙を吐き出した。

「……やっぱ、食後の一服はうめえな」

春樹も喫煙暦の長いお父さんも顔負けしてしまう位、慣れた手付きでタバコを吸っていた。二人とも当然未成年だが、その行為に躊躇いのかけらは見当たらない。

「友成、ところでよ……」

「何だよ。春樹からどの部活入る……なんて、まず無えよな？」

タイマン以降、二人はすっかり名前で呼ぶような仲になっていた。友人と言うべきか、悪友と言うべきか。

「そりゃそうだ。俺とお前で、コンビ組まねえか？お前となら、無敵コンビになるぜ？」

「メンドーだから、やだ」

春樹の誘いに、友成はあっさり断った。

「お前さ……。そんだけ喧嘩強いんだぜ？ もつとよ、こう…ガンガン行く気は無いのかよ!!」

「ねーよ。お前とタイマン張ったのも、そもそもお前から喧嘩売ってきたからだろうが……」

友成はヤレヤレと溜め息を吐くが、春樹は拳をグイッと突き出して、更に言葉を続けた。

「男ならよ、拳一つで成り上がるって成し遂げてえじゃねえか!!」
春樹は、自信満々の顔を見せた。

「……お前さ、Vシネマとか漫画とかの見すぎだわ」

友成は呆れ気味に、二度目の溜め息を吐き出した。

その後、教室に戻り五時間目の授業が始まった。友成の場合、五時間目と六時間目は教諭の言葉を子守唄に案の定睡眠学習になっていた。そして、放課後になった所でようやく目を覚ました。

「……ふぁーあ。良く寝たわー」

友成は、グイと背を伸ばした。

「アンタは、何しに学校来てるのよ……」

彩は、呆れながら突っ込みを入れた。

「そりゃ、勉強だろ。所謂、睡眠学習って奴?」

「学習になってないわよ。ノートだったら貸さないからね!!」

「固え事言うなよー。俺とお前の仲だろー」

「アンタな、そう言う勘違いを生むような事を言うな!!」

ケラケラと笑う友成。彩は右の手のひらで、頭をパシーンとひっぱたいた。乾いた小気味良い音が、教室に響いた。

「……!!」

何故か、叩いた彩の方が、手を押さえてうずくまった。

「アンタが石頭って忘れてたわ……」

「グーだったら、骨折してたかもな」

友成は、得意気に胸を張った。彩はよほど手が痛いのか、手首から先をブルブルを振っている。

「……そういえばさ、雄太君の姿が見あたらないね?」

彩は、教室をグルリと見渡した。

「そーいや、いねえな。あ、待てよ……」

友成は、何かを思いだしたように、あごを親指で撫でた。

「雄太君、何か用事でもあったのかな?」

「確か、DVDの発売日とか言ってた気がする……」

「ふーん……。なんとなく、どういうDVDか予想は付くけど……」
友成と彩の頭に、可愛らしい服装をした、女の子のイラストが思い浮かんでいた。

「まあ、イイか……。さーて、俺も帰るぜ。じゃな!!」

「うん、ちゃんと帰りなよ」

友成は彩に手を振ると、鞆を引っ手繰って教室を後にした。

廊下に出た友成。その様子を、物陰から確認している人影があった。当然、本人は気がついていない。

「あれが、一年の早瀬友成か。噂ほど、強くはなさそうだが……」

「確かにな。だが、あれでカス学のヤンキー五人潰した事あるみたいだからな。何にしても、注意しとくべきだ」

「川澄くんは、こっちに引き込むつもりでいるみたいだぜ？」

「そりゃ、無理だろ……。ウチの頭の後輩だしよ……」

「それより、手塚春樹って奴だろ。相当強いつて話だからな。あの早瀬って奴には負けてるけど、戦力は多い方が良いつてたしよ……」

見ていたのは、恐らく涼浪の上級生なのだろう。友成を包囲する準備が整っている事は、狙われている張本人は、知るわけが無かった。

帰宅の途中、友成はコンビニでアルバイト情報誌を、立ち読みしていた。

（……やっぱ、コンビニかな。スタンドがいいけど、高校生は無理みたいだし）

雑誌を棚に戻し、友成はコーヒーと履歴書を手に取った。レジに行こうとしたとき、不意に声をかけられた。

「よう、友成。履歴書なんか買って、バイトでもするのか？」

「あ、太陽先輩じゃないっすか!？」

声の主は友成の先輩、水島太陽ミズシマタイヨウだった。

友成の地元の先輩であり、唯一頭の上がない存在。言わば、友成の喧嘩の師匠と言えるだろう。空手の有段者であり、喧嘩も相当強いとの事だ。ちなみに、涼浪高校の三年でもある。

「ちょっと、話でもしようぜ。コーヒー奢ってやるよ」

太陽はそう言って、友成の握っていた缶コーヒーを手を取った。

「先輩、ゴチになります!!」

友成は、深々と頭を下げた。

「……お前、コンビニの中だからさ。そんなに、でかい声出すなよ……」

「あ……」

店員とお客の視線全てが、友成と太陽に向いていた。

二人はコンビニを出て、真向かい有る公園に行った。公園のベンチに座ると、友成は早速奢りのコーヒーを一口飲んだ。

「んー……奢りのコーヒーは、やっぱ美味しい!!」

そう言って、友成は胸ポケットからタバコを取り出した。

「ま、先輩の甲斐性って奴。バイトの給料入ったばかりだしな」

太陽も、そう言ってコーヒーを一口飲んだ。

「そういや、お前バイト探してんのか？」

「そうっすね……。家、ビンボーだから。せめて、遊ぶ金位は自分で確保しとかないと。メンドーだけど……」

「ま、俺もバイトしてるのも似たような理由だしな。友成が良ければ、バイト先の紹介するぜ？」

「まじっすか!？」

「ああ。店長が人手が欲しいって、言ってたしな。それに、知り合い居た方が働きやすいだろ？」

「そりゃ、ありがたいっすよ。……所で、一個聞いてイイっすか？」

友成は、少し言いづらそうに太陽に尋ねた。

「何だよ。自給に関しては、知らないぞ」

「自給じゃなくて……先輩のバイト先って、何の仕事っすか？」

聞かれた太陽は、少し照れくさそうに口を開いた。

「……駅前の弁当屋で、惣菜作ってる」

「似合わねー……」

友成は苦笑いしながら、リアクションしてしまった。頭の上がない先輩が、エプロンを着けて厨房で料理する姿は、友成には想像出来なかった。

「……解ってるよ。ほっとけ」

太陽は、少しふて腐れた様に返答したのだった。

少しだけ、会話が途切れると、友成は改まって口を開いた。先程より幾分固い感じの声で、太陽に喋りかける。

「そういや、話変わるんすけど……。いいっすか？」

「何だよ、改まって」

友成の緩んでいた表情が、少し引きだけ締まった。

「先輩の親父さん……体、大丈夫なんすか？」

「そうだな……」

太陽は、一呼吸置いてから口を開いた。

「姉貴は働いてるし。後は俺のバイト代と、お袋のパート代。全部含めれば、生活は出来るからな。後輩に心配させるほど、落ちぶれちゃいないぜ」

そう言うと、太陽は笑顔を見せた。もっとも、それは力の無い笑顔だったと、友成はすぐに解っていた。

「先輩……。俺がバイト受かって、給料入ったら何か食いに行くっすよー!!」

友成はそう言って、親指を突き立てた手を出した。

「おう、そうだな。それじゃ、バイト先に話はしとくな」

「なら、頼みまっす」

そう言うと、二人は公園のベンチを後にした。

同日、午後七時過ぎ。

春樹は、商店街を歩いていた。目的も無く、ブラブラしながら帰

宅といった所だろう。半数の店はシャッターが閉まり、薄暗くなつた街の路地を、古びたオレンジの街灯が照らしている。多少寂れた駅前通りとはいえ、時刻相応の人通りはあった。

「……なんだ？」

数名の学生が、春樹の前を塞ぐ様に立っていた。春樹は、涼浪高校の制服だとすぐに理解した。

「お前が、手塚春樹だな？」

一人の男が、春樹に尋ねてきた。

「そうだ。あんたら、涼浪の先輩か？」

春樹の眉間にシワが寄り、不機嫌のオーラがにじみ出る。

「ま、そう怒るなよ。怖えからさ」

男は、ニヤニヤ笑いながらそう言った。そのヘラヘラした口調が、春樹の神経を余計に逆撫でしたようだった。

「あんだと？ あんた等、どうせ俺が生意気だから数集めて、フクロにしにきたんだろ？」

「……じゃあ、もしそうだったら？」

「人数なんか、関係無えよ……。全員、この場でぶっ潰す！！」

「おーおー。随分、バイオレンスな奴だな」

春樹の威嚇するような雰囲気とは対照的に、その男はニヤニヤと薄ら笑いをしたままだ。

「おう、どっからでもかかってこいや！！」

春樹は、フラインギングポーズを構えたが、男たちは対照的に向かってくる様子は無かった。

「そう気張るなよ。俺たちは、喧嘩しに来たわけじゃねえよ」

男は、そう口を開いた。

「……だったら、なんのつもりだ？」

「言うってみりゃ、スカウトだ」

「スカウトだあ？」

「九時位に“パルス”ってダーツバーに来い。お前を歓迎するぜ」男はそう告げると、ニヤリと笑った。

「じゃあな、待ってるぜ」

そして、春樹の前から去っていった。

「……何なんだ？」

一人残された春樹は、そう呟いてしまった。とにかく、時間を潰してから、パルスと言うダーツバーに向かうことにした。

時計の時刻は、九時を少し過ぎていた。パルスと言うダーツバーは、商店街の裏路地に佇む古い雑居ビルの一階にあった。扉にはスプレーの落書きがあり、窓ガラスはヤニで汚れきっていた。

「ここか。随分きたねえ店だな……」

春樹の第一印象は、決して良い物では無かった。蹴り壊せそうな木製のドアを開き、ダーツバーに入店する。

店内では、テーブル席を中心に、十数人の不良がたむろっている。

「……川澄君、来たぜ」

たむろっている不良の一人が川澄と言う人物を呼ぶと、奥でソファーに腰をかけていた、金髪でオールバックの男が立ち上がった。

「よく来たな、手塚春樹。歓迎するぜ」

「あんたは？」

春樹は、まだ警戒心を解いていないようだった。

「涼浪の三年、川澄慶吾だ。カワスミケイゴ一応、アタマ張ってるモンだ」

「あんたが、アタマなのか？」

春樹の頭の中に、クエスチョンマークが点灯した。

「今はな。前までアタマ張ってた奴は、喧嘩のできねえヘタレ野郎に成り下がっちゃったからな。前のアタマの名前くらいは、知ってるだろ？」

川澄はワントンプ置いてから、以前のアタマの名前を出した。

「……水島太陽」

「一応は、ね」

突っ立ったままの春樹は、腕を組みなおした。

「そこでだ。お前をスカウトした理由……解るだろ？」

「要は、水島太陽の首を獲って来いって事か……」

春樹がそう言うと、川澄の口元がニヤリとした。

「喧嘩のできねえアタマじゃ、下の連中に示しがつかねえ……そう
だろ？」

それに、お前さんが奴の首を獲ってくれば、自動的に涼浪で喧嘩
最強って事になるしな」

その言い方は、春樹の癪にさわった。だが、川澄は構う事無く言
葉を続ける。

「お互いに見返りはあるぜ。……悪い話じゃねえだろ？」

何よりも、喧嘩最強と言われて決して悪い気はしなかった。

「……」

「どうだ。お前が俺ら側につけば、涼浪だけじゃねえ。ここいらの
ヤンキー校、全部落とせるぜ？」

「……いいぜ」

川澄の提案に、春樹の首は縦に動いた。

「だがよ、これだけは言っとくぜ。あくまで手を組むだけだ。俺は、
あんた等の下に付くわけじゃねえ」

春樹は川澄達を指差して、強い口調でそう告げた。

「……まあ、いいだろう。期待してるぜ」

川澄の言葉を聞くと、春樹は振り返って一直線に割れた人垣の真
ん中を歩き、パルスのドアの向こうに消えていった。残った三年生
達は、ドアの外を見ながら口を揃えてこう言っていた。

「クソ生意気だな。あの一年……」

「ホントだぜ。中坊で、どんだけ強かったかしらねえけど」

「フクロにしちまうか？」

それを聞いた川澄が、周りの不良たちに口を挟んだ。

「まあ、今は好きに言わせておけば良いぜ」

「……でもよ、川澄君。水島をあの一年が潰せるとは思えないけど
……」

「バーカ。どの道、水島とあのデカがやりあえば、どっちかは無事

には済まねえだろうからよ……。それに、タイマンが終わってからにでも、フクロにすりゃあいだけの話だ……」

川澄は、低く嘲笑を浮かべていた。

そして、翌日。友成と雄太の、朝の馴染んだ登校風景。学校まで、あと数分歩けば到着するだろう。

「……んで、そのDVDセットいくらしたんだよ？」

友成は、昨日の雄太の放課後の事を聞いているようだ。

「ニツキュッパー。安いもんだ」

雄太の顔は、この上なく幸せそう。友成の目には、そう映っていた。

「……アホじゃねえのか」

「特典付だったんだよ。セーラー服、あと生徒手帳に……」

特典付きのDVDセットの事を自慢げに話す雄太だが、友成の表情は呆れるを通り越して、諦めていると言う方が正しいかもしれない。

「セーラー服なんか、着る機会なんかねえだろうが」

「紺のハイソックスは、外せないパーツだよ。コスプレセットにはさ」

「……お前、まさか着るのか？」

友成は、啞然としながら雄太に聞いてしまう。

「女装はしないさ。でも、コスプレって結構楽しいぞ。一回やってみるか？」

「……ま、興味は有るけどな。やる機会がねーっての」

友成は、少し恥ずかしそうに答えたのだった。

他愛もない会話を続けて、校門の前まで着くと、見慣れた大柄な男が立っていた。

その姿は、春樹に間違いはなかった。ただし、服装が制服ではなく、迷彩柄のパンツに赤いスカジャン、スニーカーの組み合わせ。どう考えても私服であり、学校に来る為の服装とはかけ離れている。

「よう、友成に雄太!!」

春樹の挨拶は、基本的に朝に弱い不健康不良少年にしては、随分とハイテンションな物だった。

「よう……って、お前なんで私服なんだよ?」

友成は言葉は、早速疑問系になっていた。通学時間に、私服で居る事自体が、サボる気満々としか言えない。

「……さては、サボってメイドカフェに行くつもりだな?」

雄太は無意味な確信を持った表情で、春樹を指差した。

「それは無い!!」

雄太の回答には、二人そろって突っ込んだ。

鋭い突っ込みの後、春樹は一度咳払いしてから、改めて言葉を続けた。

「……なあ、友成。俺ら、真面目に勉強する様な奴じゃねえだろ?」

「俺ら……つつても、いきなり何言ってんだよ」

「昨日も話したじゃねえか。俺とお前で組めば、無敵だってよ」

春樹は、友成の表情をジッと見つめた。その目付きは真剣そのものであり、決して冗談で口を開いている訳ではない。友成は、そう直感した。

「……んで、おめえは何がしてえのよ?」

春樹は一呼吸置いてから、本気の表情でこう言った。

「俺とお前で、ここらのヤンキー校、全部オトしてみねえか?」

「……」

「俺とお前なら、ここらのヤンキー校だけじゃねえ。この沿線沿いとか、県内のヤンキー校、全部シメる事も出来るぜ?」

春樹の言葉を聞いた友成は、無表情で返答した。

「……バーカ。お前さ、漫画みてえな事言ってるじゃねーよ」

友成の表情は渋くなり、全く話に乗る素振りを見せなかった。

「……ま、お前の場合はどう言うとは思ってたけどな。気が変わったら、何時でも連絡してくれよ!!」

春樹は、意味深な微笑を浮かべて、学校を立ち去った。

「何なんだ、アイツ？」

「さあな。何考えてるのやら……」

残った二人は、春樹の行動に疑問を感じずにはいられなかった。その日の授業は、友成の頭に殆ど入らなかった。もともと、普段から大して頭に入っていないのだが。

兎に角、春樹の一連の行動が気になって仕方が無かった。

（……あの馬鹿、他の高校に喧嘩でも売りに行く気か？）

思いつくを、片っ端から思い浮かべるが、殆ど喧嘩に絡む事しかない。そんな事を考えながら、一日中窓の外を眺めていた。

「……しゃーねーな」

友成の口から、ポツリと言葉がこぼれた。

「早瀬君、何がしようがないんですか？」

友成の席の目の前には、担当の教諭が仁王立ちしていた。

「……あれ？」

「……では、この問題をやらしてもらいましょうか」

教諭に言われるがまま、黒板の前に立ち問題に挑む。

「……えっと……解りません!!」

案の定だが、友成の頭脳では、問題を解けなかった。例により、友成は教諭から注意を喰らったのだが、その注意も上の空になっていた。その後、席についた友成だが、やはり窓の外を眺めてしまう。そして、放課後。ホームルームが終了すると同時に、友成は鞆を肩に掛ける。

「今日、用事出来たから。そんじゃ!!」

一言だけ言い残して、教室を飛び出していった。

「友成の奴、随分急いでたな」

「普段は、めんどくさがりの癖にね」

空席になった友成の席を眺めながら、雄太と彩は首を傾げた。

日はすっかり傾き、建物の壁はオレンジ色に染まっている。友成は携帯電話を片手に、繁華街を歩いていた。

「……ッチ。どこ歩き回ってんだよ」

リダイアル履歴の画面を見て、思わず舌打ちをした。駅前通りや裏道等を歩き回り、春樹の姿を探すものの、未だに見つけられていない。携帯電話の発信やメールを送ったりしたのだが、返ってくる気配は一向になかった。

「……ったく。向こうから連絡よこせ、つってたくせによ」

思わず、不満の言葉が漏れてしまう。友成は、とにかく春樹と話を付けようとしていた。確信は無いのだが、直感的に話す必要がある。そう考えたからに、他ならない。しかし、探し続けるものの、一向に見つかる気配は無かった。

時刻は午後十時を過ぎ頃。繁華街の電灯は殆ど消えて、暗くなった路地を出歩いている人影は皆無だった。バイト帰りの太陽は、一人歩いている。

電柱に括り付けられる、街灯が切れかかっているせいなのか、チカチカと点滅している。そのうす暗い光の下に、腕を組んだ一人の男の姿を、太陽は確認した。紛れも無く、太陽の方を見ていた。

「……なんだ？」

太陽と、男の視線が交錯する。そして、男は鋭い目つきをしてこう言った。

「あんたが涼浪の三年、水島太陽だな？　ここで張ってれば、会えると思ってたぜ」

そう聞こえた太陽は、顔が確認出来る程度の距離まで歩み寄った。身長は高く、太陽の視線は見上げる形になっていた。

「……お前、たしか一年の……手塚？」

「ああ、手塚春樹だ」

春樹の顔は、実に殺気立っている。

「一年坊主、随分元気がいいじゃねえの……」

太陽は春樹を鋭く睨みつけたが、決して臆する様子は見受けられなかった。

「ああ、強い野郎と喧嘩するのが生き甲斐でね」

春樹は、そう言って指をポキポキと鳴らした。

「アンタ、俺らみてえなのが下に居るとウゼエだろ？」

「……おめえ、どういいうつもりよ？」

「俺がアンタを……引退させてやるよ!!」

春樹は太陽を目掛けて、拳を振りかぶった。右拳が、太陽のテンブルを目掛けて、勢いよく打ち下ろされた。

「……!!」

——ガシィッ!!

ぶっ飛んできた右拳を、太陽は難なくガード。

「オラァ!!」

——ブンッ!!

春樹は続けて、左フックを放つ。太陽はスウェーバックで避け、春樹の左は空を切った。

「あつぶねえな……」

太陽の口から、思わず言葉が漏れた。ガードした左腕が、ビリビリと痺れている。

「……逃げるのは、上手いみてえだな」

そう言うと、春樹は再び殴りかかった。

「フンッ!!」

今度は左ストレート。太陽の顔面目掛けて、真っ直ぐ飛んでいく。

（……丸見えだよ!!）

太陽はパンチの軌道を読んで、両手でガードをしたが。

——ガンッ!!

打撃音と共に、ガード越しにも関わらず、太陽の体が吹っ飛んだ。想像の遥か上に行く強烈なパンチ力に、バランスも体制も崩れてしまった。

「……!?!」

その瞬間、太陽の顔面はがら空きになった。そして春樹は、構うことなく太陽の顔面に右拳を叩き込む。

——バキィッ!!

「ぐはあ……」

春樹の右フックをまともに喰らった瞬間に、太陽の膝がガクンと折れる。春樹は追い打ちと言わんばかりに、更に左ショートフックを叩き込んだ。

——ゴツッ——

太陽の顔面が跳ね上がると、地面に膝を着いた。鼻と口元からは、血が流れ出ていた。

「……え、エライ強烈なパンチだな」

太陽は痛みで顔を歪めながら、春樹を見上げた。

「……お前、ナメてんのか……コラァ!!」

春樹は怒りに表情を染め、太陽の胸倉を掴んで、無理やり立たせた。

「……なんで、殴ってこねえんだよ!! アンタはアタマ張ってたんじゃないのかよ!?!」

「……」

太陽は何も答えない。

「答えろよ!! そのまま、病院送りにされてえか!!」

春樹は、凄まじい剣幕でまくし立てた。

「……俺は、もう人を殴れねえからよ」

太陽は力無く微笑した。その諦めたような表情は、春樹の逆鱗にふれた。

「……だったら、お望みどおりに……顔面グシャグシャにしてやるよ!!」

胸倉を掴んだまま、右拳を振り上げた。太陽は、右拳の軌道を見て腹を括った。

(……こりゃ、痛そうだな)

しかし、春樹の拳が、太陽には届かなかった。

「……!?!」

春樹の右腕は、誰かに掴まれた状態で、止まっていた。

「……オメェ」

春樹の腕を掴んでいたのは、友成だった。そして、静かに春樹を睨みつけている。

「……春樹。お前、何してんだ？」

友成の発した言葉は、実に静かな物だった。それは、春樹にとって逆に不気味と思えるようなものであった。

それでも春樹は構うことなく、友成の手を乱暴に振りほどいた。しかし、太陽の胸倉を掴んでいた手も、つい離してしまったであった。その瞬間、ダメージを負っている太陽は地面に片膝を着いてしまう。

「涼浪のアタマと、喧嘩してんだ。邪魔すんな!!」

友成に向けて、強い口調で春樹はそう言った。

「……」

――バキィィ!!

友成は返事をしないまま、春樹を思いっきりぶん殴った。不意打ちに近い状態で殴られた春樹は、思わず尻餅を付いた。

「……テメエ、どういうつもりだ!？」

口元から出た血を拭いながら、春樹は友成を睨みつけた。

「……お前がバカなのは解ってたけどよ。ここまでバカとは、思わなかったぜ」

友成は、見下ろしながらそう言った。

「……何だと、テメエ!!」

「……おめえよ、太陽先輩が殴ってこねえって事、おかしいと思っ
てねえのか？」

喧嘩できねえのなら、理由が有るって考えねえのか？」

「……」

友成にそう言われた瞬間、春樹は反論の声を出すことすら出来なかった。ただ、自分の唇を噛むしかない。

「この人の親父さん、今入院してんだよ。だから、バイトも学校もクビになれねえ。問題起こして、パクられるわけにもいかねえんだ」

「……」

友成は、春樹に一步だけ歩み寄った。

「……そもそもお前はよ、無抵抗の人間殴って喜ぶような野郎じゃねえだろ？」

友成のその口調は強くもありながら、どこかで諭している様な。その言葉が、春樹の胸中に、響いている。

「……チッ」

春樹は不機嫌そうに舌打ちをして、立ち上がった。そして、二人に視線を合わせようともせず、反対方向に歩き去っていった。春樹が薄暗い街路地へと姿が消えてゆくのを、友成はジッと眺めていた。

姿が見えなくなる頃に、太陽との会話を始めた。

「太陽先輩、大丈夫っすか？」

友成は、地面に座り込んでいる、太陽に手を差し出した。

「……何とかな。しかし、久々に強烈なパンチ食らったぜ」

太陽は、引き上げられるようにして、よっこらせと立ち上がった。足元は、まだ若干フラフラしている。

「しかし、アイツ……。何で、いきなり太陽先輩を狙ったんだ？」

友成は、太陽に肩を貸しながら、首を傾げてしまう。

「多分、川澄の野郎だな……。アイツが、手塚をそそのかしたんだろうな」

「川澄……誰っすか？」

「涼浪の三年の奴さ。俺のことを嫌ってるからな。多分、俺を潰して涼浪を仕切りだいんだろうよ」

吐き捨てるように、太陽は言った。

「……だったら、直接叩きゃ良いじゃねえか」

友成は、呆れたように言葉を出した。

「それは無理だな。三回喧嘩して、全部ボコボコにしてるからな」

「……納得」

友成は、太陽に肩を貸した状態で、ゆっくりと帰宅したのであった。

?

式話 涼浪の先輩方（後書き）

彼らは、どうやってタバコを買っているのかって？
想像にお任せします。

参話 意地を張る奴ら

翌日。時刻は、既に正午を過ぎている。春樹は学校には顔を出さず、河川敷でひたすらボーっとしていた。

寝そべっている側に、昼食のカップ麺のゴミと何本かの吸殻の入った、ビニール袋が転がったままだ。

新しいタバコに火を着けて、肺に流し込んだ煙を吐き出す。ユラユラと景色の中に消えてゆく、煙を眺めていると、友成の言っていた一言が不意に頭に浮かんでくる。

(……俺は、何がしたかったんだ?)

成り上がる。それは、単に喧嘩が強ければ良い訳ではない。

勿論、喧嘩の強さも比重になる場合もあるが、それ以上に慕ってくる奴らが居るかが、重要になるのだろう。

なにより慕ってくる人間と言うのは不思議なもので、中心人物の元に自然と集まってくるのである。単に、腕力や財力にものを言わせて集めても、結局は離れていってしまうのである。

そんな事を思い浮かべていると、気が付いたら自己嫌悪になってしまっていた。

(……チッ、らしくねえな)

春樹は、苛立っていた。それは誰の他でもない、自分自身に対してだ。あっさり、踊らされた自分自身に対して、どうしようもない苛立ちを抑えきれなかった。

気晴らしに、何気なく川沿いのグラウンドに目を向けた。

「……ガルルル」

黒い犬と、白い犬。二匹の野良犬が、睨み合っていた。片方の黒い方の犬は、体格も大きく見るからに強そうだ。

もう片方の白い犬は、二回り近く体が小さかった。それでも、小柄な方の野良犬は、大きな犬に負けてたまるかと、威嚇し続けた。

(……)

春樹は呆然と眺めてしまった。そして、二匹の犬は噛み付き合いの喧嘩を始めてしまった。

黒い犬の方が、圧倒的に強かった。白い犬は、あっさり蹴散らされてしまう。それでも、小さな犬は、何度も何度も立ち向かっていった。

果敢に立ち向かっていった末、小さな犬が、ついに大きな犬の首元に食らいついた。強引に振り回されても、喉に噛みついた口を決して離さなかった。大きな犬はついに、根負けしてしまい、キャンキャンと情けない鳴き声を上げて、何処かに走り去って行ってしまった。

(……ちえ。俺、犬よりカッコ悪りじゃねえか……)

一部始終を見ていた春樹の口から、舌打ちが自然に出てしまった。そして、スクリと立ち上がった。

(……やったるか!!)

春樹は、覚悟を決めて河川敷を立ち去った。

同時刻、涼浪高校。

友成は、昼食時間帯を返上して、体育館裏に来ていた。もつとも昼食自体は、四時限目が半分過ぎた時点で、完了していたのだが。

ここに訪れた理由は二つあり、一つ目はタバコを吸いに来たという事。もう一つは、春樹の足取りを探しに来たのである。

「……やっぱ、来てねえか」

1・Bの不良生徒や、春樹の知り合い達に情報を求めた。しかし、収穫は丸で無く、どこに居るかも見当はつかないとの事だった。

(あの馬鹿、また無茶苦茶な事してんじゃねーよな……)

体育館裏で一人なった中、無い知恵を振り絞って、思い当たる節を考える。しかし、どれもこれもいい予感はしなかった。

容量の少ない脳みその中で、色々と思いを張り巡らしている中、タバコの煙を吐き出すと誰かが友成の肩を誰かが叩いた。

「よう、随分考え込んでるな。らしくねえな」

振り向くと、太陽の右手が肩に乗っていた。

「全く、お前といい春樹といい。何か気になるなら、俺にも声をかけてこいよ」

今度は雄太が、両腕を組みながら、そう言ってきた。

「太陽先輩……。雄太も」

友成は、ハッとしたように二人と視線を合わせた。

「ちょっと、今日は気になることがあってな」

太陽は、思い当たる節があるかのように口を開いた。

「今日よ。川澄と、その取り巻きの連中。誰一人きてねえのさ」

友成と雄太は、黙ったまま聞いている。

「……何も無きゃ良いけど、多分そういう訳にもいかないだろうな」
太陽の見せた苦笑いは、何処か自嘲的。そういう風に、二人の目には映った。

友成は、少し考えた様な素振りを見せると、吸っていたタバコを自前の携帯灰皿に吸殻を入れて、口を開いた。

「……今の話聞いて思った。多分だけど……。春樹は、川澄って奴の所に殴りこむと思うぜ」

「……ほう」

友成の言葉に、太陽は相槌を打ち、雄太は何も答えずに聞いている。

「アイツは、バカだけど……。多分、まっすぐなバカだからさ。裏で手を回すとか、誰かを利用するとか……。そういうのが嫌いな奴だと思う。」

大体そういう奴ってさ、何でも自分で抱え込んじゃうんだ、きっと。悪い人間じゃないけど、かなりバカだろう？」

友成は、そう言い終わってニヤリと笑った。

「そんで。お前は、どうするつもりなんだよ？」

雄太は、意図的にそう聞いた。雄太自身、友成がどうしたいのかは、すでに解ってる様だった。

「……決まりだな」

太陽も、友成の考えを察していた。そして、その考えには乗り気だった。

「ん……、待てよ。太陽先輩は、不味いんじゃないっすか？」

友成は、思い出したように言いながら、あごに手を当てた。

「確かに、下手にばれたら……退学になるかも知れないですし……」
雄太も、一度賛成した意見を、撤回せざるおえなかった。

「でもよ……」

太陽は、ある種の覚悟をした目をしていた。

「手塚を巻き込んだのは、俺がウダウダしてたのが原因みたいなもんさ。」

だから、川澄とは俺自身の手で蹴りをつけないと、いけないと思うんだ」

言い終わった、太陽の顔は晴れやかなものだった。憑き物が落ちた様にすっきりした表情で、そう言ったのであった。

「……ったく、アンタもしょうがない人だな」

さすがの友成も、少々呆れたように言った。

「とは言うけど、何かで顔を隠せば良いんだけど……」

雄太は、そう言っとうつむいた。

「顔を隠す……。良い事思いついた!!」

その瞬間の友成の表情は、二人が生涯忘れること無いほど、怪しく不敵。何よりも、不気味な笑いを見せていた。

時間は経過して放課後。ホームルームが終わると同時に、友成、雄太、太陽は真っ先に帰宅。そして、三人は雄太の自宅前に直行したのであった。

「……なあ、友成。なんで俺の家に、集合したんだ？」

雄太の顔には、クエスチョンマークが点灯している。

「それはだな。雄太に、アレを借りようと考えたわけさ」

友成は、再び怪しげな笑顔を見せ、人差し指をピシッと立てていた。

「さっき思いついたんだけど……まさかとは思うが」

太陽の表情は、随分と強張った笑顔を浮かべる。

「そう。雄太の持ってるコスプレ衣装に、戦隊物の衣装。あるだろう？」

友成は、満面の笑みで雄太の肩を、ポンと叩いた。

「うーん……。レッドのセットは有るけど、戦隊物はそれ一個しか無いぞ？」

雄太は腕を組み、視線を下げながら答えた。

「イヤイヤイヤ……。そんなもん着るなら、顔がばれた方がイイ……」

太陽は、全力で拒否した。イベントでも無いのにコスプレするのは、相当に恥ずかしい事に違いない。

「ダメだって。太陽先輩だけは、ばれないようにしなきゃ!!」

友成は、力強くそう言った。友成の中で、顔を隠す為に真剣に考えた結果なのだろう、多分。

「大丈夫ですよ。なんなら、先輩だけ怪しくないように、俺たちもコスプレしますから」

雄太も、そう説得を試みる。説得と言えるのかは、随分と微妙なのだが。

少し考えてから、太陽は口を開いた。

「……せめて、覆面レスラーの方がマシだったぜ」

観念したように、そう言った。それを聞いて、友成と雄太は、笑って顔を見合わせたのである。

「ところでさ、お前らもコスプレするんだよね？」

愚痴るようにつぶやく太陽。二人をみるその顔は、もはや呆れていた。

「俺は、イベントでよく着ているから、大丈夫です」

雄太は、当然とばかりに、ニヤリと笑った。

「俺、一回コスプレしてみたかったから。言われなくても、着るっすよ」

友成は、満面の笑みで、グーサインを出した。

(……こいつらも、とんでもなくバカなのかな)

太陽は、ヤレヤレと深くため息を吐き出した。

午後八時。春樹は一人で、パルスへ向かって歩いていた。その表情は、さながら戦地に行く兵士のように、殺気立っていた。そして、薄汚れた壊れかけのドアの前に立ち、一度大きく深呼吸。

(……おーし、行ったらか!!)

意を決して扉をけ破ろうと足を振り上げた。

——スカッ!!

「……おろ!？」

蹴りを放つと同時に、ドアが急に開いていた。そのまま、勢い余って春樹は転倒しながらパルスの店内に入ってしまう。

「……いつてえ」

転がりながら、入ってきた手塚を、店内に居た全員が春樹を凝視した。

「……何だコイツ？」

ドアを開けたであろう男は、呆れながら春樹を見下ろしている。

「……カッコわりいな、俺」

自嘲的に呟きながら、春樹は立ち上がって、服をパンパンと叩く。そして、スゥと息を吸って、大声で叫んだのだ。

「喧嘩の時間だ、オラァ!!」

その瞬間、パルスの店内は異様な雰囲気醸し出す。川澄と、取り巻きの不良達と、春樹一人が対峙する形になった。

「……手塚。水島をやれないならまだしも、俺らにたて突くとはな」
ソファァーに腰をかけた状態で、川澄は牽制の言葉を放つ。

「俺はよ、手を組むだけって言ったはずだぜ。お前らの仲間に、な
ったつもりなんざ無えんだよ」

春樹は、少し距離の開いている、川澄を見下ろしながらそう言った。

「クックク……。お前、馬鹿だろ？」

川澄がそう言うと、春樹の周りを何人もの不良が取り囲む。形成された人垣に、逃げ道は丸で無い。

「お前、ここに何人居ると思ってるんだ？　お前一人で、俺ら全員潰すつもりか？」

川澄は、いやらしく言った。春樹を囲み込む不良達は、少なくとも見ても二十人は居るだろう。

「逆に言っちゃえば、全員潰せりゃあ俺が涼浪のアタマって事だろ……！」

春樹は、強い口調で、啖呵を切った。

「……このガキが。お前ら、この馬鹿に解らせてやれ……！」

川澄の指示で、取り巻き達は一斉に春樹に襲い掛かる。

「そりゃあ……！」

——バキィ……！」

春樹は何の躊躇もなく、一人目の顔面を殴り飛ばした。

「……テメェ……！」

一人が左後ろから殴りかかってきたが、春樹は薙ぎ払って、すぐさま裏拳を放った。カウンターで入った分、相手は倒れてからピクリとも動かない。

「まだまだあ……！」

更に、別の不良の顔面を殴り飛ばし、続けて殴りかかって来た不良も、体を前蹴りで吹っ飛ばした。しかし、一人を殴れば、別の拳や蹴りが飛んでくる。敵だらけの中で、ひたすら拳を振るって、目の前の不良共とひたすら張り倒していく。

「フンガァ……！」

気合の雄叫びを上げて、襲い掛かってくる不良をなぎ倒して行く。

——バキィ……！」

——ドガッ……！」

——グシャァッ……！」

バーの中に、打撃音が響き渡る。修羅場と形容しても、全く差し

支えは無い程の様相だ。

(……クソツタレ、キリがねえ)

思わず、舌打ちが出てしまった。いくら春樹がタフと言っても、相手の数は多すぎた。とは言え、ここまで来てしまえば、既に後には引けないのも事実だ。

「この、クソガキ!!」

春樹を目掛けて、飛んできた右ストレート。

——パシィッ!!

しかし、左手であっさりと受け止める。春樹は右手で髪の毛を掴んで、腕力に任せてブン投げた。

「オラァッ!!」

——ドガァァッ!!

投げられた方は、床にと沈んだまま動かなかった。が、しかし。

——バキヤァン!!

春樹の頭部に、強い衝撃が走った。投げ技による、大きな隙が出来てしまった瞬間だった。

「グゥ……」

春樹は、片膝を付いてしまった。ビール瓶で頭を殴られたのだ。

「……手こずらせやがって」

春樹のすぐ後ろに立つ川澄の手には、粉々になったビールが瓶握られている。

「……キタネエぞ」

「なんだと……。喧嘩にキタネエもクソも、あるのかよ!!」

——ガッン!!

川澄の前蹴りが、春樹の顔面をジャストミート。春樹は、床にドサツと沈んでしまった。

「……たった一人に、ここまでやられるとはな」

取り巻きの不良達の、三分の一が春樹により、倒されている。

「……そりゃ、だてに大魔神って呼ばれてた訳じゃねえからよ」

春樹は、そう言いながら、なんとか上体だけは起こした。しかし、

額と鼻からは血が流れており、ダメージを受けているのは明らかである。

「この野郎……。オウ、鉄パイプ持って来い!!」

取り巻きが持ってきた鉄パイプを、川澄は引っ手繰る様に手に取って、鉄パイプを装備した。

(……流石に、アレ喰らったら痛えよな……)

上体を起こしているとは言え、素早く避けるほどの体力は既に無い。

「しばらく、入院してきな!!」

川澄は、鉄パイプを振り上げる。狙いは、春樹の鎖骨だ。

(……ツチ。動けねえわ)

春樹は、観念したように動かなかった。

そして、川澄が凶器を振り下ろそうとした瞬間だった。

——ドガッ!!

「なんだ!？」

その場に居た、全員が音の発生した場所を振り向いた。

破壊されたドアが床に転がっており、ドアのなくなった入口には、三人の怪しすぎる男が立って居た。

「春樹、まだ生きてるか？」

カチューシャを付け、何故かセーラー服を身にまとっている友成とある深夜アニメの、ヒロインのコスプレ姿である。

生足は流石に恥ずかしいのか、スカートの下には学生ズボンを着衣している。コスプレ的には、かなりアンバランスである。

「助太刀に来たぜ」

何故か、ブレザーにネクタイを付けた雄太。これは、友成と同じアニメの主人公のコスプレ衣装だ。こちらは、正規のコスプレである。

「……」

あとの一人は、無言のまま腕を組んで仁王立ち。今度は、戦隊物のレッドのコスプレ姿だ。正体は太陽なのだが、覆面をしている為、

川澄達から見れば正体不明の状態だ。

「……なんだ、このバカ共は？」

川澄は、呆れながらそう言った。

「あの、女装してる奴……早瀬友成ですよ！！」

一人の不良が、友成の事に気が付いた。

（……アイツ、何ちゆうアホな格好してんだ？）

春樹も、呆然としてしまった。正直、助太刀はありがたいのだが、もの凄く他人の振りをしたい、恥ずかしい気分になってしまう。

「……まあ、いい。お前ら、あいつ等もまとめて潰せ！！」

川澄の支持と共に、複数の不良が三人に襲い掛かった。

「……そらあ！！」

——バキィ！！

友成が向かってきた、一人の顔面を蹴り上げた。

「……この、チビが！！」

友成を背後から殴りかかったが、太陽が横から入って、パンチをなぎ払う。そして、右拳を一閃。

——ドゴォォ！！

太陽のパンチを喰らった男は、軽く一メートルは吹っ飛んだ。

「……さすがっすね」

「まあね……」

太陽は得意げに言うが、覆面のため表情は全く見えない。

「セイツ！！」

——ズドン！！

雄太も不良に向けて、正拳突きで、攻撃を仕掛けた。

「……この野郎！！」

攻撃を喰らった不良が、顔を歪めながら、雄太に反撃した。

「……おっとっと」

左にサイドステップして、反撃をかわす。不良の体が大きく泳いで、顔面が隙だらけになってしまう。

「……ッショッ！！」

——スパァン！！

雄太の掌底打ちが、不良のアゴを打ち抜いた。

「一応、空手段持ちなんでね」

雄太は、不良に向けて、得意げにそう言った。

——バキィ！！

しかし、喧嘩の最中に油断は大敵。言ったそばから、別の不良のパンチを思いっきり喰らってしまった。

「……い、痛いね」

雄太は、殴ってきた不良をマジマジと見た。

「お前が、調子こいてるからだろうが！！」

不良は、雄太に思わず怒りながら突っ込みを入れてしまった。

——ドゴォ！！

しかし、その不良に向かって、別の蹴りが飛んできた。不良の体は、思いつきり吹っ飛ばされていた。

「……喧嘩に、集中しろっての」

蹴りをぶち込んだ友成は、呆れたように雄太に言った。

「ああ、スマンな……」

雄太は、気を取り直して、構えをとった。

「春樹い、テメエも根性見せやがれ！！」

友成はそう叫びながら、別の不良を目掛けて拳を放った。

チツと舌打ちをして、春樹は足元がふら付きながらも、気合いで立ち上がった。両手で、自分の頬を一発張って、ファインディングポーズを構えた。

「おっしゃあ！！」

雄たけびを上げて、目標の不良目掛けて、拳を振りかざした。

援軍の加入で、形勢は一気に逆転した。二十人近くいた不良たちも、後は川澄一人を残すだけになっていた。

「……やっぱ、喧嘩は好きじゃないな」

雄太は手持ちのポケットティッシュで、鼻血を拭きながら言った。

「いや、上等だろ」

春樹は、首をグリグリと回しながら、得意げに言う。

「あと一人だな」

レッドマン太陽が、川澄を睨みながら言った。くどい様だが、表情は不明のまま。

「楽勝っすね、太陽先ぱ……」

友成は言葉を言いかけの状態で、顔を固めてしまった。

「……何？」

川澄はレッドマンを凝視した。

「あ……」

雄太は、呆然としながら友成を見た。

「……マジ？」

春樹も、レッドマンに視線を移した。

「……」

太陽は、友成の方向に顔を向けた。

「……あぁっ!!」

友成は、改めてリアクションを取った。普通に太陽の名前を呼んでしまったのだから、折角の覆面作戦はぶち壊しである。

「馬鹿!! 名前呼んだら、台無しじゃねえか!!」

動揺してしまった太陽も、思わず叫んでしまう。

「……アホ。ここまでやって、ドジるなよ……」

雄太も、額を押さえて、ハアとため息を吐いた。

「……あの人、やっぱ強えんだ」

太陽の正体が解ると、春樹は関心したようにそう言った。

「……水島。わざわざ、マヌケな覆面付けて喧嘩しにくるとはな」

川澄は、レッドマンをマジマジと睨みつける。

「……くそ。バレたんなら、仕方ないな」

太陽は覆面を脱ぎ捨てると、川澄に一步步寄り寄った。

「てめえを、涼浪のアタマから、引きずり降ろしてやるよ!!」

川澄も歩み寄って、太陽と間合いを詰めた。そして、そこからは

一瞬の間の出来事だった。

川澄が右ストレートで、先手を打った。

——ブンッ!!

川澄の右拳は、空を切った。太陽はヘッドスリップでかわすと同時に、右のアップパーを繰り出した。

——ゴキッ!!

強烈なアップパーが、無防備になっていた川澄のあごを撃ち抜いた。太陽の拳が突き刺さった瞬間に、川澄は床に膝から崩れ落ちていった。

「……一瞬だったな」

春樹は、ゴクリと生唾を飲んだ。

「……太陽先輩にゃ、俺も勝てねーよ」

友成も、強張った表情でそう言った。

「俺さ、太陽さんと同じ空手道場に居たから、威力はよく解るよ。

あんなパンチ、まともに喰らったら死ぬぞ……」

雄太は、崩れ落ちた川澄を見ながら言った。表情は、二人と同様に随分固い。

「……」

太陽は何も言わず、川澄を見下ろしたまま動かない。

「……クソツタレ」

川澄は、崩れ落ちた状態から、僅かに体を起こした。

「水島あ……。何で、てめえは喧嘩しねえんだよ……。お前ほど、強え野郎はそういねえだろうが……」

「……」

「……答えろよ、水島あ」

川澄の発する言葉は、寂しげに部屋に響いた。

「……川澄。お前の言いたい事は、解らなくもない。でもよ……。喧嘩して“護る物”すら、無くしちまったら意味が無いんじゃないか？」

「護る……物だと？」

「……俺の場合は、家族だけだな。これ以上、家族に迷惑かける訳にはいかないんだよ、俺はな」

「……」

「護るものが有ると無いとじゃ、気合いの入り方も変わるもんさ。正義の味方振るつもりは無いけど、俺は護る事の為の喧嘩以外はしたことが無い。」

お前にそれが解らないなら、お前は俺には一生勝てないぜ」

太陽の言葉に、川澄はそれ以上何も答えなかった。

「……おっし。お前ら、帰るぞ」

太陽がそう言うのと四人は順番に、ドアの壊された入口の向こうへと消えて行ったのだった。

「護る……。俺には、何が有るっていうんだよ……」

残った川澄は、グシャグシャで、修羅場の様な店内を見渡した。

そして、川澄の視界に入ったのは、倒されている自分の仲間達だった。

（少なくとも……こいつ等は、水島じゃなくて俺についてきた。……もっと早く、気づくべきだったのか？）

川澄は、フツと笑って仰向けに寝ところがあった。ひんやりとしたベニヤ板の床が背中に触れる感触。川澄にとって、それが少し気持ちよかった。

パルスを後にした四人は、繁華街に向かって歩いていった。街の明かりはすっかり落ちて、冷たい風が街全体を撫でる様に吹いていた。

「あー。暴れたら、腹減ったな……」

パルスを出ると、友成が真っ先にそう口を開いた。

「確かにな。牛丼でも食いに行くか？」

雄太は思いついたように、そう言った。考えの方向は、友成の意見に同意しているようだ。

「そうだな。この時間なら、空いてるだろうしな」

太陽も、食事の意見には乗り気で答えた。

「俺、口の中ズタズタだぞ……」

口の中が切れている春樹は、あまり乗り気にはならなかった。恐らく、飲み物だけでも、結構辛いのだろう。

「おや、無敵の春樹君も、口の中が切れてて物が食べれないんですね」

友成はニヤニヤとして、茶化すように言った。

「……んなことねーよ。唐辛子入れたって、平気で食えるっつーの……！」

春樹がムツとしながら、言い返した。

「おーし、決まりだな。春樹は、激辛のカレー丼で……！」

「ふざけんな、テメー……！」

一悶着あったものの、こうして四人の夜は更けていった。なお、全員傷だらけの上に、内三人の衣装がコスプレ。

一人だけが学生服だが、この雰囲気ではコスプレに見えてしまうのが現状と言える。自分たちの格好の事を忘れて、入店した牛丼屋の店内で、異常な雰囲気を出していた事は、言うまでも無い。

三日後の昼休み。

昼の弁当をササツとたいらげた友成は、太陽に呼び出されて屋上に向かっていった。屋上への入り口の塗装の剥げた鉄のドアを開けると、太陽は手すりに持たれながらタバコを吹かしていた。

「どもっす、太陽先輩。話って何ですか？」

「よう、着たか」

太陽は肺に溜まった紫煙を吐き出して、友成を見た。太陽の含み笑いを見て、友成は疑問を持たずには居られなかった。

「……？」

一呼吸を置いて、太陽が口を開いた。

「もしよ、友成。これから涼波アタマを、お前に任せるって言われたらどうする？」

太陽はそう告げて、タバコをくわえた。

「そうっすね……」

友成は、腕組をしたまま下を向いた。
十秒ほど考えて、こう答えた。

「やっぱり、断るかな」

「ほう……。ココでお前にまともに喧嘩やりあえるのは、手塚か俺
くらいのもんだぜ？」

「うーん、上手くは言えねえけど……」

「……」

「アタマって、誰かにやれって言うもんじゃなくて、やってる内に
自然と決まるもんだって思うんっすよ。俺アタマ張るとかって興味
無いっすから。それに……」

「それに？」

「めんどくさくなくて、楽しきゃそれでイイっすよ。俺はね」
友成は笑顔で、そう答えた。

「お前らしい考えだな」

太陽も、ニヤッと笑った。

その日の午後は、実に春らしい快晴で、爽やかな風が吹いていた。
？涼浪高校の新生入生達が、新しい一つの物語の始まりを告げるかの
ように、新しい風を吹きいれた最初の出来事。

そう、高校の三年間は、まだまだ始まったばかりなのである。

？

参話 意地を張る奴ら（後書き）

次回から、新章突入で、新キャラが登場します。
主要ヒロイン（の予定？）が、二人出てきます。

四話 委員長の頼み事（前書き）

新章突入です。

メインのヒロインも、新たに登場です。

四話 委員長の頼み事

桜の花びらはとつくに散ってしまい、木に付いた緑の葉っぱを風が撫でていた。

四月も終る目前。新しい生活にも慣れ始めて、ポカポカの陽気と大型連休を間近に控えた学生達の気分は、勉学に打ち込む気力を容赦なく奪い取っていた。翌日が祝日で学校が休みとなれば、尚更やる気は失せてしまう。

普段から勉強をする気が一切無い友成も、もちろん例外ではない。

「……良い天気だ」

ジジ臭い台詞を呟きながら、窓際の席でボーっと外を見つめる。隣の席で、黒板に書かれた暗号を真面目に写す彩を見て、友成はニヤリと笑った。そして、ノートを一枚破り、シャープンを走らせて文字を書く。

それを彩へと、机の下から差し出した。

「……？」

友成から受け取った、ノートの切れ端には「このセンコー、世界史のくせに頭は落ち武者だよな!!」と乱雑な癖字で記入されていた。書かれた文字を読んで、思わず吹き出してしまいそうだったが、辛うじて息を飲みこむことに成功した。

彩が、隣の席の友成に目を配ると、ピースサインを出しながら笑う友成が居た。

授業終了後。彩は友成に、当然のように抗議を申し立てた。

「……アンタ、何であんなタイミングで邪魔するのよ!!」

「いや、ヒマでさ。さっきの先公の頭見てて、思ったんだよ」

事実、世界史の担当教諭の頭部は薄かった。

「……思わず笑っちゃいそうだったわよ」

「これで、あだ名は落ち武者に決まりだな」

「解るけど……失礼じゃない？」

友成と彩の一連のやり取りを見て、一人の女子生徒が声をかけてきた。

「二人とも、仲良いんだね」

声をかけてきたのは、須藤由香。スドウユカクラスの委員長である。

セミロングのヘアースタイルに、可愛いルックス。加えて、何処かおっとりした性格で人気が高い。勉学の成績は申し分無いが、運動はそうでも無いらしい。

「由香ちゃん、勘違いしないでね。友成とは、ただの幼馴染なんだから」

「そーそー。言ってみりゃ、腐れ縁みたいなもんだ」

二人の言葉を聞いて、由香はホンワカとした独特の口調で、こう言った。

「幼馴染かー。うん、良いと思うよ」

ニッコリとした笑顔を見せる由香。見た目も相まって、可愛らしさは抜群。友成の心の内は、思わず押し倒したくなるような衝動に駆られてしまう。

（ヤベ……。超カワイイ……）

（あーあ、私も由香ちゃんくらい可愛かったらなあ。……それにしても、友成のバカは鼻の下伸ばし過ぎよ）

由香のおっとりとした、独特の雰囲気飲まれていると、ホームルームの時間が迫っていた。

「あ、先生来ちゃうから席に戻らなきゃ」

パタパタと自席に戻る由香を見て、友成と彩も席に座った。

ホームルームも終了し、帰宅部の友成と雄太に春樹が合流して、駄弁りながら下駄箱に向かう。ちなみに、彩はテニス部で由香は手芸同好会の部員と補足しておく。

「しかし、委員長の須藤由香ちゃん。可愛いよなー」

友成がポツリと呟いた。

「ああ。あの娘は、真剣に萌え要素が揃ってるよ。三次元だけど、

ギャルゲーに出てもおかしくないくらいだな」

雄太も、自身特有の価値観で同意した。

「そんな可愛いのかよ。その須藤って？」

クラスの違い春樹は、まだ由香と面識が無かった。

「マジ半端無いぜ。あの子と、部屋で二人つきりなら、百パー押し倒してるな」

「ま、お前がそうなる事はあるえねえけどな」

友成が興奮気味に言うが、春樹は鋭く突っ込みを入れた。

「でもよ、友成。お前、彩ちゃんと何だかんだで一緒に居るだろ？」

雄太も、友成に指摘した。

「そういやそうだ。お前さては、ちゃっかり手出してやがるな」

春樹も雄太の意見を、後押しした。

「バーカ。彩とは、ただのご近所さんの幼馴染だよ」

友成はそう言う。

「……ふーん」

春樹は友成をジト目で見た。

「……へー」

雄太の顔は、弱冠呆れ気味の表情だった。

「……なんだよ？」

ふて腐れながら、友成は言った。

「フラグクラッシャー……」

これは雄太の弁。表情は、更に呆れを三割増しと言った感じか。

「……勿体ねえ」

これは春樹の弁。さっきより、尚更にジト目で友成を見下ろしている。

「……ちっ。とつとと、帰ろうぜ」

友成は、歩くスピードを早めた。

「アイツ、鈍感なのか？」

春樹は、雄太に聞いた。

「さて……。照れ屋で、捻くれ者なのは確かだけどね」

雄太はそう言うのと、ヤレヤレと溜め息を吐き出した。

下駄箱に着いて、友成は自分の靴箱の扉を開いた。普段履いてる、安物のスニーカーの上に、可愛らしいファンシーな封筒に包まれた手紙が、堂々と鎮座していた。

（……これって、まさか!?!）

一度扉を閉めて、靴箱の番号を確認する。

（……俺の下駄箱で間違いない。ってことは……）

友成は、手紙を手慣れたベテランのスリ師か、万引きの常習犯並みに素早くズボンのポケットにしまい、雄太と春樹に一言だけ告げた。

「スマン。高校三年間の中に、三回しかないチャンスの一回目が来たから、先に帰ってくれ。じゃ!!」

そう言い放って、猛ダッシュで廊下の奥へと消えていった。

「……どうしたんだ、友成の奴?」

「解らん……」

取り残された二人は、誰も居なくなった昇降口で、廊下をポカーンと見るしか出来なかった。

友成は、階段を二段飛ばしで駆け上がり、短距離走のスプリンター顔負けの速度で屋上に到着した。小動物の食事の様に、キョロキョロと周囲を見渡す。

しつかり誰も居ないことを確認した後、ポケットから少々しわの寄った可愛い手紙を取り出して、中身の便箋を黙読した。

（えーと……）

手紙なんかで呼び出して、ごめんなさい。大事なお話をしたいので、午後四時に屋上に来て欲しいです。須藤由香……。

これって……）

友成は、嬉しさのあまり思わず雄叫びを上げそうになったが、まずは咳払いして、誰も見ていないのにクレバーに装った。そして、胸ポケットから携帯電話を取り出して、時刻を確認した。

現在三時三十八分、まだ二十分以上ある。

（まさかの、この時代にラブレター……。でも、あんなタイプの娘だしな）

友成は、落ち着くためにくわえたタバコに着火して、大きく息を吸った。

しかし、紫煙を一口吸った所で、友成の耳に甘ったるい独特の口調の声が、不意打ちで飛び込んできた。

「あ、友成くん。もう、来てくれたんだね!!」

驚いた友成は、思わず咳き込んだ。

「……ゲホゲホ!!」

吐き出した煙は、目と鼻に随分としみた。

「友成くんって、やっぱり不良だからタバコ吸うんだね…」

首を傾けながら、真っ直ぐ覗き込む由香に、友成の心拍数はフルスロットルで上昇した。

（……ヤベエ、超可愛い）

友成は、まず落ち着こうと思い口を開いた。

「あ、あのさあ……手紙に書いてた話ってさ。何なのカナ？」

全く落ち着いて居なかった。どれも気味な上に、口調までおかしくなっていた。

「あ……うん。これって、友成くんにどうしても伝えたくって……。実はね……」

由香の神妙な面持ちに、友成は期待せずにはいられなかった。

（この展開って……マンガとかドラマみたいに、好きですってくるのか!?!）

友成の頭の中には、薔薇色に染まったあらゆるシュチュエーションが浮かんできた。若干、思考回路は暴走気味と言っているだろう。「お姉ちゃんの事で、相談に乗って欲しいの……」

「解りました。謹んでお受けいたします……って、相談?」

一瞬にして、友成の心拍数はアイドリング状態まで落ち着いた。今の友成の表情は、豆鉄砲を喰らったハトの様に、キョトンとした

まま固まっている。

「よかったー。友成くんって、不良だけど人が良さそうだったから。友成くんをお願いして、正解だったなー」

由香の表情は、パアッと明るい色に染まった。

（何か嬉しいけど……勘違いして舞い上がった自分がダサイ……）

友成は、正直複雑な心境だった。勘違いしてたとは言え、相談を受けることになってしまった。既に戻れない状況だと理解するのは、時間はかからなかった。

「……ふう。で、相談って何の相談？」

一旦火が付きっぱなしのタバコの煙を吸ったのち、本題に入った。

「うん、私のお姉ちゃん。一年D組の、須藤美香ストウミカって言うんだけど」

「一年でお姉ちゃん？ 同学年って事は、双子なのか？」

「ううん。私が三月生まれで、お姉ちゃんは四月生まれなの。学年は一緒だけど、双子じゃないんだ」

「……そりゃまた、珍しい話だな」

「うん、そうなの。それでね……」

由香の話を要約すると、こういうものだった。

由香と同学年の姉、須藤美香は不良少女。そのせいか、学校もサボりがちで深夜帰宅も多い。最近では、帰宅しない日も増えている。心配になっている由香は、家に帰ってきて欲しいし、一緒に学校に行きたいと願っている。

しかし、自分が深夜に出歩くことは親が許さないし、どこに居るのかも検討が付かない。そう言う訳で、同じクラスの友成に相談を持ちかけた。何故友成なのかと言うのは、彩を通じて何度か話をしていると言うのが大きな割合を占めていた。

実際、面識の無い不良生徒に突然相談に乗って欲しいと言っても、まず効果は無いだろう。第一に、話しかけることさえも億劫になる事は必然だ。

話を一通り聞いた友成は、由香を見て一言こう言った。

「……まあ、乗りかかった船は途中じゃ降りれねえしな。タバコの

口止め料ってことで、引き受るかな」

友成は、由香に向けて左目をパチリとウインクした。

「うん、ありがとうね。友成くん!!」

由香は明るい笑顔を見せて、友成の右手を両手をギュッと握り締めた。

（これはこれで、得したって事かな）

内心は、頼られて嬉しい友成だった。

その日の午後八時過ぎ。駅前の商店街近くの、小さな公園。私服姿でたむろって居る三人。友成に呼び出された春樹と雄太は、芝生の地べたに座りながら放課後に起きた、一連の事を聞いていた。

「ギャツハツハ!!　そいつは、マジ傑作だな!!」

話の概要を聞いた春樹は、腹を抱えて大笑いしていた。

「……ウッセーよ。お前らだって、絶対同じ事になるっての!!」

友成はそう言って、口を尖らせる。

「いや、スマン。でも……ププッ!!」

雄太も、堪え切れずに笑いが出してしまう。

「……クソ、お前ら。人事と思いやがって」

友成は不機嫌そうに、缶コーヒを飲み干した。

「所でよ、友成。その、須藤って娘の姉ちゃんの顔とか解るのか？」

一頻り笑い終えた春樹が、友成に聞いた。

「まあな。由香ちゃんのメアド聞いて、写真送って貰ったよ」

友成は、得意げに携帯電話の画像フォルダを開いた。

「お前、ちゃっかりしてるな……」

雄太は呆れつつも、感心していた。

「んで、検討は付くのかよ？」

春樹は、タバコを取り出しながら聞いた。

「さあな。この街に居るなら、ある程度は絞れるけどな。遊ぶところなんか、少ねーしよ」

友成は、携帯電話をポケットにしまった。

「つまり、他所の街に居るなら解らないというわけだな」

雄太は、スクリと立ち上がった。

「まあ、そうなるわな」

友成も、それに習って立ち上がる。

「んなら、駅前をブラブラしてみっか」

春樹も立ち上がって、取り出した一本のタバコを安物のライターで着火した。三人は、ロールプレイングゲームのパーティーを組んだような気分で、駅前の通りへと向かうのだった。

三人が駅前やメインストリートをフラリと歩くこと、十数分。翌日が祝日の影響か、平日よりも幾分人が多い。

「結構出歩いてる奴ら、多いんだな」

友成は、交差点をグルリと見渡しながら言った。

「しかもカップルばっか。俺等だけだぜ、男三人なんざ……」

春樹は、嘆くように呟いた。

「ま、そう言うなって。せめて、可愛い娘と知り合えるフラグが立ってるだけマシだって」

雄太がなだめる様に言った。

歩行者の信号が青に変わって、反対の歩行者通路へと移動していると、春樹の視界にある女性の姿が捉えられた。

「なあ。あそこの角に立ってる娘って、探してる娘じゃねえのか？」

春樹は、女性の姿が見える方を指差した。

「……暗くて解らないけど。それっぽいと言えば、確かにそうだな」
雄太も、その女性の姿を確認した。

「俺には見えねーんだけど……」

三人の中で、ダントツに背が低い友成は、まだ姿を見つける事が出来ていなかった。さっさと交差点を渡りきって、女性の姿を見つけた方へと向かう。

その女性は、ビルの壁にもたれかかって、腕を組んでうつむいた状態で動く気配が無い。少々暗いが、少女の雰囲気を残したその表情には、不機嫌さが表れていた。

由香と良く似た顔立ちだが、由香よりも幾分凛々しい印象を持つ。茶色に染めたロングヘアを、ポニーテールにまとめた姿は、十人中九人は綺麗と言うだろうルックス。腕まくりをしたスカジャンとジーンズ姿の上からでも、スレンダーとわかるスタイル。

間違いなく探していた人物、須藤美香だった。

「……ちよっと、その機嫌が悪いのが良くわかるお姉さん？」

まずは、春樹が少女に声をかけた。少女は、三人組の男子を見て、不機嫌そうに強い言葉を返す。

「……生憎、ナンパならお断りだよ。そんなに尻軽じゃないから」

少女は、聞こえるほどの舌打ちをして、この場に一秒でも居たくないと言いたげな雰囲気を作っている。そのまま振り返って、三人とは逆方向に向かって歩き出そうとした。

「ま、そう言わないでよ。須藤美香さん？」

雄太がそう言うと、少女の足はピタリと止まった。

「……何で、アタシの名前知ってるわけ？」

美香は振り返り、三人を鋭く睨みつける。

「アンタの妹、須藤由香ちゃんから説得を頼まれてね」

友成は、美香の目を見ながらそう告げた。

「由香が説得？ バカにしてる訳？」

美香の表情は、先ほどよりも三割りは不機嫌の度合いが増していた。

「そーゆうつもりはねーよ。頼まれたのはホント」

友成は、淡々と告げる。

「フン。ホントの話でも、アタシは帰りたくもないし、学校も行きたくないんだから。説得なんか意味無いからね」

美香の強気の状態に、三人はそれぞれ思うことが有った。

（……こりゃ、何言っても聞かねーっぽいな。メンドーだわ）

友成は内心で、正直面倒事を引き受けたと思ってしまった。

（顔は良いけど、口は悪いし気が強え……。じゃじゃ馬もいいとこだぜ）

春樹は、ヤレヤレと言いたげな表情で、ため息を吐いた。

（絵に描いたようなツンデレ。姉妹揃って萌え要素バッチリ）

雄太だけは、無意味にプラス思考だったりする。恐らく、彼の視線には一枚だけフィルターが貼られているに違いない。

「ハイ、話はオシマイだよ。さっさと、帰りな」

打ち切るように美香が言い放ち、再度振り返って歩き始めた。

しかし、二歩進んだ時点で、別方向から声が飛んできた。

「そっちの話が終ったんなら、こっちの話に移ろうじゃねえか」

美香の前方一メートルに二人組の男が、道を塞ぐ様に立っていた。そこそこに体格も良く、如何にも不良の好みそうなダボダボの格好をしている。

「あんた等、また殴りたい訳？」

美香は、二人組の男を睨みつけて、啖呵を切った。会話の内容からすると、以前に一悶着有ったと、推測できる。

「おっと、今回は油断しねえようにしねえとな。この姉ちゃん、なかなかやるからよ。最近の女って、ツエーからね、ケツケツケ」

二人組の片割れが、見下した様な笑いを見せて、美香と友成達三人を見る。すると、後ろに別の四人の男が現れていた。人数を集めて、潰そうと考えているのは明白だ。

「デメェら、マジか……」

美香はギリッと、奥歯をかみ締めた。

「ヘッヘッヘ。ついでにこっちの野郎共も、やっちまうかあ」

四人組の男達の一人が、下品な嘲笑をしながら言った。その様子を見て、友成はふうと溜め息を吐き出した。

「まったく……。結局、こういう展開になるわけね」

友成は面倒なのか、肩をすくめながらぼやいた。

「イイんじゃないの。最近、暴れてなかったしよ」

春樹は、ニヤッと笑って指をポキポキと鳴らした。

「それなら、俺は二人に任せるとするさ」

雄太はそう言ったすぐ後に、右手で美香の肩を抑えた。

「……なんだよ」

肩を叩かれた美香は、雄太を睨むように見た。

「ここは、ひとまずあの二人に任せといてよ」

雄太は、アイドルグループのファンサービス中のような、ハニカミスマイルを見せて、そう言った。

そして、次の瞬間には。

――バキヤァン――！！

春樹の右ストレートが、一人の不良を吹っ飛ばしていた。

「……なっ」

呆氣に取られたのは、美香だけではなく、他の五人の不良達も同じであった。

「……テメエら、ボコボコにしたるわ――！！」

美香と雄太の前に居る不良が、逆上して殴りかかってきた。

「おっと、こっちだよ」

雄太は、右手を美香の腕に回して、二人揃ってバックステップ。

不良の拳は空を切った。

「……ちよっ、何！？」

美香は、腕を引っ張られたまま、訳がわからない状態だった。

「次、右に飛んで」

雄太は淡々と指示するように言った。二人揃って右に避けると、片割れの不良の蹴りが空砲に終わっていた。

「友成、任せた」

雄太が言うと、友成は既に隣に居た。

「しゃーねーな」

友成が短く言葉を切って、右のハイキックを顔面にブチ込んだ。

――ドゴォ――！！

顔面が持ち上る程の蹴りの直後に、追い討ちで左のフックをアゴに叩き込んだ。この二発で、一人目はなすすべなく、地面に沈んでいた。

「この、ドチビがあ!!」

不良の片割れが、叫びながら友成にパンチを繰り出した。しかし、友成は左手で難なく受け止めた。

「チビって言うんじゃないよ!!」

チビと言われ、怒った友成は左手を薙ぎ払って、右のアップパーを放つ。

——ゴキヤアア!!

本日の喧嘩で、一番鈍い打撃音を響かせると、不良は既に地面に大の字で転がっていた。

「はい、お終い」

友成はそう言いながら、ホコリを払うように手をパンパンとはたいた。

「春樹いー。そっちはどうよ?」

友成は後ろ側の春樹の様子を見ようと振り返る。それと同じように、雄太と美香も同じ方向に視線を移す。すると、春樹自慢の怪力で、既に三人が倒されていた。

「おう、後一人だ」

春樹の返答は、余裕シヤクシヤクと言った感じであった。

「て、テメエら……。俺ら、クニ商相手にこんだけムチャクチャやって……タダで済むと思ってるのか!!」

最後の一人が、悪あがきのように怒鳴り散らす。

(……クニ商って、ここら辺じゃ悪で有名な高校じゃない)

美香の脳裏には、クニ商と呼ばれる不良校の、悪い噂が一気に横切り、改めて三人の様子を見た。

しかし、雄太はハニカミスマイルを崩していない。友成は部外者の用に、別方向を向いてタバコに火を着けている。

「……だったら?」

そして、春樹は不適に笑ったまま、最後の一人に一步步近づいた。

「……ひっ!?!」

春樹の不気味な笑いに、不良の顔は恐怖で強張っていた。そして、左で胸倉を掴んで強烈な右フックをぶちかました。

——バキィイツ！！

不良の顔面が、バウンドしたボールの様に弾かれる。

「バーカ。相手選んで喧嘩する位なら、不良なんかしてねえっつの」

そう言って春樹が左手を離すと、不良は一撃で失神していたようで、糸の切れた操り人形の様に崩れ落ちてしまった。

「おっし」

友成は、春樹と雄太をチラリと見た。

「さてと……」

雄太も、春樹と友成へと、順番に視線を合わせた。

「……おう」

それを見て、春樹の首は縦に動いた。

三人の揃ったアイコンタクトは、次の行動の合図だったのだろう。「……？」

ただ、美香にはその行動の意味が理解出来なかった。そして、三人が同時に美香を見つめて一言だけ、こう言った。

「警察来る前に、逃げるぜ！！」

四人は、一目散に走り出した。警察に通報が行くと、後々厄介だという事で、ここはさっさと逃げだしたのであった。

最初に集合していた公園に、戻ってきた友成達。久々の全力疾走で、全員肩で息をしている。

「あー、走ったら気持ち悪い……」

友成はそう言いながら、芝生の上に寝そべった。

「喧嘩よか、走る方がきついで」

春樹もそう言いながら、へたり込んだ。

「俺も運動不足だな……」

雄太も膝に手を添えて、呼吸を整えていた。

「……私だけ女なんだから、少しはペース考えてよ」

美香も深呼吸をしてから、芝生の上に腰を降ろした。そして、薄暗い電灯に照らされた男子三人をマジマジと見ながら、口を開いた。「そう言えばさ。アンタ達、多分涼浪だよね？　まだ、名前聞いてなかったんだけど？」

思い出したように、美香は聞いた。最初の内は聞く気は無かったのだが、予想外の強さを知ったので興味が出たと言うのが、本当の所だろう。

「そーいや、まだ自己紹介してねーな」

友成はゆっくりと上体を起こしてから、言葉を続けた。

「俺は、早瀬友成。宜しく頼むぜ」

友成はそう言って、右手をクイツと挙げた。

「俺は手塚春樹ってんだ」

春樹は美香を見ながら、そう告げる。

（こっちは“東中の狂犬”で、あっちが“西中の大魔神”か……。

涼浪に居るのは噂で聞いてたけど。……道理で強い訳ね）

美香は二人の強さに、即座に納得した。何より、同学年の悪名高い不良の二人がつるんでいる事自体が、予想外としか単語が見つからない。

「俺は、相原雄太。一応言っておくけど、俺はこの二人と違って不良じゃないよ」

雄太も、スマイルを浮かべてそう言った。

（コイツは聞いたこと無いな。でも、つるんでるくらいだし、喧嘩も慣れてるっぽいから……。案外やれる奴かも知れないね）

雄太に視線を写しながら、美香は内心でそんなことを考えていた。

「俺も、不良じゃねーぞ」

友成がそんな風に横槍を入れる。

「嘘付け!!」

春樹が、すかさず突っ込んだ。

「お前が不良じゃないなら、日本全国の不良が優等生になるな」

雄太も、茶化しながら口を出す。

「オイオイ、一秒足らずで否定するなよ」

友成は、唇を尖らせながら言った。

「……プツ……クク。アッハッハ……アンタらバツカじゃないの」

美香はそのやり取りを見て、思わず腹の底から笑い出していた。

「お前まで、笑いすぎだつての!!」

友成は美香を指差して、文句をたれる。

「アンタ達が、面白いって思ってたさ……。あー……。何か、久しぶりに笑った気がする……」

美香はポツリと、呟いた。

「そー思ふんならよ、ちゃんと学校来いよ。……美香」

友成は、微笑しながら美香を見つめた。

「ああ。アンタ達となら、退屈しそうに無いからね」

美香は、由香や彩に見劣りしない、百万ワットの笑顔を見せながら、嬉しそうに言った。

（……こう見ると、結構可愛いじゃねーの）

友成は思わず、ドキッとした。

（こう言う風に笑うんだな、この娘）

春樹も、心拍数が二割増し上昇したのを感じた。

（これは、見事なツンデレ……）

雄太は口から出そうになった言葉を、堪えながら飲み込んだ。恐らく、口に出したら殴られると考えた結果なのだろう。

そして、翌々日。

昼休みに入り、友成は再び由香と二人で屋上に居た。

「本当に、ありがとうね」

由香に、深々と頭を下げられて、友成は若干恐縮するような気持ちになっていた。

「ま、良いつて事よ。どうせ、暇だったし」

謙遜する様に言うが、友成の頬は少しだけ赤くなっていた。

「それでね、お礼に何だけど…」

由香は、少しだけ照れながら言った。

「……ん？」

その様子を見て、極力冷静を装う友成だったが、内心では色々な期待に胸を膨らせた。

（もしかして……キス位はさせてくれるとか？）

かなり、自分の都合の良いように考えている。そして、由香は鞆から、可愛らしくラッピングされた、袋を取り出した。

「昨日、クッキー作ってみたの。良かったら食べてね」

由香はそう言って、百万ワットのスマイルで手作りのクッキーを手渡した。

「サンキュー。美味しくいただくわ」

友成も期待とは違っていたが、笑顔でそう答えたのだった。

「うん。それじゃ、また教室でね」

由香は、笑顔で手を振ると、先に教室に戻っていった。一人屋上に残った友成は、クッキーを一枚ポリポリと頬張った。

（うん……味は良いけど……何かすげー固いな……）

由香の手作りクッキーは、結構固かったようだ。奥歯でバリバリと噛み砕いて、缶コーヒード喉の奥に流し込む。

そして、ポケットから取り出したタバコをくわえると、一連の流れで火を点ける。

（……まあ、これにて一件落着って事かな）

そう思いながら、屋上で五月晴れの空を見上げつつ、タバコの煙を吐き出した。

しかし、今回の一件で起こった喧嘩が、また大事に発展していく。そのことを、友成達はまだ知る由も無かった。

？

四話 委員長の頼み事（後書き）

今後は、この六人がメインキャラになっていきます。

詳しい紹介は、後々紹介していきます。

伍話 事件は現場で起きる（前書き）

サブタイトルは、洒落に近いです……。

伍話 事件は現場で起きる

ゴールデンウィーク。それは、新たな学園生活の中で、一番最初に訪れる四日間の大型連休。しかも天気が快晴であれば、宿題を放置してでも遊びに行きたいと言うのが、学生達の本音だろう。

そんな理由で、連休初日。友成は持っている私服の中で、一番小綺麗な白の長袖Tシャツとジーンズをセレクトして、街に繰り出した。一番綺麗と言っても、上下のセットで二千円を下回っている安物だが。

「おーす」

ニコニコしながら、合流地点の駅前のターミナルに待ち合わせ時刻の五分手前に到着した。

「おはよ、友成。ちゃんと間に合ったね」

まず声をかけたのは、ワンピースとカーティガンを身にまとった彩。

「おう、来たな」

薄手のジャケットと、デニムパンツ姿の春樹。腕をまくっているのは、彼なりのこだわりだろう。

「後は、由香ちゃんと美香ちゃんだけだな」

パーカーと、ミリタリールックのカーゴパンツを着こなす雄太が、まだ由香と美香の着いてないことを告げる。

そして、待ち合わせ時刻から五分経過した頃。

「悪い、待たせちゃったね」

ストライプのシャツと、ダメージジーンズ姿の美香。

「……えへへ、ごめんなさい」

可愛らしいフリル付のシャツと、チェック柄のスカートを履く由香。

これで、全員が合流した。なお、遅刻の原因は由香は寝坊したとの事らしい。

事の成り行きは、折角ゴールデンウィークに家でダラダラするのも勿体無い。そう考えた友成は、雄太に街に遊びに行こうと提案。それを聞いた彩も加わって、最終的に春樹、美香、由香の六人でブラブラすることになった。

しかし、何処で何をするかなどは、決めていない。ファーストフード店で、軽い食べ物を摘みながらの話し合いの結果、ボーリング↓昼飯↓ゲームセンター↓カラオケというコースが決定した。

そして、まずはボーリング場に到着したのだった。

「……そりゃあ!!」

友成の投じたボーリング球は、本人の意思と無関係に左へと曲がっていく。そして、左隅の溝を、ゴロゴロと転がって行く。案の定、モニターにはGと記されていた。

「ギャッハッハ、お前ガーターばかりじゃねえか」

腹を抱えて大爆笑の春樹。

「うるせーんだよ。手本見せてみろっての!!」

友成も負けじと、言い返す。

「俺とお前は、格が違うんだよ」

春樹は自信満々に、そう言って自分用のボーリング球を持ち上げる。

「……ふんがあ!!」

春樹の投じた鋼球は真っ直ぐには転がらず、右へと転がっていく。ガーターこそ免れたが、結局右端の一本を倒しただけだった。そして二投目は、さっきと反対に転がっていくと、今度は左端の一本を倒すのみだった。

「お前、大差ねーだろ!!」

友成は春樹を指さして、そう罵声をだす。

「バカ言え、ガーターと二本の差はでかいだろ!!」

春樹は、手で二の数字を作りながら、差を大きいと主張。

「どっちもどっちよね……」

彩は、呆れながら呟いた。

「アタシも、そう思うね……」

美香も、それに同調した。

「何時もの事だから、気にしなくて良いんじゃないか？」

雄太は慣れた物を見る様子で、そう言った。この二人の言い争う姿は、割と日常茶飯事のようなだった。

「そーそー。楽しいから、良いと思うよー」

同調する様に、由香も楽しそうに笑顔を見せていた。

ボーリングを三ゲーム程、楽しんだ六人。運動をすれば、自然と空腹になるという訳で、バイキング形式のファミリーストランで、ランチタイムとなった。

「……」

粗方の食事を終えた後、男三人はテーブルにとり狭しと並んだ、大量のケーキやプリンスイーツを見て唖然としていた。

「やっぱり、チーズケーキは外せないね」

スプーンで一口分のチーズケーキを口に入れた彩の表情は、まさに幸せの絶頂と言い切れる笑顔だった。

「プリンも美味しいねー」

天使の微笑みを浮かべながら、スプーン目一杯のクリーミーなプリンを、幸せ一杯の表情でほお張る由香。

「アタシは、ティラミスが一番好きだな」

美香もやはり女性。普段からは想像出来ない、にこやかな表情で食していた。

「女の胃袋ってのは、まったく解らん……」

聞こえないくらいの小さな声で、友成は一言呟いた。

「ところよ……。前から思ってたんだけど」

春樹は、不意に話を切り出した。

「何だよ。急に」

友成が、春樹に返答すると、意外な話題を切り出してきたのだっ

た。

「俺と友成と美香は、頭が悪いから別だけど。何で、こっちの三人は、涼浪に入ったんだよ？」

お前らの頭なら、別にもっと勉強できる学校に行けたんじゃないかねえのか？」

こっちの三人とは、彩、由香、雄太の三人の事である。実際、成績は涼浪高校の一年の中でも、上位に入る。その気になれば、進学校でも普通に通えるだろう。

「簡単だよ。こっちの方が楽しいからさ。教科書にしか書いてない事をやって、良い学校行って、良い会社入って……。そんな物に、魅力は感じないさ。」

学歴、一流企業、偏差値……。何かと、つまらない規則に縛られて、自由になれない。それだったら、バカでも良いから、自由を選ぶさ」

雄太の、言葉に一同は啞然としていた。

「お前……良い事言うな」

春樹は、雄太の言葉に感心した。

「へえー。ただのオタクって思ってたけど……」

美香も、マジマジと雄太を見つめた。

「雄太らしいな。コイツも結構、天邪鬼な所あるしな」

友成は、雄太を指差して、ニヤリとした。

「いやいや、友成に捻くれてるとは、言われる筋合いはないぞ」

雄太は、友成の意見にすかさず反論。

「……んで、由香ちゃんは、どういう理由で？」

友成は、雄太の意見を見事にスルーした。

「オイオイ、スルーかよ。酷い扱いだな……」

雄太は、不満そうに紅茶を一口すすった。

「私は、そんな雄太くんみたいに、大した理由は無いよー」

由香は、謙遜する様に手をブンブンと振った。

「ふーん。例えば近いとか？」

彩が、由香を見ながら尋ねた。

「それも有るけど……。ほら、涼浪はセーラー服じゃない？ セーラー服って一回着てみたかったの」

単純と言われれば、至って単純な理由である。

「そう言えば、私たちは北中だったから、ブレザーなんだよね。アタシも、ブレザーはあんまり好きじゃないけど……」

美香が、そう言うってから、彩をチラリと見た。

「彩ちゃんは、どういう理由だったの？」

由香が、彩の方を見つめて、聞いたのだが。

「私は、普通よ。通える距離の普通科が良かった」

素っ気なくそう答えていた。

「そうなんだー。てっきり、友成くんと一緒に良かったのかと思っただから」

由香の一言は、導火線に火のついた爆弾そのものだった。テーブルに座る五人は、一斉に凍りついてしまった。

「ちよっと、そんな訳無いじゃない！！ コイツとは、ただの幼馴染で……」

焦ったように、彩はまくし立てた。

「そうかそうか。お前は、俺が居ないとダメか。そうかそうか」

慌てる彩をおちよくる様に、友成は彩を見つめた。

「ちよ……オマエ、余計な事を言うな、バカ！！」

彩は更に焦って、手をバタバタ振る。

「……ツンデレですよ、春樹さん」

雄太は、春樹に小声で告げた。

「……ツンデレってなんだよ」

春樹は至って冷静に、聞き返していた。

（……余計って事は、内心は満更でもなさそうだね）

美香は彩を見ている内に、つつい含み笑いをしてしまう。

「あれ……。変な事言っちゃったかな？」

由香に至っては、原因である爆弾を投下した張本人にも関わらず、

状況を掴めずにポカーンとしていた。

「もー！！　だからあー！！」

彩は必死の否定をするのだが。

「照れんなよ、ガッハッハ」

結局、全て空振りに終わっていた。友成の場合、本気なのか冗談なのか、イマイチ区別が付きにくい。恐らく、本人的にはおちよくっているだけなのだろうが。

そんなこんなで、ランチタイムも終了し、その後はカラオケとゲームセンターを順に、ハシゴすることとなった。六人が遊びつくした頃にはすっかり夕暮れとなっていた。友成達の男三人は、ゲームセンターの中のベンチで一服入っていた。

しかし、同時刻の同じ建物の中に、先日に一悶着あった連中も居たことに気が付いて居なかった。対照的にクニ商の生徒の四人組は、友成達の存在をしっかりと確認していた。

「やっぱ、この前の奴らだよな。しかも、女連れてたぜ？」

「どうするよ。人数集めて、フクロにしちまおうぜ」

「羽田さんに来てもらえば、あんな奴ら即効で潰せるぜ」

「……いや、もっと面白いこと出来るぜ。羽田さんに、前から言われている奴のセッティングの手間も省けるしよ。とにかく、電話しとくぜ」

このような、会話のやり取りがあったことは、当然知る由も無かった。

そして、それを知らない男三人は座りながら会話を始めた。

「もう、夕方だぜ。しかし、遊んでる時間と学校に居る時間が、同じ流れとは思えねーな」

友成は、缶コーヒを飲みながらそう言った。

「全くだな。結構、腹も減ってきたよ」

雄太も、友成の意見に同調する。

「なんか食いに行くか？　それか、ビールでも飲みに行こうぜ」

春樹は、その意見を提案した。

「ばーか。もう、金がねーよ」

友成は、春樹の意見を一蹴。なお、繰り返すが彼らは学生で未成年である。

「そう言えばさ。三人は？」

雄太は、思い出したように周りを見渡した。

「さあな。まだ、その辺でゲームしてるんじゃないか？」

春樹は、そう告げて背もたれに体重を預ける。友成の方は、特に何も言わずにタバコを吸いだした。

それと同じ時、女子三人はゲームセンターの外に出ていた。偶然、アイスクリームの移動販売の車が前の路地を通過しているのを目撃し、つつい食べたくなったというのが理由である。三人共、ガードレールにもたれながら、アイスクリームをゆっくり味わっていた。「ちょっと、今日だけ食べ過ぎたかな？」

そう言いつつも、彩の手には既にアイスのコーンさえ残っていない。

「大丈夫だって。成長期なんだから、栄養はしっかり取らないと」フォローするように、美香はそう言った。当然、アイスは残っていない。

「そうだよー。学校始まったら、体育もあるもん。体重何て、気にしなくても大丈夫だよ」

由香も愛らしい笑顔で、彩にそう返事をした。

「やっぱり、そうだよね」

それに、彩も笑顔で返答した。プラスにとらえてるというべきか、開き直っているというべきか。食欲とダイエットの反比例は、世の中の女子達にとって、永遠の課題なのかもしれない。

「私、アイス食ったら少し寒くなっちゃった。そこで、飲み物買ってくるね」

由香が二人に断りを入れて、建物入り口付近の自販機に飲み物を買っていく。

この僅かな時間の単独行動。これが、事件の幕開けとなるのだった。

監視しつつ、待機していた二人が、ここで行動を取った。

「……今だ、やんぞ」

由香が一人になったのを見計い、急接近を試みた。自販機から、飲み物を取り出そうと前かがみになった一瞬の間。

「……!？」

由香は、悲鳴を上げる暇も無く、拘束されていた。男の一人が、由香を後ろから羽交い絞めにして、口を塞ぐ。さらに、二人がかりで抱え上げて、側に駐車させている、乗り付けていたワンボックスカーへと、乱暴に押し込んだ。

「お前ら何してんだ!!」

異常な物音を察知した美香が、怒声を発してワンボックスカーに駆け寄っている。

「やべえ、早く出せ!!」

男が指示すると同時に、スライド式のドアを乱暴に閉めたワンボックスカーは弾かれたパチンコ玉のように急発進。

「……そんな、どうしよう」

彩も駆け寄っていたが、遠ざかる車両の影を見て、地面に力無くへたり込んでしまった。

「あいつ等、多分前に突っかかってきた連中だ……。ふざけやがって、ゲス野郎!!」

怒りのあまり、乱暴な言葉が美香の口から飛び出た。

それと、同時に自動扉の向こう側から、友成達三人が店舗から出てきた。

「おーい、何やってんだよ」

状況を掴んでいない友成は、のん気に声をかけた。

「……友成い」

彩が、泣きそうな声を絞り出すように発した。

「……？」

三人は、只事ではないことが怒ったことを即座に察知した。

「……由香ちゃんが、さらわれちゃったよ」

彩の出した言葉に、表情が一気に強張った。

「……すまない。アタシが、前に揉めたクニ商の連中に気づかなかつたんだ」

美香の言葉には、自らの不甲斐無さをかみ締めているように、力がこもっていない。

「……やっぱり、警察に……」

「そんな必要ねーよ」

彩の一言を、友成は封じるようにそう口を開く。

「……クニ商って、解ったんなら話は早えーよ」

友成は口元を、ニヤリとさせた。もつとも、目付きは鋭く、怒りを堪え切れていないのは丸解りだ。

「こういうやり方は、気にいらねえな」

春樹も、怒っている事が一目瞭然だった。一言だけ呟いて、くわえているタバコに火を灯す。

「決まったな。行くか」

雄太の表情も、スマイルを崩して、普段とはかけ離れた怒りの顔を見せる。

「そういう訳だ。彩と美香は、先に帰っててくれ」

友成は二人を鋭い眼光で、睨むように見つめながらそう言った。

「ふざけんな!!」

美香は、にらみ返すように友成を見て、声を荒げる。

「こっちは、妹が目の前でさらわれてんだ。それで、帰れって言われて帰れるわけ無いだろ!!」

美香は強い口調で、友成をまくし立てる。

「私も行くよ!!」

彩も続けて、大きな声を発する。

「……危ないし、喧嘩も嫌いだけど。でも、少し間違ってたら由香

ちゃんと立場が変わってもおかしくないもん。私も帰らない!!」
彩も強い言葉で、友成を真っ直ぐ見つめてそう言った。

「……しゃーねーな。どうなっても、知らねーぞ」

友成は観念したように、頭をポリポリと掻いた。恐らく、現状で二人に言っても引き下がらないと考えたのだろう。

「ま、なるようになるさ」

雄太も、二人が覚悟していることを察して、そう言葉を出す。

「所でよ、友成。クニ商の奴らのたまり場って、お前知ってんのか？」

春樹は、思いついた様に友成にそう尋ねる。だが、友成はポケットから携帯電話を取り出して、当然の事と言わんばかりに口を開いた。

「こういう時にこそ、頼れる先輩って居るんじゃねーか」

取り出した携帯電話のディスプレイには、水島太陽と表示されていた。

誘拐現場から、西へと郊外に少し走った場所に位置する、潰れたパチンコ屋の店舗。外壁は落書きだらけで、如何にもならず者がたまっている雰囲気が醸し出されている。

由香の手足はガムテープで拘束され、口も塞がれている。ワンボックスカーから強引に引きずり降ろされ、真っ先に目に飛び込んできたのは、如何にも柄が悪く怖いという以外の印象を持ってない、多数の男達。数はざっと十数人は居るであろう。

「しかし、随分と上玉の女じゃねえの」

「やべえな。すぐにでもやりたくなるぜ、こりゃ」

「アホ。先に手出したら、俺ら全員が羽田さんに殺されるっつーの」
「あの人、遅くなるかもよ？」

「そーいや、パチンコで確変かかったとか言ってたな」

「マジかよー。遅くなっちゃうじゃん。俺、我慢できねえよ……」
男達の下品、かつ欲望丸出しの会話が耳に付く。由香はガムテ

プで封鎖された口の中で、舌を噛み切って死にたくなるような、嫌な感情に支配される。

そんな中、頭に浮かんだ人物。

(……お姉ちゃん)

それは、同じ学年の姉、美香。

(……いじめられたときも、お母さんに怒られたときも。何時も近くに居てくれたもん。

お姉ちゃんは、不良で言葉使いとか乱暴だけど……。ホントは優しく、とっても強い人から……)

由香は、信じていた。美香なら助けに駆けつけてくれる事を。

(……絶対に来てくれる)

根拠など、何処にも無い。だが、確信しているのだ。

そして、願いは叶った。

——ガシャァン!!

ざわついた空間を静寂に変える、派手に響いたガラスの碎ける音。

「何だ!？」

「何だよ、カチコミか!？」

そして、すぐさま中の不良共が一世にざわめきだした。ぶち割られたガラス窓と、地面に転がる自転車。

続々と現れる、友人達の姿を、由香は見逃さなかった。

「やっぱ、こういう時の登場は派手にいかねーとよ!!」

聞きなれた、小柄な少年の声。

「おう。今回は、徹底的に潰してやるぞ、コラ!!」

彼と何時も遊んでいる、大柄な少年の声。

「ヒロインを救うヒーローは、何時でも駆けつけるのさ」

クラス一番の優等生の声。

「……だからって、窓から自転車を投げつけるのも考えものよ」
クラスで一番仲の良い少女の、聞きなれた突っ込みの声。

「お前ら、アタシの妹拉致った事。体で後悔させてやるよ!!」

そして、何よりも待ち遠しかった。強くて頼れる、由香の大好きな姉の声。

（皆……助けに来てくれたんだ）

由香は、少し泣いていた。だが、それ位嬉しい一瞬だった。

「何者や、お前ら!!」

一人の不良が、怒声で威嚇する。

「……………見たまんまだっての!!」

少しの間を開けて、友成が怒鳴り返した。本当の所、カッコよく言いたかったのだが、その言葉を思いつかなかった。

「なめやがって……ぶっ殺してやらあ!!」

叫び声と同時に、クニ商の不良軍団が一斉に襲い掛かる。

「……お前ら三人は、最短距離で突っ走れ!!」

そして、友成もそう叫ぶと同時に、地面を蹴った。

「オッシャア!! 行くぜ、この野郎!!」

春樹も駆け出して、敵を目掛けて特攻する。

大人数相手に、友成と春樹は真っ向から勝負を仕掛ける。

——ドガア!!

友成が膝蹴りで、先頭の不良を撃墜させる。

——バキィ!!

春樹も豪快な右フックで、不良を吹き飛ばす。

そのまま、二人が暴れまわってる脇を抜けるように、雄太、美香、彩は由香の元に駆け出した。

「デメエら!!」

それに気が付いた一人の不良が、三人に向かって走り出そうとした。

「……甘いぜ!!」

しかし、春樹が不良の腰に手を回しており、不良は動けなかった。

「オリヤア!!」

——ドガアッ!!

春樹は怪力に物を言わせて、不良にバックドロップをお見舞いし

た。長身からの投げ技で、頭から落下した不良は、ピクリとも動かなくなっていた。

友成と春樹が、集団の気を引いている間に、三人は由香の元へと駆けつけようとした。

もつとも、この二人の場合は、全員の気を引こうとしてるのか、単に全員を潰そうとしているだけなのか、全く判断が出来ないが。しかし、由香の周りにはまだ、三人の不良が立ちはだかる。

「……邪魔だよ!!!」

——ズドォッ!!!

美香は我先にと、一人目を目掛けて前蹴りを喰らわせる。

「この、クソアマ!!!」

隣の不良が、美香を目掛けて突進する。

「うりゃ!!!」

——パキィ!!!

しかし、横から雄太が強烈な正拳突きを、アゴに叩き込んだ。崩れ落ちた不良を尻目に、美香は次の不良を目掛けて、裏拳を放つ。

——スパアアン!!!

美香の裏拳は小気味良い音を立てて、不良の鼻にヒット。

「ぐおお……」

怯んだ隙に、美香は右手で相手の胸倉を掴み取った。

「喰らいな!!!」

——ペキィッ!!!

右足を上げ、振り落とすと同時に頭突きを繰り出す、一本足頭突きで不良の鼻骨をへし折った。鼻血を噴き出して、不良はうずくまる様に倒れこんだ。

「やるね。伊達に、不良少女を務めてないね」

感心したように、雄太は美香に声をかけた。

「アンタも、ただのオタクとは思ってなかったけど、中々のもんだよ」

美香も、雄太にそう言葉を返した。

「もっとも、あの二人には敵わないさ……」

「……同感」

二人が少しでも視線を移した先には、多勢の不良をなぎ倒し、暴れまわる友成と春樹が居た。

「オラァ!!」

友成が、とび蹴りで不良を吹っ飛ばせば。

「ドリャァ!!」

春樹は、不良を殴り飛ばしている。この二人に関しては、普段の喧嘩と何の相違も無いかもしれない。

そして、雄太と美香の後ろに隠れるように、彩は由香を拘束していたガムテープを剥がしていた。

「由香ちゃん、何にもされてないよね。大丈夫だった?」

彩は、由香を抱き寄せながら、心配そうに声をかけた。

「……うん。みんなが来てくれるのが早かったから」

由香が、声を振り絞るように発した。それを見て、彩は少しだけ安堵の息が零れていた。

「二人とも。まだ終っちゃいないよ!!」

油断しそうな二人に、美香は強い言葉で牽制する。まだ、クニ商の不良達が全員倒せた訳ではないのだ。建物の中に、鈍い打撃音が反響し続けている。

「ウラァ!!」

友成が、髪を掴んで顔面をぶん殴る。

「どっせえい!!」

春樹が、相手の足を担ぎ上げて、そのまま不良の群れの中にぶん投げる。

十人以上の不良を向こうに回しながら、二人が獅子奮迅の暴れっぷりを見せる。しかし、流石に二人の体力も底をつき始めていた。

「クソッタレ……さすがに多いぜ」

友成の口から、ついばやきの一言が出てしまう。

「どうしようもねえよ。ここまで来たら、やっつくしかねえだろう」

がよ」

春樹が、気合いを入れ直すように促す。この二人が、まだ猛進を止めることは無い。

更に壁際で、由香と彩を護るようにして、雄太と美香が不良達相手に立ちふさがる。

「オラァ!!」

「セイツ!!」

美香も雄太も、拳を振るって何人かの不良達を向かえ打つ。

「こりゃ、相手もタフだな……。もう、拳が痛くてさ」

元々好戦的ではない雄太は、ちよつと嫌気がさしてきた。

「……アンタ、そんな根性の無い事言うなよ。やらなきゃ、こっちがやられるよ!!」

美香は、雄太の言葉を一蹴した。しかし、こちらも体力は相当に辛くなっている。

そして、暴れる事数分間。

「……どうにか、半分位はやれたか?」

ファインディングポーズを崩さず、春樹が周囲を見渡す。

「にー、しー、ろー、はー……。そんなもんだな」

友成が目視で数えた所、相手の不良の半数は倒すことは出来ていた。

緊迫した空気に包まれた中、建物の扉がガチャリと開いた。全員の視線が、ドアへと向いた。クニ商の不良たちも、友成達も動きが止まってしまった。

そして、本当の死闘はここから始まるのだった。

「おう、オメエらなんつう様だ、このボケ共が!!」

怒声が響き渡った。ついにクニ商の不良共の、もっとも恐れていた人物が現れてしまったのだ。一瞬にして、クニ商の不良達は一斉に動きを止めてしまう。

入り口に立っていたのは、パーマをかけたヘアスタイルに、恰幅

の良い体格。豹柄のシャツと、紫のパンツ。おまけに身長も、春樹と同等クラスにでかい。見た目は、まさに映画のヤクザにしか見えない男だった。

「……は、羽田さん!!」

「こ、これは……その……」

クニ商の不良達の動きが一斉に固まる。

「やかましいわ!!」

羽田は言葉を一蹴して、近くに居た不良の一人を殴り飛ばす。

——バキヤア!!

殴られた不良は、軽々と吹っ飛ばされて、そのまま気を失っていた。

「このカスが」

そう言葉を吐き捨てて、羽田が地面に唾を吐きかけた。

「……オイオイ。仲間にそれはあんまりじゃないのか？」

次に羽田との距離が近かった雄太が、歩み寄りながらそう声を出した。

「ああ!? おめえみてえな、優男にゴタゴタ言われる筋合いなんざねえわ!!」

怒声を発して、羽田は雄太との距離を縮めた。そのまま、手の平で雄太の喉仏を強引に掴んだ。

「……ウグッ!？」

首を絞められた状態になってしまい、雄太の表情が一気に苦悶の色に染まる。

「寝てやがれ、タアコ!!」

羽田が力任せに、雄太の後頭部をコンクリートの柱に打ち付けた。
——ゴンッ!!

「ぐあ……」

鈍い音が響いて、雄太は足元から崩れていった。

「……テメェ!!」

今度は、美香が渾身の右ストレートを、羽田の顔面目掛けて撃ち

でした。

——バキィ——！！

右ストレートは、完璧なクリーンヒット。しかし、羽田は顔色一つ変えず立っていた。

「……！？」

それを見た美香は、思わず呆然と立ち尽くしてしまった。

「……効かねえな」

そして、今度はお返しとばかりに、羽田が美香のボディにパンチを放った。

——ドスン——！！

「グホッ……」

強烈なボディブローが突き刺さると、美香は腹部を押さえながら、膝から地面に崩れてしまった。

「雄太君——！ 美香ちゃん——！」

その様子を間近で見ていた彩が、悲痛な叫び声を上げる。

「……けっ。こんな程度の連中にやられやがって……」

虫けらを見下すように、雄太と美香を見下ろす羽田。

「まあいいわ。女はやり捨てて、男はサンドバックにでもしちまえばな。」

クニ商に逆らうと、どうなるかって事を、体で解らせてやるわ」

羽田がそう言って下種な嘲笑を見せると、春樹がすぐ近くまで歩み寄っていた。完全にブチ切れているのか、その怒りの表情は鬼の形相と言っても差し支えないものだ。

「……だったら、解らせて貰おうか……このブタ野郎——！」

豚と揶揄された羽田は、表情を一気に怒りに染めた。

「んだと、コラァ——！」

春樹を睨みつける羽田。体格のどかい奴同士が、間合いを詰めていく。

「テメェは、マジ氣にくわねえ。俺がブタの餌になるくれえに、グシャグシャにしてやっからよお——！」

「このクソガキが……。ぶち殺したるわ!!」

周りにいた、不良達は羽田のキレっぷりに恐怖を隠せないで居た。

「アイツ、死んだぞ……」

「羽田さんに、デブとブタは禁句だからな……」

「やべえよ……。切れた羽田さんは、マジ半端ねえし……」

そして、春樹は啖呵を切って、羽田に殴りかかった。

「ぶち殺してえなら、やってみな!!」

春樹は、渾身の力で右の拳を振り抜いた。

——バキヤアッ!!

強烈な一撃。春樹の右フックは、羽田の顔面をジャストミートしていた。春樹自身の右拳にも、十分な手応えが残っていた。

しかし、羽田は若干よろめいた程度で、口から流れた血を手の甲で拭いながらこう言った。

「……中々だな」

その表情には、余裕さえも垣間見えた。

(……あのデブ。春樹のパンチをわざと喰らいやがった)
傍観していた友成は、そう直感した。

「んだと、オラァ!!」

その台詞に激高した春樹は、更に左のフックを繰り出す。

——パシィ!!

「……なっ!？」

羽田は春樹の左フックを安々と、左手で受け止めていた。

「パンチってのはな、こう撃つんだよ!!」

左手を払いのけて、羽田は右の拳を一閃。

——ゴツッ!!

顔面に強烈な一発が入ると、春樹は思わず足がぐらついた。

「ぐう……」

その様子を見て、羽田はニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「おうおう、威勢が良い割りには、もうお終いか？」

春樹は、血の混じった唾を地面に吐いて、羽田を睨みつける。

「ざけんな。これ位で、くたばると思うな!!」

力任せに拳を振るうが、相手も同時に拳を繰り出す。

——ドゴォ!!

今度のパンチは、相打ちだった。しかし、吹っ飛んだのは春樹の方だった。春樹の顔は、流石に動揺したことを隠せなかった。

(……このブタ、相当強えな)

春樹自身、相打ちの状態で自分が吹っ飛ばされた事は、今までの喧嘩の中で一度もなかった。

(悪名高い、クニ商のアタマってだけはあるぜ……。こうなりや、気合いで押し切るしか手はねえ!!)

気合いを入れなおして、春樹は果敢にも正面から殴りかかった。

?

伍話 事件は現場で起きる（後書き）

来週も、金曜に更新できるかな……。仕事が忙しくて……。

六話 目覚める狂犬（前書き）

クニ商編、ラストです。

六話 目覚める狂犬

私立国見商業高校。通称、クニ商。

元々、この街の不良高校として有名だった。しかし、現在のアタマが仕切るようになってからは、より凶悪さと卑劣さが強くなっていた。

恐喝や、窃盗などは日常茶飯事。シンナー等の薬物を捌いたり、強姦紛いの行為があったり。挙句の果てには、暴力団と繋がりが有るとまで噂されている。知らない限りは近づく者が居ないと言う、地元では屈指の極悪高校である。

そんな、不良高校でアタマを張るだけあり、羽田の腕っ節は相当な物だった。

「オリヤアア!!」

——ドガアア!!

春樹の撃ち出した、右のフックが羽田の顔面を弾く。

「フンッ!!」

——バキヤアッ!!

今度は、羽田のフックが、春樹の顔面を弾いた。

お互い足を止めた、壮絶なパンチの撃ち合い。春樹は、持てる力と気合を振り絞って、真っ向から勝負を挑んだ。凄まじい殴り合いの喧嘩に、周囲で見えていた不良達も、思わず息を飲んでしまう。真正銘、壮絶な喧嘩だった。

しかし、徐々に春樹の攻撃は、羽田の攻撃に押され始めていた。

「おうおう。頑張るなあ、兄ちゃん」

羽田の顔面には、春樹のパンチが何発も入っていた。しかし、少々の血を流している程度で、大きなダメージを受けている様子が見えない。

「ブタに負けたら、恥ずかしくて街も歩けねえからな……」

挑発するように口を開くが、春樹は膝に手を着きながら、肩で息

を切らしている。険しい表情を見る限り、スタミナもダメージも限界が見えている。

「減らず口も、叩けなくしてやるわ」

羽田がいやらしく微笑しながら、拳を振りかざしながら一歩ずつ歩み寄る。

「……このヤロ!!」

春樹は右の拳を振りかざし、羽田の顔面にパンチを繰り出した。

——ゴシャアッ!!

春樹の撃ち出した拳よりも先に、羽田の拳が春樹を撃ち抜いた。

カウンターで撃ち込まれたパンチは、限界に近づいている春樹の体力を根こそぎ奪うには、十分過ぎる破壊力だった。春樹は、思わず片膝を地面に着いてしまった。

(クソ……、体が動かねえ)

春樹の意思は、無念にも体に通じなかった。羽田は春樹の髪の毛を鷲掴みし、右の拳を振り上げる。

——バキィ!!

一発目で、春樹の鼻を打つ。

——バキィ!!

二発目は、春樹の頬を打ち抜いた。

——バキィ!!

三発目は、目尻を目掛けて放たれていた。

そこからは、春樹の顔面にパンチの応酬。春樹の顔面が、瞬間にボコボコになっていた。目頭は腫れ上がり、鼻と口から血が吹き出ていく。

「おう、痛えか。痛えだろ？」

春樹のボコボコ顔を眺めながら、羽田はいやらしく口元をニヤリとさせた。この見下されている状態に、春樹自身は相当にムカついた。

(……このトンコツ野郎!!)

——ピュッ!!

一瞬の隙を突いて、春樹は口に溜まった血を、羽田の目に向けて吐き出した。不意を突いた、目くらましだ。

「……!？」

羽田が僅かにひるんだ瞬間、春樹はありったけの力を拳に込めた。

「うるあっ!!」

——ガコオッ!!

羽田の顔面に、渾身の右拳を叩き込んだ。思いっきりパンチをぶち込まれると、羽田の体が思わず仰け反って、後退してしまった。

「……ざまあねえな」

春樹のしてやったりの表情に、羽田も相当に頭に來たようだった。

「このクソが!!」

——ドコオッ!!

羽田の繰り出した前蹴りが、春樹の腹に打ち込まれた。元より、ダメージの蓄積した体に、この蹴りは相当応えた。

「ぐほお……」

春樹の体がくの字に折れ曲がり、フラフラとしながら後退してしまふ。膝もガクガクと笑ってしまい、立っているのがやっとの状態だった。しかし、更に迎撃のパンチが撃ち下ろされた。

——ゴキィ!!

避ける程の体力が無い春樹は、真面に喰らってしまう。春樹の体は、ついに地面へと倒れこんだ。

「オラァ!!」

倒れこんだ春樹の体に、羽田は何度も足で蹴りつける。

「春樹……」

雄太が、ぐったりとしながら、春樹と羽田を見た。

「もう止めてよ!!」

建物に、彩の叫びが響いた。

(……クニ商には、やっぱ勝てねえのか?)

自らの不甲斐無さを羨む美香。そして、目を瞑り怯える由香。

「くたばれや、このボケナスが!!」

罵倒しながら、羽田は春樹の顔面を踏みつけようとした。

だが、この男が何時までも、黙って見ている訳がなかった。

（……このバカ。喰らいすぎだつての！！）

——バキィ——！！

刹那の間に、近づいていた友成。羽田の顔面を目掛けて、ローリングソバットを炸裂させた。不意打ちで、横顔にケリ技を喰らった羽田の巨体は、大きく吹っ飛ばされた。

「……交代だ。少し寝てろ」

春樹の目前に着地した友成は、短くそう告げた。

「……コイツ、マジ強えぞ。氣いつける」

春樹は何とか口を開いて、友成に忠告した。

「そう思うなら、少しは避ける努力しろつての」

友成は呆れ半分と茶化し半分で、春樹に言い返す。だが、普段のお茶らけている時の表情とは程遠い。友成は完全に戦闘モードに入っている。

「……このチビ、俺にの顔面に、横から蹴り入れるとはよ……。ダメから先にぶち殺したるわ！！」

羽田の怒りの矛先は、友成へと切り替わった。

「どいつもこいつも、チビチビ言いやがって……。ムカつくつての！！」

友成は地面を蹴り、羽田の真正面から特攻する。

羽田との距離が離れた事を見計らって、雄太はよろよろしながらも、春樹の元にかく駆け寄った。

「……大丈夫か？」

雄太は、血だらけでボコボコの顔をした春樹を、不安そう覗き込んだ。

「……流石にキツイぜ。あのブタ、メチャメチャタフだ……」

春樹は、何とかといった感じで口を開いた。しかし、手にはガツチリと握り拳がつくられていた。真正面からの殴り合いで、撃ち負

けたことが余程悔しいのか、拳は小刻みに震えていた。

「……こうなったら、友成が最後の砦だな」

雄太は、祈る気持ちで友成と羽田の喧嘩に視線を戻した。

（……友成、あのブタ……ぶち殺せ）

春樹は、口には出さなかったのだが、友成なら羽田に勝てるという期待を持って、視線を喧嘩に移した。ただし、友成にすぎるしかない現状。それも春樹にとっては、少し悔しい事だったに違いない。

羽田と友成の間合いが、射程圏内に一気に詰まった。

「死ねや!!」

羽田は友成の顔面目掛け、右拳を打ち下ろすように繰り出した。

——ヒュン!!

紙一重で回避して、至近距離まで詰め寄った。

「ジャラァ!!」

——ズドン!!

友成が左拳で、羽田の腹部をえぐるようにボディブローを打ち込む。

——バキヤァ!!

続け様に、右アッパーを打ち込んだ瞬間、羽田の顔が跳ね上がる。

「んのがキ!!」

——ブン!!

羽田が、反撃のパンチを繰り出すが、友成はバックステップで交わし、一旦距離を取った。

（……思いつき入ったけどな。タフな野郎だったの……）

友成も、羽田の頑丈さには流石に呆れた。実質、友成の筋力事態は、春樹よりも劣っている。

「うっとおしいわ、このチビ!!」

羽田が突っ込んで、間合いを詰る。射程距離に入ると、前蹴りを放つが友成はこれも左に回避。

「ソリヤァ!!」

そのまま一気に踏み込んで、ボディに目掛けて肘打ちをぶち込む。
——ドスッ——

「グオッ……」

思いつきり叩き込まれると、羽田の体が一步後退。

「オッラァ——」

——スパァン——

更に至近距離からの右ハイキックが、羽田の顔面に叩き込まれた。

「……んなっ!？」

羽田の顔面へと、威力、キレ、共に申し分のない蹴りは入っていた。しかし、羽田は顔面で受け止めたまま、友成の右足を掴んでいた。

「……捕まえたぜ」

腕力で強引に足を引っ張ると、友成はバランスを崩してよろめいた。

（……ヤベッ）

一瞬、危険を察知したものの、避けられる程の時間は無かった。

——ボゴオッ——

がら空きの顔面に、羽田の拳が叩き込まれた。体重の差も手伝って、友成の小柄な体が一メートル以上吹っ飛ばされた。

「……痛ってえ」

友成の口から、思わず言葉が漏れてしまう。それ程羽田のパンチの威力は、相当に強力であった。

「おう、こんなもんじゃすまさねえぞ」

羽田が威嚇しながら、ゆっくりと一步づつ歩み寄る。

「……っち」

舌打ちを出すと、友成は飛び上がる様に、素早く起き上がった。しかし、着地した際に少しかだけ足元がフラ付いてしまう。そして、内心ではかなり焦っていた。

（……やべえな。今の一発で、ちょっと足にきちまった）

春樹と、同レベルのタフさを誇る友成。それでも、まともに喰ら

ってしまおうと足にくる程、羽田のパンチ力は桁はずれの威力だった。
(……しゃーねー)

小柄な体格である以上、足を使ってスピードのある攻撃をするしか道は無い。しかし、足が使えないとなると、友成が相当不利な条件に置かれてしまっている。それでも、友成は気合を入れ直して、真正面から特攻した。

——バキィ——！！

羽田の繰り出したパンチと、友成の繰り出したパンチが、同時に当たる。ここからは、足を止めた豪快な打撃戦だ。

——バキィ——！！

友成のパンチが、羽田の顔面を捉えた。

——ドガァ——！！

今度は、羽田のパンチが友成の顔面にヒットした。強烈なパンチを喰らっているにも関わらず、友成は一切引き下がる気配を見せない。

何発ものパンチ、何発ものキックの応酬。その喧嘩は、見ていた人間全員が圧倒された。しかし、この喧嘩で体格が二回り以上は小さい友成が、不利なのは明白だった。

同じ軌道のパンチならば、絶対に先に当たることは無い上に、加わる力も少なくなってしまう。徐々に羽田の打撃が、友成の攻撃を上回っていく。

「……クソツタレが」

劣勢に立たされた友成を見かねた、春樹がダメージを負った体を、気合と根性だけで奮い立たせた。しかし、足取りはよろよろとおぼつかない。立っているだけがやっとの状態だ。

「さてよ、春樹……」

雄太は、喧嘩に加勢しようとした春樹の太ももを掴んで制止させた。

「このまま見てられっかよ……。アイツ、死んじまうぞ？」

春樹がそう言うが、雄太は手を離さなかった。

「……このまま加わったら、春樹もぶん殴られるぞ」

雄太の言っていることは、完全に矛盾していた。

「お前、喧嘩だぞ？ 何、訳解らんこと言ってるんだ……」

春樹は雄太の言葉に、キョトンとした表情をする。

「アイツじゃ無い。友成にだよ」

雄太は、いたって真面目にそう告げた。

「……お前、頭打っておかしくなったのか？」

春樹は、ますます意味がわからなくなっていた。

「春樹……。友成が“狂犬”って呼ばれてた理由……。お前は知らないだろ？」

雄太が真剣な眼差しで放った言葉に、嘘は無い。そう思った春樹は、喉から出そうな言葉を飲み込むしかなかった。

そして、次の瞬間。

——バキヤアアン！！

強烈な打撃音が、建物の中に響き渡った。反射的に春樹と雄太は、改めて友成と羽田の喧嘩に視点を戻してしまった。

羽田の放った、右ストレートは、友成の顔面にクリーンヒットしていた。

（……手こずらせやがって）

拳に伝わる感触から、羽田は自身の勝ちを確信した。

しかし、友成は倒れなかった。

（……何だ！？）

むしろ、先程とは身に纏う空気が変わっていた。

羽田は直感した。友成の中で、何かが変わったと。

（このチビ、何なんだ！？）

さっきまでとはまったく違う、背後に見えるドス黒いオーラ。血だらけの顔面で、邪悪に染まった微笑を浮かべる友成。

「こんの、ガキヤー！！」

羽田の繰り出したパンチは、友成の顔面目掛けて放たれた。しかし、友成は避けようともせず、同時にパンチを放っていた。

——バキヤアッ！！

相撃ちだった。しかし、小柄な友成はびくともせず、逆に羽田の巨体が後ろに仰け反った。

（……何だ、コイツは！？）

後ろに下がった羽田を見て、友成はニヤリとしていた。その悪魔のような微笑みには、羽田さえも戦慄を覚えた。

「……」

無言で殴りかかってきた友成に、羽田も反撃のパンチを繰り出した。

——ドガアッ！！

再び相撃ち。しかし、またもや羽田の体が圧倒された。対照的に直立不動を保つ友成。さっきとは真逆の状態に、誰もが戸惑いを隠せなかった。

「……何なんだ、ありやあ？」

友成の様子を見た春樹は、ゴクリと唾を飲んだ。春樹は、素直にこう思った。

怖い、と。

友成のその表情は、悪魔か死神か。或いは魔物にさえ見えた。

「……キレちまったな」

雄太が短く言葉を漏らす。

「キレた？」

春樹が雄太に尋ねる。

「ああ。アイツが“狂犬”って呼ばれたのも、きっかけがあるんだよ」

雄太が、ポツリポツリと語りだした。

「俺達が中坊の時にさ、俺と友成ともう一人のツレが、カス学の連中五人に絡まれたんだ。相手はカス学のヤンキーだったし、俺達三人ともボコボコにされたんだ。

そしたらヤンキー達が、友成が生意気だって言い出して、アイツ

一人を集中してボコボコにしだしたんだ。本当に友成が死んじゃうかと思ったけど、俺は怖くて動けなかったんだ」

雄太がここで、一旦話を区切った。

「カス学つつたら、滅茶苦茶ヤンキー校じゃねえかよ……」

「ああ。流石に助けが来て欲しいって思ったね。そしたらさ、友成が急に立ち上がったと思ったら、五人相手に殴りかかっていったんだ。

もう、目に入った奴らを関係無しにぶん殴ってた。気が付いたらヤンキー達全員倒れてたんだ。しかも、顔なんか血だらけで半笑いだっただよ。それ以来、アイツが“狂犬”って呼ばれるようになってたんだ」

雄太が言い終えると、春樹は友成と羽田の喧嘩に視界を戻した。

（確かに、ありゃ狂犬だ……）

春樹は、不気味に笑う友成の表情を見て、そう思えずにはいられなかった。

——ドガァッ！！

友成は攻撃の手を緩めない。もはや、羽田と友成の形勢は完全に逆転していた。

（何モンだ、このチビは！？）

羽田も反撃するが、友成はまったく動じない。むしろ避ける事もせず、ひたすら殴り返してくる。

——バキヤァァ！！

友成の顔面を、羽田の拳が撃ち抜いた。友成の体が、大きく揺らぎながら、後退してしまう。

（……やったか！？）

パンチに手応えを感じた羽田は、思わず友成を見下ろした。それでも、友成はゆらりと立っており、まだ不敵な微笑をしている。ゆっくり、一步一步羽田に歩み寄ってくる。ついには、羽田の心中に焦りの色が出始めていた。

（俺が、殴り合いで押されてるのか？ いや、そんな事ありえねえ

!!)

羽田にとって、過去の喧嘩でともに殴り合う喧嘩は数知れない程やってきた。しかし、自分よりもはるかに小柄な男に、撃ち負けている事は後にも先にも全く無い。何より、自分自身が押されている事を認めたくなかった。

しかし現状では、殴られて自分の体が後ろに後退している。

——ドガァッ!!

十何度か目の相撃ち。ここで、ついに羽田の膝が地面に付いた。

「……グオオオオ!!」

羽田の表情が、苦痛に歪んだ。

(俺が撃ち負けた……。そんなバカな!?)

羽田の顔は、痛みと驚愕が混じりあっている。改めて、目の前の友成と視線が重なる。

見下ろす友成は、羽田を嘲笑っていた。そのまま、一切の躊躇も無しに、友成は羽田の顔面を蹴り上げた。

——バキィィィッ!!

まともに攻撃を喰らった巨体は、後ろにドサリと倒れこむしかなかった。友成は間髪入れずに、羽田の体に馬乗りになった。

(……こ、こええ)

友成の顔を見上げた瞬間、羽田の体は恐怖で縮み上がっていた。半笑いの友成の表情。読み取れる感情は、純粋な殺意のみ。それこそが、羽田の恐怖した理由だ。

そこからは、完全に一方的に友成の攻撃が繰り返されていた。それは、草食動物を捕食するために捉えた肉食獣が牙を向けているかのように、攻撃を繰り返す。友成の右拳は、羽田の顔面に何発も撃ち下ろされた。

——ドガァッ!!

——ドガァッ!!

——ドガァッ!!

鈍い音を響かせて、容赦無く一方的に羽田を殴り続ける。その顔

に付いている血は、自分の顔から流れ出た物なのか。それとも、顔から飛び出た返り血を浴びたからなのか。誰にも判別できない。

ただ、血に染まって、笑いながら拳を撃ち下ろす友成は、完全に狂っているとした言いようが無かった。誰にも止められない、そして止まらない狂犬。

最初の内だけは、羽田も何とかガードしていたが、徐々にガード出来なくなっていく。そして、ついにガードしていた腕が力尽きて、だらりと横たわってしまう。それでも、友成は羽田の顔を殴り続けることを止めなかった。

「……おい、雄太。あのブタ、もうオチてるんじゃないか？」

様子がおかしい事に気が付いた春樹が、雄太に話を振る。

「それはマズイな……。あのままじゃ、殺しちゃおう!!」

雄太も、焦ったように返事を返した。二人が友成を止めようと、どうにか立ち上がったが。

「……!？」

「……何時の間に？」

しかし、二人より先に友成を止めていた人物が居た。

それは、彩だった。

彩が、友成を背中から抱きしめて、耳元に細く悲しげな声で一言だけ言った。

「……もうやめてよ」

彩の悲しみを堪えたような、悲痛な表情だった。友成はスッと立ち上がり、彩の方を振り向いた。血に染まった顔面は、悪魔のような微笑はゆっくりと消えていき、虚ろな眼をしたまま、ぼんやりと彩を見つめていた。

「……友成い、もう良いから……。だから、やめて……」

彩は泣きそうな声で、そう告げた。

「……………」

そう言われた瞬間、電池が切れたオモチャの用に動きが止まった。

そのまま、友成の体が彩に倒れこむようにもたれかかった。

「ちょ、友成！！」

彩は友成を抱き寄せて、必死に声をかけた。しかし、友成からの返答はなく、目を閉じて意識を失っている。

「大丈夫なのか！？」

なんとか近づいた雄太が、友成の顔を覗き込むように確認した。手を口元にかざすと、息をしている事は確認できた。

「……大丈夫。多分気絶してるだけだと思う」

雄太は、呼吸していることは確認した。それを聞いた彩は、ホッとしたりように安堵の息を漏らした。

そして、周りにいたクニ商の不良達。アタマが負けてしまつて、動揺が隠せないように、全員がざわめいていた。

「……おい、羽田さんが負けちまつたぞ」

「俺たち、殺されるんじゃないか？」

「どうするよ……」

「逃げるしかないだろ？」

どよめく不良達を、春樹が睨み付けた。

「おう、テメェら！！」

周囲の不良達は、一斉に直立不動で硬直した。

「……さっさと、このデブ連れて消えやがれ！！」

「……ハ、ハイ！！」

春樹の一喝に、不良達は二人がかりで羽田を肩に貸して、蜘蛛の子を散らすように建物から逃げ惑っていた。不良達が消え去ると同時に、全員がようやく緊迫した空気から解放されたのであった。

「……何とか、終わったね」

美香は、地面に腰をおろしたまま、大きく息を吐き出した。

「……おう。それにしても、コイツは大した野郎だぜ」

春樹は、そう言って友成の顔を見た。

「さてと……。警察が来る前に、俺たちも退散しますか」

雄太がそう言って、友成を肩で背負った。

「ねえ、皆……どうしてこんなに早く助けに来れたの？」

由香は、全員の方を見ながら、疑問に思ったことをついつい聞いてしまった。

「簡単さ。友成が、知り合いの先輩に、クニ商のたまり場を聞き出したからさ」

雄太はニツとしながら、そう答えた。

「まあ、正直賭けだったけどね。ただ、表に停まってる車見た時は、間違いないって思ったよ。今回ばかりは、友成に感謝しないとね」

美香は、そう言いながら、友成をチラリと見た。

「そうだったんだ……。助けてくれて、ありがとうね」

由香がようやく見せた笑顔に、全員の顔が安心した表情に変わった。

「それは、コイツが起きた後に言っただけでやってくれ」

春樹はそう言って、右の親指で友成を方を指した。

「ああ。少なくとも、コイツが居なきゃ助けに来ることも出来なかったしさ。そうじゃなかったとしても、全員ダメだったさ」

雄太もそう言って、今は気を失っている友成の顔を見た。

「まさか、クニ商のアタマまで倒しちゃうなんてな。……本当に凄い奴だよ」

美香は微笑しながら、友成を眺めていた。

「私は、喧嘩するのは反対だけどさ……」

彩は少し躊躇った後に、言葉が続けた。

「友成がさ、普通に助けにいくって言った時は、少しカッコいいかって、ちょっとと思ってみたりとか……」

彩の言葉は、尻つぼみに小さくなっていったが、その一言を全員が聞き逃していなかった。

「ホウホウ。……まったく、羨ましいぜ」

春樹はジト目で、彩を見た。

「幼馴染フラグ発生しましたね」

雄太がニヤニヤと、彩を見つめる。

「良いんじゃないか。こういう展開も」

美香もニヤリとしながら、彩を肘で突つつく。

「エヘヘ。友成ちゃんと彩ちゃんなら、きっとお似合いだよー」

由香に至っては、随分とストレートな発言だ。

「い、いや……。そう言う意味じゃなくてさ、その何て言うか……。言われた彩は反論しているつもりなのだろうが、その言葉はしどろもどろで、信憑性にかけてしまっている。

「さて、帰ろうぜー」

春樹がそう言って、建物の外に歩き出した。

「だから、違うってー!!」

彩の声が、建物の中の木霊した。

それを知ってか知らずか。友成本人は、眠りこけていた。

翌日。

由香と美香は、コンビニで買い物をしていた。

「……由香。早く選びなよ」

「うん。でも、迷っちゃうよー」

二人が品定めしているのは、友成へのお見舞いの物だ。ちなみに、今見ているのは冷蔵のスイーツの棚である。

「迷うって……。アンタが食べる訳じゃ無いんだから」

美香は呆れたように、口を開いた。

「えへへ、解ってるんだけど、美味しそうだなーって思っちゃって」

由香は照れ隠しのように、笑ってごまかした。

一通り買い物を終えて、二人は友成の自宅へ向かうため、歩き出した。

少し歩いたところで、美香が不意に口を開いた。

「ねえ、由香……」

美香の声は、さっきより少しだけトーンが下がっていた。

「どうしたの？」

由香は何時も通りの、マイペースな返事を返した。

「……今まで、ごめんね」

美香の一言に、由香は目をパチクリとさせた。

「お姉ちゃん、昨日の事なら……」

由香の出した言葉を遮るように、美香は再び口を開いた。

「昨日の事じゃなくてさ、今までの事だよ」

「……え？」

「アタシさ、いつから解んないけど……由香に嫉妬してたんだ。

勉強出来て、人気もあって。アタシなんか、親とか先公にいつも由香と比べられてた。それが、嫌でさ……。気が付いたら、アンタを
凄く妬んでた……」

「……」

「でもさ。この前、友成にアタシの事で相談したんだよね。

その時さ、実はすっげえ嬉しかったんだ。自分ばかりが、苦しい
って思ってたんだけど……。ホントは、由香も悩んでたんだよね……」

「お姉ちゃん……」

「だからさ、これからはちゃんと近くに居るようにするよ」

美香の独白が終えると同時に、二人の顔は晴れやかになっていた。

「……だってさ」

由香が、ポツリとこう言った。

「私にはお姉ちゃんが、すっごく頼りになるんだもん。私はお姉ちゃん
がさ、大好きだからね」

由香の笑顔は、太陽でまぶしく照らされていた。それを見た美香
は、にこりと姉らしい笑顔を浮かべたのであった。

「さてと……。寝込んでる野郎を、元気付けに行きますか!!」

「うん!!」

にこやかな表情の、由香と美香。

二人の歩く道に写る影は、右手と左手がくっついていていた。

数日後。

ゴールデンウィークの四連休も開けてしまい、学生達は休みの気分が開けないまま、憂鬱そうに通学路を進んでいた。

友成も、また机に向かって憂鬱な気分になるのかと思いつながら、アクビを噛み殺して歩いていた。顔には、まだ絆創膏を貼っており、張れやアザは残っているものの、多少は良くなっていた。曲がり角を抜けると、随分と見慣れた女子生徒が待ち構えていた。

「おはよ、友成」

彩は、手を挙げて友成を見ていた。

「おう、彩……。もしかして、待ってたのか？」

友成も、彩を見つめながらそう呟いた。

「……少しね。話したいことあったしさ」

「ふーん……。しかしよー、折角のゴールデンウィークだったのに、体痛くて寝てばっかだったぜ。そしたら、もう学校だし。すげー、損した気分だったの」

「……そりゃ、喧嘩して怪我してるんだから、自業自得でしょうが」
彩にそう言われて、友成は唇を無意識に尖らしてしまった。

「でもよ、何だかんだ言って、ずっとお見舞い来てくれたもんな。

「それでも、結構感謝してるんだぜ？」

「……そりゃね。私が一番家近しい、お婆さんは仕事で忙しいですよ？ 由香ちゃんを助けてくれたんだし、それくらいはしないとさ」

「……ありがとな。彩」

友成が照れくさそうに、感謝の言葉を述べると、彩は頬を少しだけ染めながら下をむいてしまった。そこから、少々の沈黙が続いた。その間も、二人は黙々と学校に向けて歩き続けた。

しばらく歩いた頃に、彩は重たい沈黙を破る様に口を開いた。

「ねえ、友成。一つ聞いて良い？」

「何だよ？」

「もしさ……。あの時、私が連れ去られてたら……助けにきてくれた？」

友成は一旦立ち止まると、間髪入れずにこう答えたのだった。

「お前、アホか」

友成の一言に、彩は少しだけムスツとしてしまう。それに構わず、友成は言葉を続けた。

「助けに行くに決まってるだろ。当たり前前の事を聞くなってるの」

その表情は、自信に満ち溢れていた。無意味で根拠のない自信。しかし、その自信が彩にとっては、とても頼れるものだったに違いない。

「……」

「仮にお前拉致られたんなら、地の果てだろうが、地球の反対側だろうが、突っ走って行ってやるよ。お前が居なきゃ、俺は面白くねーからよ」

友成は、笑顔でそう言った。

「友成……。ありがとう」

彩も、満面の笑みで言葉を返した。幼馴染同士で、見慣れた顔だったにもかかわらず、友成も彩も眼を合わせた瞬間が、妙に照れくさかった。

「……別に」

友成は、素っ気なく返事を返して、再び学校へと向けて足を進める。そして、歩いきだして十秒もたたない内に、彩が再び口を開いた。

「私さ……」

「何だよ……」

「友成の事、不良って思った事は無いんだよ」

「……改まって、急に何言ってるんだよ」

「ただの本音だよ。そりゃ、悪さもするし、荒くれ者だけどき。元気で自由を求めているってだけなんだと思う。」

檻に入った動物じゃ、好きな時に走れない。檻に入るのを嫌って、好きな時に好きなように走り回れる事。つまり、野生って事なんじゃないかな」

「……彩。お前って、意外と詩人だな」

「だからさ。私は、アンタの思うようにして良いって、最近は考えてる」

「……彩」

「アンタのそう言う部分、嫌いじゃないよ」

彩は、ニツコリとしながらそう言った。

「アホ……いきなり何言ってるんだ」

友成は照れくさそうに、明後日の方へと顔を向けた。

「さてと……。学校でひと眠りすっかな」

「……アンタ、留年しても知らないからね」

気が付いた頃には、涼浪高校の校門が、二人の目前に迫っていた。

六話 目覚める狂犬（後書き）

次回より、新章に突入です。

登場人物紹介（前書き）

涼浪高校に通う、メイン六人組の紹介です。

ただし、一通り読んでからの方が良いかもしれません。

登場人物紹介

早瀬 ハヤセ
友成 トモナリ

本編の主人公。チビでバカでお調子者だが、喧嘩は桁外れに強い。面倒臭がりでいい加減な様だが、仲間意識等はかなり強く、情に厚い一面もある。

何かと厄介事に巻き込まれる運の悪さと、それを乗り切る悪運の強さを持つ。

中学時代は“東中の狂犬”と言われる程の悪名高い不良だった。ただし、本人に自覚が全く無い。

チビと言うことを、かなり気にしており、身長は150センチ少しと随分小柄。だが、体は筋肉質で骨太。また、運動神経や反射神経は抜群に良い。そして、超石頭（物理的な意味で）。

彩とは、幼馴染で家族ぐるみの付き合いがある。結構、意識している所が有るものの、本心は口に出せていない。

成海 ナルミ
彩 アヤ

友成とは幼稚園からの幼馴染みで、本人達曰く腐れ縁。何だかんだ言いながら、友成の事が気になっているよう。

ショートカットのヘアースタイルで、身長は160センチ位。容姿もプロポーションも良く、勉学も運動もそつ無くこなす。隠れ人気が高いらしいが、少々負けん気の強い性格の為か、未だに恋愛経験は無い。雄太曰く、ツンデレの典型らしい。

甘いものが好きで、体重の事は禁句。ちなみに、物語の中でツツコミを担う、数少ない常識人。

相原アイハラ 雄太ユウタ

友成とは中学からの付き合い。身長170センチちょっとで、アイドルグループ並みのイケメン。尚且つ、文武両道の優等生。しかも、家は結構な金持ちと、非の打ち所が無い。

女子人気は高いが、超オタクなので三次元への興味は薄い。友成曰く、趣味が全てのメリットを、デメリットにしているんだとか。

空手の有段者で、喧嘩もそこそ強い。ただ、本人は平和主義なので、喧嘩をしたがらない。何だかんだで、何時も友成に付き合っている（付き合せられる）良き相棒。

手塚テヅカ 春樹ハルキ

友成と入学直後に衝突した不良生徒。今では、悪友となっている。

中学時代は“大魔神”と言われた程の不良で、その名の通り180センチを超える長身と筋骨隆々の体系を持つ。性格も喧嘩っ早く好戦的。しかも、素手やタイマンに拘る。昔ながらの不良で、男らしい（或いはバカ）と周囲の弁。

喧嘩の実力は、友成と互角のレベル。パワーは友成を上回る反面、テクニックやスピードはかなり下回る。タフさと根性は、どっこいどっこい。

実家はラーメン屋で、意外にも料理上手とか。

須藤スドウ 由香ユカ

可愛らしいルックスと、おっとりした性格がチャームポイントのクラス委員長。美香とは同学年だが、双子では無い。

勉強はバッチリ出来るが、運動は苦手。多少うつかりしている（天然な）面が有る為、周囲を勘違いさせる事も……。男三人組のぶっ飛んだ行動を、平然と受け入れられる辺りは、メンタル的にタフかもしれない。

身長は150センチ後半で細身。実は胸が無い事を気にしているの
で、親友の彩を羨ましがっている。料理や裁縫等の家庭的な趣味を
持つが、料理の腕は少し怪しい部分がある。

スドウ ミカ
須藤 美香

由香と同学年の姉。似てはいるが、凛々しい顔立ちをしている。
妹の由香とは正反対の性格で、気が強いじゃじゃ馬娘。勉強はしな
いが、意外と切れ者の一面を見せる時もある。身長は160センチ
後半で、女性としては長身でスレンダーな体系。しかも、格闘技の
センスはかなり高い。

姉妹揃って胸は無いが、こちらはあまり気にしていない（喧嘩の時
に邪魔だから）。不良娘で、下手な男連中よりも喧嘩が強い。大の
格闘技好きで、特にプロレスが好き。

登場人物紹介（後書き）

その他の登場人物も、後々まとめる予定です。

七話 現れた危険な二人組（前書き）

新章に突入します。

新たらしい強敵も登場して、どうなることやら……。

七話 現れた危険な二人組

深夜の街。寝静まった繁華街の静けさを、切り裂く様にバイクのエキゾーストが響いていた。

一人の男が、路地を逃げ惑っていた。

身に着けたジャケットには、大蛇の紋章を象ったワッペンと、『ROCHI』というローマ字が、被写体の刺繍が描かれている。

「……ハア……ハア」

息を切らしながらも、全力疾走で逃走していた。その表情は、後ろを振り向く事が出来ない程、焦りの色を浮かべていた。

男の視界に、曲がり角が見えた。

（……大通りに出れば、逃げ切れる！！）

安堵の息を漏らして、角を曲がった。

「……嘘だろ」

曲がった瞬間に、男の顔は絶望の色で一色に染まった。

「よお。待ってたぜ……大蛇の大将」

そこに立ちはだかっていたのは、黒いバイクに跨っている金髪の男。

猛禽類の様に、鋭い目付き。顔に走る、横一文字の派手な傷痕。誰がどこからどう見ても、危なすぎる雰囲気を出している。

金髪の男は、不敵に微笑しながら、男を睨み付ける。何よりも、その眼が全く笑っていない。

「うう……、クソ……！」

振り返って、来た道に戻り、更に逃走を試みようとしたのだが。「……！！」

ライトの眩しい光と、図太いエキゾーストが、肉眼で確認できる位置まで、追ってきていた。現れたもう一台のバイクは、獲物を逃がすまいと、斜めに停車する。

「アンタ、どこ行くんだい？」

追ってきたバイクのライダーは、ヘルメットのバイザーを上げながら、恐れ慄く男に尋ねた。

ヘルメットを外すと、長くウェーブのかかった髪を、右手でかき上げる。その声も表情も、見間違える事無く、正真正銘の女性である。

しかし、その可憐な顔立ちからは、想像つかない程の威圧感を持ち合わせている。

「もう、逃げられないよ」

女は、バイクから降りながら、男を制止させようとする。挟み撃ちにされた男は、完全に逃げられない事を悟った。

「この野郎!!」

意を決した様に、女に向けて拳を打ち出した。

——ガシィッ!!

だが、女は拳を受け止めていた。

「……先に女のウチを狙うなんて、とことん下種だな」

女は、汚い物でも見るような目で男を睨んでいる。怒りに任せて、そのまま男の腕を取って、関節技を決めた。

「……うぐっ」

肘が逆方向に、締め上げられた。関節がギリギリと軋んで、男の顔色が苦悶の色に染まって行く。

「……お休みい!!」

——ゴキィッ!!

金髪の男の蹴りが、がら空きだった男の顔面に叩き込まれた。鈍い打撃音と共に、鼻から血が飛び散る。

女が関節技を解くと、男はそのまま地面に沈んでしまった。標的の意識を、一撃の蹴りでそぎ落としていた。

「……これで、あと二匹だな」

金髪の男は、タバコを取り出しながら呟いた。

「でもさ、後の二匹は、この街に居ないらしいよ」

女はそう言いながら、髪を指先でクリクリと弄る。

「そうか……。折角だから、ツーリングがてら潰しに行ってみるか？」

男はニヤリと笑って、くわえたタバコに火を点ける。

「……ウチの單車、調子悪いんだよ。今日だって、ヒーヒー言ってるし……」

女は、少し不服そうに呟いた。

「でもよ、放置したままには、しとけねえだろ？」

そう言いながら、金髪の男は紫煙を吐き出した。

「……確かにね。あのバカも、退院してる事だし」

女も、表情をニヤリとさせて、不敵な微笑を見せた。

「決まりだな」

「オッケー。乗せてけよ？」

「解ってるぜ」

「所でさ……。あの二匹が何処に居るのか、解ってるの？」

「ああ、調べはついてるぜ」

男は、一呼吸置いてから、言い放った。

「涼浪高校。そこに居る」

男は、不敵に微笑して、そう台詞を吐き出した。女も、微笑を崩していない。

果たして、謎の二人組の存在は、友成達の元に再び嵐を巻き起こすのだろうか。

一方、そんな事を知る訳が無い涼浪高校の不良達。

天気予報で、梅雨明けの宣言が出された。日中の気温は、うだる様に暑く、夏の訪れを感じさせてくれる。夏休みまで半月を切っている、七月上旬。長期の休みに心を躍らせるのは、涼浪高校の学生も例外ではなかった。

「……あっちい」

屋上の片隅の僅かな日陰に、だらしなくへたり込む友成は、何処か遠くを眺めながら呟いた。

「俺だって、暑いっつーの……」

春樹も、だらしなくへたり込んで、友成に同調した。

そもそも、授業のサボりで屋上という、直射日光を思いっきり浴びる場所を選択している所から、間違っていると言える。

暑さで意識が朦朧とする二人は、僅かな日陰に覆われる、コンクリートの床に寝そべった。そのまま数分程時間がたつと、耳にガチャリと鉄製の扉の開く音が耳に飛び込んできた。

現れたのは、美香。おおよそ授業のエスケープで、タバコを吸いに来たと思われるのだが。

「……二人そろって日焼けでもしてるのか？」

だらしなく地面に横たわる、友成と春樹を眺めながら、美香はすかさずツツコミを入れたのだ。

「……美香。暑いから、アイスコーヒー買ってきてくれ」

視線だけを美香へと向けた友成は、早速無茶苦茶な注文を言った。

「……ついでに、俺のも頼む。ブラックコーヒーがイイ」

春樹も、友成と同じ注文を呟きながら、美香の方を見た。

「ふざけんな……。それと、下からこっちを覗き込むな!!」

美香は、呆れ半分怒り半分で、注文を即座に断りながら、スカートの裾を手で抑え込んだ。視線の角度からだ、スカートの中が見えてしまってもおかしくは無い。

「……暑くて、動きたくねーんだっての」

友成は、悪びれる様子も、動く気配もなく、一言そう言った。

「お前も、恥ずかしがるんだな」

春樹は、上体だけ起こして、笑いながら美香を挑発する様に口を開く。

「……この野郎」

美香は、解り易く拳をポキポキと鳴らしながら、春樹の方へと歩み寄った。そのまま拳を振り落した。

——ガンッ!!

鋼鉄同士がぶつかる様な鈍い音が、屋上に響き渡った。強烈な拳

骨を脳天に喰らった春樹は、思わず頭を抑え込んでしまう。

「……いってえ」

漫画なら、タンコブの描写が出来ているであろう。喧嘩で鍛えられた春樹も、この拳骨は随分と痛かったようだ。

「……お前が余計な事言うからだ。もう一発、いっとくか？」

美香は、右の拳を振りかざしながらそう呟く。人質に銃口を向けている、銀行強盗のような脅し文句と言える。

「……遠慮しとくぜ。流石の俺様でも、痛かったからよ」

拳骨を喰らった箇所をさすりながら、春樹は美香の方を見た。こ
うなると、不良少年も形無しで、実に情けない。

「お前もアホだな、春樹」

友成は、笑いながら言う、上体を起こした。

「うっせえよ……」

ふて腐れながら、春樹は口を尖らした。

「そう言ってる、アンタもアホだよ……。友成」

美香は、呆れたように呟くと、タバコを一本取り出した。

「俺は、何もしてねーっての」

友成は、そう反論する。それを見ながら、美香はくわえたタバコに火を灯した。

「何もしてないから……だろ？」

美香は、煙の混ざった溜め息を、大きく吐き出すのだった。

「……どういことだよ？」

横から見ていた春樹は、会話に横やりを刺した。

「……？」

友成は、理解が出来ず、首を傾げるだけだ。

「知ってるか？ 彩ちゃんがさ……」

美香は、少しタメを作ってから、再び口を動かし始めた。

「この前、男と一緒に歩いてたらしいよ。アタシが見たわけじゃないけどね」

美香は、友成をジッと見つめる。その表情は、呆れて居る事が丸

わかりであった。

それに釣られた春樹も、友成に視線を向けた。

「……マジ？」

友成は、呆然とリアクションを取る事しか出来ないものであった。

その日は、夕方から天候が一気に曇り始めた。一人で帰宅していた春樹は、どんよりと黒くて、分厚い雲を見上げた。

（……こりゃ、一雨来そうだな）

そう思いながら、近くのコンビニへと足を運んだのだった。コンビニの駐車場に到着すると、同じクラスの不良の二人組がたむろっていた。

「……あ、手塚君」

駐車場の輪留めに腰を掛けていた茶髪で長い髪の不良が、早速に声をかけた。

「おう、山下に倉田じゃねえか。こんな所で、暇つぶしか？」

春樹も、そう返事を返した。

「手塚君は、学校の帰りなの？」

相方の帽子をかぶっている、長髪の不良も春樹に尋ねた。なお、茶髪の不良が山下で、帽子を被った不良が、倉田である。

「一応な。そういや、お前ら最近サボりすぎだろ」

春樹は茶化す雰囲気で、笑いながら言った。もっとも、春樹も授業には出ていないので、人の事を言っていられる立場ではない。

「……まあ、かったるいしさ」

山下はそう呟くと、視線を地面に向けた。その表情は、心成しか曇っている。春樹の目には、そう写った。

「……」

倉田は何も答えずに、視線を春樹から逸らしていた。それを見た春樹は、タバコを一本吸い始めて、二人を見下ろした。半分程度吸った時点で、山下は輪留めから腰を上げた。

「……じゃ、俺等は帰るよ」

倉田が呟くと同時に、山下も軽い会釈をした。その雰囲気は、いささか気まずそうだと、春樹には感じ取れた。その背中を見ながら、春樹は一旦呼び止めた。

「……なあ、お前ら」

二人は黙ったまま、春樹の方を振り返った。

「最近元気がねえぞ。何か合ったのか？」

そう言われたが、二人は押し黙ったままだった。

「……ま、俺で良きゃ相談くらいは乗れるぜ。同じ学校の仲間だろ？」

春樹は、そう言って表情をニヤツとさせたのだった。

「……手塚君」

山下の表情は、何処か曇ったままだった。また、倉田の表情も、帽子の陰に隠れて窺う事が出来なかった。

「……」

二人は、返事を返すことはなく、足早にコンビニから立ち去って行った。

（……ったく。仕方ねえ奴らだな）

春樹は、遠ざかる後姿を眺めつつ、溜め息を吐き出すのであった。

一方、同時刻の放課後の屋上。たむろっている、暇人は友成と美香。

ふて腐れた様に、一本のタバコをくわえる友成。誰がどう見ても、あからさまに不機嫌だと解る。

「……」

無然とした様子で、タバコに火を点けようとするが、安物のライターに中々火が付かない。

「……チッ」

手に持っていたライターを乱暴に投げ捨てる様子を、見るに見かねた美香は手持ちのオイルライターを差し出した。

「……アンタさ。そんなカリカリしたって、どうしようも無いんじ

やないの？」

美香は、呆れた様子で友成に苦言を呈した。

「……別に、カリカリしてねーっての」

友成はそう呟きながら、借りたライターでタバコに火を灯す。そして、そのままライターを胸ポケットにしまった。

「コラ、返せよ」

「……」

友成は、無言のままポケットからライターを取り出して、美香に手渡した。

「……まったく。少しは素直になれよ。意地張った所で、手遅れなんじゃない？」

美香の吐き出した、深いため息には、煙が混ざっている。煙が、風に吹かれてゆらゆらと消えていく。

「意地張ってる訳じゃねーし。……アイツが、何処の誰と付き合おうが、俺は知ったこっちゃねーっての」

友成は乱暴に言葉を吐き出した。そして、そのまま立ち上がると、無言で屋上を立ち去ろうとした。

「待ちなよ」

美香は制止させるように声を出したが、友成は無視して鉄製のドアの向こう側に消えて行った。

「……バーカ」

今は姿の見えない友成に向けて、美香はそう罵った。タバコを吸い終える程度の時間が経過すると、友成と入れ違う形で屋上に現れたのは、美香の妹の由香であった。

「お姉ちゃん、ここに居たんだ」

美香を発見するなり、由香はパタパタと美香に駆け寄ってくる。

「……どうしたのよ」

由香に言葉をかける美香の様子は、元気が無いというよりも、面倒事を抱えていると言ったようだった。

「実はね……彩ちゃんの事なんだけどさ」

少し、もったいぶる様子で喋り始めた由香。

「ああ、男と二人で歩いてたって話だろ？」

「うん。その事だけどさ、彩ちゃんに聞いたらね……」

美香は、由香の口からその内容を聞くや否や、盛大に、尚且つ深い深い溜め息を吐き出すことしか出来なかった。

春樹が買い物を終えた後、コンビニを出て数分も立たない間に、暗く分厚い雲から雨粒が少しずつ落ち始めた。

（クソツタレ！！ やっぱり振ってきやがった！！）

コンビニでビニール傘と言う、数百円に満たない買い物を惜しんだ結果、駅前通りのアーケードまで一気に突っ走る事になった。

何とか到着すると同時に、雨は本降りになってしまい、街はあっという間に水浸しの風景に変わってしまったのであった。

「こりゃ、止みそうにねえな……」

諦めた様に空を眺めて、胸ポケットからタバコを取り出した。安物のライターで先端に火を灯して、ゆっくりと一服を始める。

二口目の煙を肺に吸い込むと、けたたましいエンジン音と共に、ずぶ濡れの二人組が乗ったバイクが、アーケード街に入って来た。車両を止めて、サイドスタンドを立てる。そのままバイクから降りてきた二人は、何やら文句を言い合いながら、ヘルメットを脱いだ。乗っていたのは男女のペアなのだが、雰囲気は到底カップルとは言い難い、奇妙な二人組だった。

「……しかし、ひでえ雨だぜ。一分足らずでベタベタになっちゃった」

運転してきた男は、グローブを脱ぎ捨てながら、そう言った。金髪の髪は大きく乱れて、顔には派手な傷跡があった。

「アンタがチンタラしてるからだろ。だから寄り道すんなったでしょーが」

ダンデムシートに乗っていた女は、ジャケットを脱ぎながら、男に文句を投げつけた。ウェーブのかかったセミロングヘアと、二

の腕に入っている太陽のタトゥーが特徴的だった。

「よく言うだろ。急げば曲がれって」

男は、得意げな表情で女にそう言った。

「それを言うなら、回れだ、バカ」

女は、男の間違ってしている文法に、呆れながら文句をつける。

口喧嘩の絶えない妙な二人を横目で眺めつつ、春樹は再び肺に含んでいた煙を吐き出した。

（……なんなんだ、こいつ等）

呆れながらも、野次馬根性でついつい見ていると、そのカップルと春樹の視点が重なった。

「……ん？」

男は、春樹をマジマジと見つめた。

「その制服……君は涼浪高校の人間かな？」

女の方は、微笑を浮かべながら春樹に尋ねる。

その笑顔は、確かに美人だった。だが、決して投げかけられても、気分の良い笑顔ではない。何か裏がある、と春樹は直感でそう感じた。

「ああ。そうだけだよ」

警戒心を強めているため、素っ気なくそう答えた。

「へー。だったらさ、これ位の背の二人組知らない？ 茶髪のロン

毛の奴と、帽子を被ってる奴だけどさ」

男がジェスチャーを交えながら、再度訪ねてきた。

「……」

春樹には、尋ねられた二人組の容姿には心当たりがあった。最近の妙な態度に加えて、何時も二人で行動している奴ら。山下と倉田に、間違いないと。

「……名前は、倉田正弥と山下健太郎っていう奴だけど」

男の出した名前は、春樹の直感と同じだった。

「……知らねえな」

あしらう様に答えたが、二人組は春樹から視線を逸らさない。

「ホントかな？ 何か、知ってるって感じがするんだけどな？」

男はニヤリと笑いながら、春樹にしつこく食い下がってきた。

「……」

春樹は、何も答えずにタバコを吸っている。

「ふーん……。答える義理は無いって事なのか……」

女も、微笑したまま春樹を見つめ続けている。

「……仮に知ってたら、そいつ等をどうするつもりよ？」

春樹が口を開くと同時に、二人組との間の空気が一気に張りつめていく。

「その二人組を、ぶっ殺す。それだけだぜ」

男は、春樹を鋭く睨み付けた。それに同調する様に、春樹の視線も次第に鋭く尖っていく。

「だったら、尚更教えられねえな……」

春樹は吐き捨てる様に呟きながら、くわえていたタバコを地面に落とした。その声には、怒気が混ざっていることは、二人組に伝わっているに違いない。

「……ほうほう。だったら、力尽くで聞いてみるかな」

男は、鋭い目つきのままニヤリと笑う。

「出来るもんなら……やってみやがれ!!」

春樹が、強い口調で啖呵を切る。その刹那、男が一步だけ左足を踏み出した。

「そりゃ……どーも!!」

男は一気に右足を振り上げて、鋭い蹴りを繰り出した。

——ガキィ!!

春樹は辛うじてガードしたものの、ガードした腕に強い衝撃が走った。

謎の男の喧嘩の實力は、極めて高い。その事を、春樹は即座に理解した。

「この野郎!!」

春樹は怒声と共に、男の顔面に目掛けて、右のフックを放った。

——ブォン!!

至近距離から放たれた一発だったが、男はスウェーバックでかわしていた。そのままバックステップで、春樹との間合いを少しだけ広げる。

強烈な風切り音を残した空振りを見て、女は不敵に微笑した。

「中々やるじゃない、この金髪」

そう言った女は、タバコを一本くわえた。オイルライターで火を点けると、先端から一筋の煙が上がる。

「……ヒュウ。アブねーアブねー」

男は微笑を崩すことなく、手の甲で鼻先を拭った。まだ、何処か余裕が残っているようである。

（……コイツ、この距離で簡単にかわしやがった!!）

春樹は、険しい表情を浮かべながら、男を睨み付ける。そして、春樹から視線を逸らさないまま、男の口元が動く。

「……今のパンチは、当たったら痛そうだねえ」

それは挑発なのか、敬意を表しているのかは、春樹には判断が出来なかった。少なくとも、男の表情は不敵な笑みを崩していない。

「痛くなる前に、意識がぶっ飛んでるぜ」

春樹は、強い口調で男に言い返す。春樹の口元が、少しずつ吊り上っていく。

「だったら、当ててみな!!」

男は、再び春樹に向かって特攻を仕掛ける。一瞬の間に間合いがつまり、男は右の拳を振りかざした。

——ガツン!!

一発目は、辛うじて防いだ。だが、春樹の目前にまで追撃の拳が迫っていた。

（……速え!?!）

——ガコォッ!!

今度の左拳は、春樹の顔面を貫いた。ジャストミートされた顔面は、体ごと持ち上がって、鼻からは血が飛び散る。

「そら、もう一丁!!」

男は攻撃の手を緩めず、春樹に息を付く暇も与えようとしなない。今度は、右の拳を振り上げて、ストレートを繰り出そうと構えた。

「……調子に乗るな、このヤロー!!」

春樹も、負けじと右腕を振りかざして、もう一度右のフックを放って応戦。

——ドゴォ!!

両者の拳が、同時に互いの顔面を弾き飛ばした。しかし、相撃ちにも関わらず、男の体が吹っ飛び、春樹はアザを作りながらも仁王立ちしている。

「……舐めんなよ、ニイちゃん」

春樹は、手の甲で鼻血を拭いながら、得意げに言った。それを聞いて、男は飛び上がる様に起きあがった。

「……今の一発は、中々効いたぜ」

男は、尚も不敵な笑みを浮かべて、春樹から視線を逸らさない。

「だったら、次はかなり効く奴を、お見舞いしてやるぜ」

春樹の口元も、ニヤリとして自信ありげな微笑を崩していない。

二人が、ジリジリと間合いを縮めていく。そして、射程距離に入るか入らないかの瀬戸際の瞬間だった。

「お巡りさん、こっちです!!」

通行人の大きな叫び声が、三人の耳に飛び込んだ。

どうやら、喧嘩を目撃した際に警察を呼んでいたようだ。これでは喧嘩を続ける事は不可能である。春樹と男は、即座にファインディングポーズを解くしかなかった。

「……クソ。ナオ、乗りな!!」

女が大急ぎで、バイクに飛び乗ると同時に、エンジンに火を入れる。そして、男も地面に落ちていた、グローブとジャケットを慌ただしく拾い上げて、ダンデムシートに飛び乗った。

「……またな、金髪のアンちゃん!!」

男が、そう言葉を投げると同時に、バイクは凶太い音を奏でなが

ら、雨の中の街に消えて行った。

(……ちい。俺もさっさと逃げるか!!)

春樹も、アーケード街から、雨が降り続ける路地に飛び出した。自宅までの道のりを、土砂降りの中を突っ走って帰宅する。

(……それにしても、あの野郎は何者だったんだ？ 俺のパンチを喰らって、普通に立ち上がりやがった)

ずぶ濡れになっている道中に、頭の中を駆け巡るのは謎の男と女の、奇妙なコンビの事ばかり。少なくとも、地元の間では無い事は確実である。

そして、何よりも春樹の豪腕から繰り出されるパンチを、喰らっても立って居られる程の強者である事。

(山下と倉田を狙ってる見てえだけど……。あっちの目的もよく解らねえし。一波乱あるかもしれねえな……)

そんな不安が脳裏をかすめると同時に、春樹自身は、自らが笑って居る事に気が付いた。

翌日。

春樹は、昼休みの体育館裏に山下と倉田を呼び出していた。理由は、付け加えるまでもなく、昨日の二人組と事だ。春樹が、二本目のタバコを吸い終えるところに、山下と倉田が、体育館裏にやってきた。

「……おせーぞ」

春樹は口を尖らせながら言った。

「ああ、ゴメンよ」

倉田は、申し訳なさそうに呟いた。

「ちょっと、先公に呼び出されててさ……」

山下がそう言い訳を始めると、春樹は黙ってタバコを差し出した。

「……?」

「ま、吸えよ」

若干躊躇しながらも、山下と倉田は一本づつタバコを手を取った。

春樹の差し出したライターで一服入れ出すと同時に、春樹の口が開いた。

「お前らさ。妙な二人組の事知ってるか？」

春樹は、急に真剣な眼差しで、二人に問う。それと同時に、倉田と山下の表情も少し曇ってしまう。

「……それって、金髪で、顔に派手な傷のある男と、肩に入れ墨してる女だったりしない？」

倉田の返答に、春樹は無言で頷いた。

「……やっぱり、この街に来たのか」

山下も、何処かで観念したようにポツリと呟いた。それを見ると、春樹はワテンポ置いてから口を開き始めた。

「……昨日、その二人組と少し揉めてよ。詳しい理由は知らねえけど、お前ら二人を追ってるみてえだったからな。恐らく、涼浪の不良をマトにしてる筈だ」

「……」

「けどよ、喧嘩を売って来るなら、それなりに理由が有りそうだし。何より、お前らがあの二人組の事を何か知ってるなら、聞いておきてえんだ」

春樹は真剣な眼差しで、山下と倉田を見つめた。春樹が滅多に見せない真面目な表情を見て、二人は腹を括った様に口を開き始めた。

「……俺達さ、中学の時は、南の方の海沿いの街に住んでたんだ。その頃に、向こうのツレ達とギャングのチームに入ってたんだ。大蛇ロチってギャング、聞いた事あるだろ？」

「大蛇つつつたら、あっちの街で一番デカイギャングじゃねえのか？ 結構な武闘派って聞いた事あるぜ。意外だったな」

春樹は、感心したように、倉田と山下を見る。

「ああ。一番デカイチームだった……」

「……だった？」

「大蛇は、潰されたんだよ。春樹くんと揉めた二人組と、もう一人の奴に……」

「……」

山下の放った台詞に、流石の春樹も黙り込んでしまった。

「俺ら、高校に上がってからのは抜けてたんだけど、チームの抗争が有るから助っ人で喧嘩しに行ったんだ。昔の仲間に頼まれたし、そんな簡単に見捨てる訳にもいかなかった。だけど……」

「あの三人組は、バケモノ見たいに恐ろしく強かったんだ。

向こうは三人だけで、こっちは二十人近く居たからさ。最初はなめてたけど、仲間は次々と倒されていっちまって。そんで、ビビっちまったツレが、一人の足をナイフで刺しちまった」

「……それから、あの二人が俺等のチームのメンバーを、次々と潰してるんだ。

この街に来てるんだったら、大蛇に関わってた奴らは、もう俺等しか残ってないと思う……」

そこまで話を終えると、山下と倉田は春樹に向けて、深く頭を下げた。

「……すまねえ、春樹くん。これは俺達だけの問題なのに、涼浪の奴らまで巻き込んでしまった」

「俺達が悪いのは解ってる。だけど……」

春樹は、タバコを一口吸ってから、ゆっくりと口を開いた。

「頭上げろよ。別に、言い訳を聞いたかった訳じゃねえからよ」

二人は、ハッとしたように春樹を見つめる。

「俺は、何処のギャングが潰れようが知ったこっちゃねえし。第一、今のお前らは涼浪高校の不良だから、俺達の仲間だろ。

その仲間を潰しに来てる奴に、簡単に差し出す、クズ野郎はウチには居ねえぜ」

「……春樹くん」

「どの道、向こうは俺達に仕掛けてくるのは間違いねえだろうからな。この喧嘩、買ってやろうぜ」

春樹は、力強くそう言った。そして、出所の一切解らない、根拠の無い自信をありありと見せつけていた。

しかし、その根拠の無い自信に、倉田と山下は、少しだけ救われたような気がしていた。

「所でよ。あの二人組……いや違うな。その三人の奴らは、何つー名前なんだ？」

春樹は、改めて三人組の名前を聞き出すことにした。

「春樹くんと揉めた二人……」

金髪の男は、カラザワナオキ唐沢尚紀カサイツバキって奴。それで、タトウーの入った女の奴が、葛西椿。

それと今は来てないけど、その三人のリーダー格の奴で、ヤサカキヨウ八坂京平ヘイって男も居るんだ……」

「向こうの街では、その三人組の頭文字をとって、YKKKって呼ばれてんだ……」

一頻り話を聞いて、春樹は吸っていたタバコを、灰皿に押し付ける。

「……YKKK」

春樹の口から、その単語がポツリと零れた。

「……なあ、春樹くん。アイツらと喧嘩して、勝てるのか？」

倉田は、自信に満ち溢れる春樹に、思わず尋ねてしまう。

「当然だろうが。俺を誰だと思ってんだ？」

それによ……相手が強きゃ、こっちも面白れえだろ」

春樹は、数学の決められた答えと同じと言わんばかりに、力強く答えた。

？

七話 現れた危険な二人組（後書き）

実は、先週は忙しくて更新しませんでした。ごめんなさい……。

八話 底知れぬ実力（前書き）

昨日、初雪が降りました。すっかり冬ですね。

八話 底知れぬ実力

春樹と、尚紀と椿の二人組の一戦から、三日が経った。

ここ二日間で涼浪高校の不良、述べ十三人が襲撃に合う事態に発展してしまふ。しかも、その中の二名は病院送りにされているのだとか。

流石に、そこまで好き勝手にやられているのでは、不良の名が廃るというもの。山下や倉田を始めとする、一年生の不良達、約二十名が体育館裏に集まっていた。

「クソツタレ……。そんなにやられてるのかよ」

山下は、苦虫をかみつぶした様に、渋く表情を曇らせた。

「これ以上、仲間を好き勝手にやられてたまるかよ」

倉田は、右拳を左の掌に打ち付ける。

「……やられた奴らに聞いたんだけど、お前ら二人狙ってるって話だぜ？」

「こういう時に限って、春樹くんに連絡つかないしょ……」

「確か、風邪ひいたとか聞いたぜ？」

「でもよ、居ないからっても、やられっぱなしで終わるわけにはいかないぜ」

周りの不良達も、戦闘モードのスイッチが入ってるようで、一同殺気立っている。

「すまん。俺等二人のせいで、ウチの連中まで巻き込んでしまった」

山下は申し訳なさそうに、不良達に謝罪の言葉を告げる。

「しょうがねえよ。お前ら二人が気にすることじゃねえ」

「そうだぜ。久しぶりに、喧嘩の舞台が出来てるしな」

仲間の温かい言葉を聞いて、二人の表情は少しだけほころんだ。

「ああ。一発かましてやろうぜ!!」

倉田がその言葉を出すと、不良全員が頷いて同調する。そして、YKKとの喧嘩に向けて、一致団結した瞬間だった。

時同じくして。友成は学校をサボって、公園のベンチで寝そべっていた。特に何の目的が有るわけでもなく、ボーっとしたまま時間が経過していく。

そんな時、友成の視界に入った人影が、太陽の眩しさを遮った。

「おい。学校サボって、日光浴か？」

聞きなれた声が入ると、よっこらせと吹き替えの声が入る様に、友成は体を起き上らせた。

声の主、雄太をマジマジと見ながら、友成はボヤキ口調で喋り出す。

「お前も、こんな時間にここに居るなら、サボりじゃねーのか？」

友成の口先が、ブーブー言いながら尖っていく。

「友成みたいに、常習犯じゃないからな。たまには、のんびりしたいんだよ」

雄太は肩をすくめながら、ボヤキ口調でそう言った。

「……何がのんびりだったの。普段、ゲームしかしてねえ癖によ」

「ま、そんな事よりさ。彩ちゃんの事、聞いたんだろ？」

雄太の口から出たキーワードに対して、友成は懨然とした表情を浮かべる。

「……お前って、やな奴だな」

友成は嫌味を込めて、雄太に毒を吐いた。

「友成ほど、へそ曲がりじゃないからな」

雄太は、爽やかなスマイルと対照的な、きつい台詞で言い返した。

友成は、更にムスっとした表情を浮かべて、押し黙ってしまう。

「やれやれ……」

雄太は呆れた様に、溜め息を吐き出した。

「……なんだよ」

「お前自身が一番解ってるんじゃないのか？」

雄太の表情は、一変して真剣な眼差しで、言葉を投げかけた。その鋭い眼光は、友成の心の内を貫く様だった。

「……お互いが似た者同士だから、気持ちがすれ違ってしまいうようなことが、良く起きちゃうんだろ」

「……」

「……お前自身が鈍感じゃないのは、俺も知ってる。ただ、ちょっと素直のなるのが苦手なツンデレタイプだからな」

「……ツンデレとか言われたって、解りにくいっての」

雄太に言われた台詞を、友成は屁理屈で誤魔化した。とは言え、その言葉は友成の胸にまぎれも無く、ズシリと押し掛かった。

「まったく……。最近のツンデレヒロインでも、そこまで意地は張らないぞ」

「……俺は、三次元の男だからよ。そんな、ゲームの中の人間と比較なんぞ、されてたまるかっての」

友成は、吐き捨てる様に言葉を出した。そのまま、スクリと立ち上がって、公園の外へと歩き出した。

(……どうにかしたいもんだな)

雄太の視界には、陽炎の中にぼんやりと映る、友成の後姿を捉え続けていた。

同日、夜八時。

駅付近の公園のベンチに、尚紀と椿は居た。

「……そうか。それなら、もう少しで着くね。……解った、待てるよ」

椿は、電話での会話を終えると、パタンと携帯を折りたたんだ。

「京平は何つって？」

尚紀は、タバコを吹かしながら椿に訪ねる。

「ああ。街に入ったから、もうちょつとで着くって言ってたよ」

椿は、嬉しそうにそう言った。

「ふーん。アイツ、迷わずに来れるのか？」

「……アンタみたいに、変な寄り道しないから大丈夫だろ」
椿の言葉に、尚紀は不満そうな表情を浮かべる。

「俺が、何時も寄り道してるみたいな言い方すんなよ……」

尚紀は、ふて腐れた様に、タバコの火を携帯灰皿に押し付けた。
その時だった。

「……見つけたぜ」

二人を囲むように、二十人は居るであろう不良達が立ちはだかった。

「……ほう」

「ふーん。そう言う訳ね」

状況は、見るから劣勢。しかし、不敵な笑みを見せる尚紀と椿は、
囲まれていても全く動じていない。

「久しぶりだな、お前ら」

山下が、一步踏み出して、手に持っていた鉄パイプの先端を二人
に向けた。

「こっちが見つける前に来るとはな。手間が省けたぜ」

尚紀はニヤリと、口元を釣り上げて山下を見る。

「相変わらず、人数使うとか、道具使うとか……学習しないね」

椿は、下種な物を見るような目で、倉田を睨む。

「何とでも言いやがれ。お前らみてーな、バケモノ相手にするんだ。
ありがたく、くたばってもらうぜ」

倉田は、右手に持っていた角材で、肩をトントンと叩く。

「……さてと。そんだけの人数が居るんだから、結構本気で行かせ
てもらうぜ」

尚紀は、羽織っていたライダーズジャケットを、脱ぎ捨てた。

「……ぶっ殺したる」

山下は、右手の鉄パイプを振りかざし、尚紀を目標に特攻する。

更に、それを先頭として、不良達は尚紀と椿を目掛けて、襲い掛か
る。

「オラァ!!」

「――ブンッ!!」

山下の振り下ろした鉄パイプは、空を切った。尚紀は、山下の攻

撃をあつさりと避けていた。

「バーカ!!」

そう罵ると同時に、山下の胴部に蹴りを叩き込む。

——ズドン!!

蹴りを喰らった、山下の体はくの字に折れ曲がる。

「この野郎!!」

別の不良が、尚紀目掛けて更に殴りかかる。

——パシィ!!

尚紀は、そのパンチを掌であつさりと受け止めた。そのまま、ニヤリとした表情で右拳を振りかざした。

——ドゴォッ!!

ぶん殴られた不良は、大きく吹っ飛ばされた。間近で見っていた山下は、ゴクリと生唾を飲んでしまう。

(クソ……。何てパンチ力だ)

尚紀は、不敵な微笑のまま、山下を見下ろしている。

「……クッククク」

尚紀は、低く嘲笑を浮かべた。

一方の倉田は、角材を振り回すが、椿には簡単にかわされている。

「猿回しの猿の方が、まだマシなんじゃない？」

余裕を見せる様に、椿は倉田を挑発する。

「……このクソアマ!!」

怒りに任せて、椿を目掛けて、角材を振り下ろそうとした。

「……!？」

否、角材は振り下ろされなかった。椿の両手が、振り上げた倉田の右手を、受け止めていた。

椿はそのまま倉田の腕を取り、そのままブン投げた。

「……リャアッ!!」

——ドスン!!

倉田の体は、軽々と宙を舞って地面に叩きつけられる。

「……アンタらは、ウチ等には勝てないよ」

椿は見下しながら、強い口調で倉田に言った。

「……コンチクショ」

倉田は、背中をさすりながら、ゆっくりと起き上る。

「……フフフ」

「何がおかしい……」

倉田は、椿の見える含み笑いに、苛立ちを隠せなかった。

「……この喧嘩、ウチ等の勝ちだよ」

椿の言った、その言葉を聞いた時。倉田の耳には、遠くからのエンジン音が聞こえてきた。そのエンジン音は、間違いなく近づいている事を確信した。

「……まさか、アイツも来てるのか？」

倉田は、驚愕した表情で椿を見た。

「ああ。そのまさかだよ」

椿は、お楽しみはこれからとだと言わんばかりに、口の両端が吊り上っていた。

その十数秒後。公園の入り口に、一台のバイクが現れる。自らの存在をアピールするかの様に、エンジンを空吹かしする。

さながら、己を誇示する様な、野獣の咆哮のようだった。

その場に居る全員が、バイクに乗ってきた、ツナギ姿のライダーを凝視する。ヘルメットを外して、降り立った男は、キョロキョロと周りを窺った。

「……カッカッカ。楽しそうじゃねえか」

短髪を真っ赤に染めた男は、開口一番にそう言った。

「遅えんだよ、京平」

尚紀は、不満そうに呟いた。

「遅刻したから、晩飯おごりだからね」

椿も、不平を言っているようだが、表情は明るいものだった。

「んな事言ったって、仕方ねえ。こっちにも、都合っちゅうのがあ

るからよ」

京平は、喧嘩しに来たとは、程遠い口調でそう返した。胸ポケットからタバコを出すと、呑気に一服し始めるありさまだ。

「……舐めんな、テメェ!!」

あまりのふてぶてしさに、業を煮やして、一人の不良が殴りかかった。

——バキィッ!!

不良の放ったパンチは、京平の顔面を綺麗に捉えていた。完全にクリーンヒットしたにも関わらず、京平は顔色一つ変えず、平然としている。

「……なんだ、そのパンチは？」

京平はそう呟いて、タバコの煙を吐き出した。そのまま、右腕を振り上げて、不良の顔面目掛けて、拳を一閃。

——ドガァッ!!

ぶん殴られた不良は、軽々と一メートル以上吹っ飛ばされる。強烈な破壊力を誇るパンチだった。目の当たりにした不良達は、戦線恐々でざわめき始める。

「……オイオイ、マジかよ」

「なんつーパンチだ……」

「でもよ、ここまで来て、逃げる訳にもいかねえだろ!!」

意を決した山下は、鉄パイプを振り上げて、京平に襲い掛かった。

「オラァ!!」

——ブンッ!!

京平は鮮やかに身を反転させて、凶器攻撃をかわしていた。振りかざした鉄パイプは空発に終わり、山下の体が大きく泳いでしまう。

「……甘いんだよ!!」

がら空きになった山下の右腕を、京平は素早くつかみ取る。そして、ニヤリと微笑をみせる。

「……!？」

そして……。

——ゴキイツ！！

京平は掴み取った右腕に、容赦無く膝蹴りを叩き込んだ。山下の右肘から、鈍く痛々しい音が響き渡った。

「うあああ！！」

腕をへし折られた山下は腕を抑えて、地面に倒れてもがき苦しむ。

「……マジで折りやがった」

「コイツら、正気か！？」

何の躊躇も無く、相手の腕をへし折った京平を見て、大多数の不良達は完全に戦意喪失してしまい、既に逃げ腰だった。

しかし、相棒の腕をへし折られた倉田は、黙って見ている訳がない。標的を京平に変えて、真っ直ぐに猛進。

「テメェ！！」

角材で頭を殴ろうと、勢いを付けて振り下ろした。

——パシィッ！！

「残念、ハズレだ」

京平の右手が、振り下ろした角材を易々と受け止めていた。表情は、至って平然としたままである。

「……お前ら、早く山下を病院に連れて行け！！」

倉田は、力の限り叫んだ。

「お、おう」

「……死ぬんじゃねえぞ、倉田！！」

その気迫に圧倒されて、二人の不良が山下を担いだ。そのまま、三人は急ぎ足で公園から出て行った。

「怪我人を先に逃がすなんざ……中々、粋な事するじゃねえの」

角材を握ったまま、京平は倉田を睨み付けた。

「テメェが、アイツの腕をへし折ったからだろうが！！」

倉田は、自ら持つ武器を決して離そうとしない。

「ぶっ殺したらあ……」

倉田の口から、小さく言葉が零れた。

「……生憎だが、お前如きに俺は殺せねえ」

そう台詞を放った京平の表情から、不敵な微笑が消えた。

公園近くの大通り。

美香と由香は、買い物を済ませた帰宅途上だった。

「なあ、由香……」

美香は、由香の持っている買い物袋に、視線を写しながら呟いた。

「お姉ちゃん……。中身は禁則事項なんだよ!!」

由香は、無い胸を張りながら、偉そうに言い返した。

「何が禁則よ。アイスとかお菓子とかばっかじゃない」

美香は呆れかえった口調で言いながら、由香のおでこを人差し指で小突いた。

「えへへ……。美味しそうだったもん」

「……全く。昨日ダイエツトするとか言ってた割に、全然行動がバラバラなんじゃない？」

「うう……。そう言われると、ツライよ」

美香の厳しいツツコミに、由香の表情はシュンと縮こまってしまった。

それを横目で見ながら、美香は再び前に視線を戻すと、涼浪の制服の三人組を見つけた。

「……ん？」

三人組の内の一人は、肩に担がれた状態で歩けないようだ。美香は、ただ事では無い事を即座に察知した。

「アンタら、確か春樹と同じクラスの……」

美香は、急ぎ足で駆け寄った。

「……おう。あんたはたしか……須藤だったよな？」

不良の一人が尋ねると、美香の首は縦に動いた。

「何かあったのか？」

「ああ……。この先の公園で、喧嘩してたんだけど……。相手の連中が滅茶苦茶強くてよ、コイツなんか腕へし折られちゃったんだ」
そう言った不良は、山下を指差した。山下の表情は苦痛の一角に

染まって、息も非常に粗かった。

「……」

「だから、急ぎで病院に連れて行くところだ。ワリイが、俺達は先を急ぐぜ」

手早く断りを入れた二人は、山下を担ぎながら病院へと再び足を進め始めた。

「……ッチ。由香、悪いけど先に帰ってて」

美香は怒声にも似た声で、由香に言った。

「お姉ちゃん……行くの？」

由香は、不安げな眼差しで美香を見つめる。

「安心しな。怪我しない程度で、止めるからよ。心配そうに見つめるなって」

美香は、そう言って笑って見せたが、表情は実に硬かった。

「……怪我なんて、しちゃ嫌だからね」

由香の声は、絞り出されるようで、所々かすれたような声だった。「ああ、解ってるって。すぐに帰るからさ」

そこままで会話を打ち切って、美香は公園へと走り出した。背中に、由香の視線をひしひしと感じながらも、それを振り切る様に走った。

（……大丈夫だよね）

走り去る背中を見つめながら、由香は不安を払拭する様に、大丈夫だと自己暗示を繰り返す。

そして美香自身も、心の内の不安を隠しきれなかった。

「……どうもこいつも、勝手な事ばかりしてるな。アタシも含めて……」

少し、自嘲気味に呟いてしまった。

公園に残っていた全ての不良は、全員が倒されてしまった。

「……こっちは片付いたぜ」

尚紀はタバコを吹かしながら、倒れた不良を見下ろした。

「ウチの方も終わってるよ」

椿は尚紀に返事を入れながら、ジャケットを羽織り直した。

「ったく、アイツは何時まで遊んでるんだ？」

尚紀の吐き出した煙には、呆れの色が混ざっていた。

「しょうがないだろ。アイツ、キレてるとなぶり殺す癖があるし」

椿は口元をニヤリとさせて、視線を別の方へと向けた。視線の先に写ったのは、仁王立ちする京平と、地面に這いつくばっている倉田の姿だった。

「……いっつう」

倉田は、苦痛に表情を歪めたまま、起き上がる事が出来ない。最後の力は、自身の体に伝わってくれない。

「生憎だったな。恨むんなら……」

京平は、倉田の右肘に足をかけて、関節を逆方向に曲げ始まる。

「自分の力の無さを恨むんだな!!」

京平が更に力を入れると、倉田の関節がミシミシと音を上げ、表情は苦悶の一色に染まり始める。

「……ぐああ」

倉田の口から、悲鳴にも似た声が上がる。

そして、京平が倉田の腕をへし折ろうと、より力を込めた瞬間。

「後ろだ!! 京平!!」

椿が叫ぶと同時に、京平は振り返ろうとしたが。

「……!?!」

——ドカァァ!!

横からの飛び蹴りを喰らい、京平の体が吹っ飛ばされた。しかし、バランスを崩した程度で、倒れはしなかった。

「不意打ちとは言え、中々の蹴りだな」

京平は、蹴りを入れた張本人を不敵に睨んだ。

「……アンタは」

倉田が視線を向けた先には、ポニーテール姿のスラリとした女性が、仁王立ちして三人組と対峙していた。

「大概にしときなよ、アンタら」

京平を蹴り飛ばした美香は、強い言葉を吐きながら睨み付けた。

「結構やるじゃねえか、このねーちゃん」

尚紀はそう呟いて、タバコを地面に落とした。

「……カッカッカ。気の強い女は、嫌いじゃねえが……。蹴りいれた分の借りは、返させてもらうぜ」

京平は美香に向かって歩み寄ろうと、足を踏み出した。

（……ツチ。全然効いてないな）

美香は、蹴りのダメージが全く無かった事に、無意識で舌打ちが出してしまった。

「待てよ、京平」

椿が京平を呼びつけて、動きを制止させる。

「何だよ？」

不服そうな言葉が、京平の口から零れた。

「……こういう女が相手なら、ウチの出番だろ」

椿は京平よりも前に踊り出て、羽織ったジャケットを再び脱いだ。

そして、美香を牽制するが如く、鋭く睨み付ける。

「……随分自信あるんだね、アンタ」

美香も、椿を睨み返す。美香自身、椿の自信満々のデカイ態度が、かなり気に食わなかった。

「口で言うより、試した方が早いからね。……来な！！」

椿がクイクイと手招きすると、同じタイミングで美香も地面を蹴った。一気に間合いを縮めて、美香は先制の一発目を放つ。

——ヒュンッ！！

鋭い右ストレートだったが、椿は難無くかわしていた。しかし、美香も攻撃の手を緩めたりはしない。続け様に、左拳を振りかざす。

——スッ！！

（……なっ！？）

美香のパンチは、椿に受け流されて、空を切っていた。

それと同時に、椿と美香の間合いがくっ付きそうな程急接近。何

より、バランスを崩している美香の腹部は、大きく隙を作っていた。
(……ヤバイ)

瞬間的に、美香は察知した。

——ズドン——！！

それと同時に、美香の体に貫く様な衝撃が走る。

「……ッ」

うめき声を出す事も出来ず、美香は地面に膝を付いた。痛みの走る部位をさすりながら、美香は辛うじて声を出した。

「……今の、合気道か何かの技だろ？」

「へえ……。一見で見分けるとか、中々じゃない」

椿は口元を釣り上げながら、嬉しそうな声を出した。

「……ッチイ」

美香はガクガクとする足を、気合で動かして、根性で立ち上がった。

「ふーん……。まだ、やるかい？」

椿は肩をコキコキと鳴らして、美香をジッと見つめる。その瞳は、心成しか嬉しそうだった。

「……当然」

強がるように言葉を出したのだが、美香の表情に余裕のかけらさえも、一片も見当たらない。

(……何とか、捕まえないと)

美香は、再びファインディングポーズを構える。

覚悟を決めたように、椿を目掛けて左拳を振り抜いた。鋭く撃ち出された左ジャブも、椿はヒラリと避ける。

続けて放った、美香の右ストレートを受け止めると、椿は右腕を取って美香の体を投げ飛ばした。

——ドスン——！！

美香は、背中から地面に叩きつけられた。

「……いっつう」

美香の口から、そう零れてしまった。背中を擦りながら起き上る

が、足元がふら付きおぼつかない。ダメージが大きい事がうかがえる。

「まだ立つんだ……。また投げ飛ばすだけだね」

相手の根性に感心しながらも、余裕を見せる椿。その、不敵な笑みを崩す気配は全く見受けられない。

「……何回でも、やってやるよ!!」

美香は、再度地面を蹴って、椿との間合いを一気に縮める。己の拳を、目標目掛けて振るう。

——ガシッ!!

しかし、椿も完璧なガードで。美香の攻撃を一切寄せ付けない。それでも、美香は追撃の手を全く緩めない。

椿の無駄の無い防御で、クリーンヒットは皆無。しかし、美香の攻撃のピッチはより速くなり、内心では焦りが生まれ始めた。

(クソ。何てタフな女だよ……)

そして、焦りが生まれているのは、美香も同様だった。

(チキシヨ……。全然、当たらない)

すでに息は上がっており、美香のスタミナはガス欠寸前の状態だ。これ以上、時間を費やせば、確実に自分がやられる事は承知している。

「ウッラァ!!」

美香は気合一発で、動きの鈍った体に鞭を入れる。椿に照準を定めた、渾身の右ストレートを撃ち出した。

——ビュンッ!!

またも、空発。椿は、バックステップで間合いを広げた。が、しかし。

(……あっ!?)

一瞬の間で、椿の体が大きく泳いだ。転がっていた石に足を引っ掛けた拳句、地面に尻餅をついてしまった。

(ヤバイ!!)

「逃がすか!!」

反射的に体を起こそうとしたが、時すでに遅かった。

美香は椿の体に飛びついて、一気に寝技の体勢に持ち込こんだ。両者が、地面をゴロゴロ転げながら揉みあう間に、美香は椿の腕の合間から、強引に腕を回して、力付くで首を締め上げる。

「ダメ……離れろ!!」

椿は声を荒げ、足や腕をジタバタと動かす。それでも、美香は腕の力を決して揺るめない。完璧に決まったトライアングルスリーパーホールドが、椿の頸動脈をギリギリと締め付けていく。

（……離して……たまるか!!）

美香は、更に腕の力を込めていく。

「……てめ……この!!」

椿は、必死の抵抗を試みるが、美香の絞めは一向に緩まない。

（……落ちろ……落ちろ……落ちろ!!）

祈る様に腕に力を、更に強めていく。

そして……。

「……う……ぐう」

椿の力が、全身から抜け落ちた。ピクリとも動かなくなった椿から、美香は腕を解いてゆっくりと離れた。

「……はぁ……はぁ……」

美香は肩で息を切らせて、椿を一旦見下ろした。

（……かなりヤバかった）

しかし、安堵の息を漏らしたのも、束の間だった。

「……!？」

美香が振り返ると、背後には京平と尚紀が仁王立ちしていた。

（……こっちの女相手してて、完全に忘れてた。一難去ってまた一難か……）

美香は奥歯をギリッと喰いしばった。どうにか立ち上がろうとしたいのだが、足に力が伝わらない。

「……カッカッカ。まさか、椿に勝つ女が居ると思わなかったぜ」京平は、美香を見下ろしながら、豪快に笑い飛ばした。

「大したネーチャンだぜ。今回は、アンタに免じて、引き下がってやるよ。俺等は女を殴る趣味はねーからな」

尚紀がそう言って、グツタリした椿の体を担ぎ上げた。

「……だが、あえて言うっておくぜ。これで終わるわけじゃねえ。また、近い内に挨拶にいくからよ」

京平が、そう台詞を言い残すと、二人が愛用のバイクの方へ歩き出した。

（……全く、とんでもない奴らが現れたもんだな）

美香はへたり込んだまま、タバコを一本吸い始めた。

遠ざかるバイクのエキゾーストノートを聞きながら、肺に溜まった吐き出す。紫煙の含まれた溜め息は、実に深いものだったに違いない。

？

八話 底知れぬ実力（後書き）

忘年会シーズンは、何かと忙しいですね……。中々、予定通りに更新が出来ないもんです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9580x/>

Wild Angel

2011年12月17日19時49分発行